

---

# 絶海のレムリア

気のせい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶海のレムリア

### 【Nコード】

N1263W

### 【作者名】

気のせい

### 【あらすじ】

不自然な社会になるよう意図的に造られた国、絶海のレムリア。現実的に絶対成り立ちえない要素、ありえない要素を詰め込んだ、ユートピアのようでディストピアのような社会。その国の中で、国の外を純粹に見てみたいと願う者、正直そうでもない者達が、外へ探索に出る資格を得るための最初の試験を受ける。

設定のベースはほぼ同じで新しく書き直した物を投稿しました。原版のものはArcadia様にも投稿させて頂きました。

絶海のレムリア 原版・現在編（前書き）

あらすじの物は第三話目に投稿しました「探索士課程試験」を御覧  
ください。

こちらは上記のものを書きなおす前の原版です。

## 絶海のレムリア 原版・現在編

絶海のレムリア。

その大陸を俯瞰すれば、中心点の古風な建物を基点に緑豊かな田畑の風景と人々の住む街々が交互に繰り返される。

その間には川や湖や林や森や山があり、大陸の末端に至ればとうとう青い青い海に出る。

大陸の上空、大気の性質の変わる域内には一つの浮遊島が悠然と存在し、その大陸周囲の空には空を飛ぶ船が鳴き声を上げて飛ぶ鳥達と共に絶え間なく飛び交う。

人々は完全に平等では決してないが、生活に不自由する者は一人たりとして存在せず、街々からは常に人々の笑顔と明るい声が響く。しかし極端なまでにある者のエゴが貫き通された国。

それが絶海のレムリア。

ユートピアでありディストピア、ディストピアでありユートピア。

家は図書館のようで、正しく本屋だ。更に言えば、隣の施設とも繋がっている。

本屋というからには、店内には棚が幾つも並び、どこに目をやっても大抵本が目に入る。

きちんと並べられているその様は、僕が言うのも何だが壮観だと思う。

店内は、天の光を窓からたっぷり取っているが、淡い橙色の光を放つ照明もあり素直に居心地は良い。

大事な客入りとは言え、閉店時以外で客がいない時がまず無く、耳を少し傾けてみれば誰かしら話しているのが聞こえてくるくらいだ。

それというのも、隣の施設と繋がっているから。

お隣さんは正式名称「探索士協会真都第二支部」と言う。

探索士とは、基本的に空を飛ぶ船、飛空艇に乗って遠くに冒険という名の探索に出かけるのを正式な職業とする人の事だ。

彼らが探索士協会に用があつてやつてくる時は、大体家の店にも用があり、またその逆も言える。

もちろん図書館のような本屋だから普通の客も多く賑わっている方だ。

そんな中、僕はいつも通り。

修学館で今日も授業を終えてこの自宅兼店に帰宅してから、一階に比べると静かな二階のカウンターでひたすら色々読み漁っている。カウンターには濃緑色のエプロンを着た少年の他もう一人同じエプロンをした従業員がいて、丁度客の対応をしている所へ、更に別の男が近づいてきた。

「よ、坊。読んできるとこ悪いが、エステス湿原へのルートにその生態と地形情報が欲しくてな」

「お構いなく。エステス湿原なら……」

顔を上げて言いながらメモに素早く幾つか走り書きをして、それをふわりと浮かせる。

「この辺りをどうぞ」

「助かるよ。じゃ」

男は浮遊するメモを受け取り、空いてる片手を軽く上げて目当ての本棚へと去っていった。

それを見送ると、また途中の本に目を落とす。

少年は再び軽快にページをめくり始めると、客の対応を終えた従業員が声をかける。

「ユイス君ほんとに良く覚えてるね」

「慣れてるので」

「それでもその記憶力は凄いよ。将来はどうするの？ やっぱここです？」

従業員は左手をカウンターの棚に翳し、身長の二倍ぐらいある高さから一つ冊子を抜き出しながら感心して言った。

「うーん……好きで本読んで手伝いもしてるけど、将来って言われると何だかぼんやりして。修学館に通ってる時点で余り考えてないようなものですけど」

「そっかぁ。でも、ま、なるようになるよ。私もその修学館上がりだし」

「はー、と苦笑して従業員は手元に届いた冊子をぱらぱらとめくる。

「そう、ですかね」

果たして、僕はこのままなるようになるのだろうか。

レムリア真国では国民は一律に八年間の基礎教育を初学館で学び、それを修了した後は主に収穫館、技工館、専士館など……に進むが、僕が選んだのはそんな幾つもあるうちの修学館。

修学館とは、何となく勉強を続ける人が行くような、正直言ってみ立った専門性の無い所と言われている。

基本的に最も高収入で安定している収穫士ハーヴェストになる収穫館が一番人が多く、それ以外が似たり寄ったり。

僕が修学館に進んだのは様々な分野の情報を得られるのが家に似ていたから。

なるようになるすると、修学館を修了したらそのまま家で働くのが一番ありそうだ。

「よつす、ユイス！」

元気な呼び声が響いた。

一階から階段を無視し勢い良く空を飛んでユイスのいるカウンタ―目掛けて全身を革製の服で包み、額の辺りにゴーグルをずらした少年が現れた。

「一昨日出たっていうカイル・メル・テルの探索記取ってくれてるか？」

カウンターの前でぴったり床に着地した少年は活きの良さそうな

パツチリとした目を輝かせる。

「ハーツ、その前に店内でそんな速く飛ばない」

ユイスは反対にげんなりした目でたしなめた。

「すまんすまん。……で？」

「……あるよ。ほら」

ユイスは諦めて椅子に座ったまま右手をサツと動かし、後ろの棚から一冊を抜き出して目の前へと寄せる。

「おおー！ 来たあ！ ケセンデム浮遊島探索記！ 内容言つなよ、ユイス、絶対だかな」

人差し指を突きつけて言った。

「はいはい」

「よっし。失礼！」

人の返事をまるで聞いていなさそうなハーツはワクワクを全身で表し、カウンターにひよいと飛んで乗り込みユイスの隣にあった丸椅子に座り、探索記を開いた途端完全に黙った。

その様子を横目に見ていた従業員はくすりと笑い、ユイスは無言で仕方ないなあとハーツを一瞥して自分の本の続きを読み始めた。

ハーツが目皿のようにして探索記一冊をじっくり読み終える間、ユイスはやってくる客に尋ねられればそれに答えながら数冊の本を読み終えた。

ハーツがパタリと本を閉じ、息を吐く。

「はあー、俺も行つてみたいな」

「そう言ってる割にハーツは飛空艇の技工士、と」

「だって俺手先は器用だし、どうせ探索士になるんだったら先に飛空艇熟知した技工士になっとけば単独探索もし易いって言うしさ」

「カイルと同じようにって？」

ハーツは丸椅子に両手を合わせてつき前かがみになる。

「まあーな」。ユイスこそ下手しなくても並の探索士よりも探索記読みまくってるだろうけど、読んでは事は探索士に興味少しはあるだろ？」

ユイスは天井を見る。

「無い訳ではないけど、なりたかったっていうとやっぱり違う気がする。人生130年、探索士はなあ……」

探索士はレムリア真国で最も危険な職業だ。

「ま、それは俺も同じで先に技工士を選んだ。職人技つてのも燃えるぞ」

「ハーツはそういう所良いよね。……同じ年でどうしてこう、やる気が違うんだろう」

「いや、ユイスはやる気はあるだろ」

ハーツがゴーグルに触れながらはあ？ という顔を見ると、ユイスはあ？ という顔をする。

「どこが？」

「どこっていうか、本を読むやる気。普通無理だろ。何その本の山しかも全部覚えてるだろ？」

ハーツはユイスの近くにある本の山を指さした。

「本を読むのは癖みたいなものだからやる気とか、何も出してるつもりは無い。覚えてるのは、おまけ、かな。多分覚えてなくても僕は文字を読み続ける気がする。『お前から記憶力取ったら何も残らないよな』なんて言われた事あるけど、実際その通りだと思うし」

「それ、言った奴が僻んでるだけだろ」

顔を顰めたのを見て、ユイスは爆笑する。

「それ、言った奴はハーツだから」

素っ頓狂な声上がる。

「うえ？ 俺かよ！ いつよ？」

「五年前」

くつくつと笑いながら答えた。

「んなの覚えてねえよ！」

「ハーツは仕方ないなあ」

ハーツがため息を吐く。

「そりゃ仕方ねえよ。僻んですいません。……はあ……ま、確かに



ユイスと本を離すとか無いなあ。でも敢えて言うが、あれは違うこれは違う気がするとかやってもいないのに言うのはどうよ？ そんなだったらハーヴェストか……でなきゃ真逆で国営士にでもなれとレムリア様は言いそうだぜ」

「ハーヴェストはまだしも、国営士はそもそも自発性が無いようじやね……」

国営士はレムリア真国において国家権力を持ち、最も安定した低収入が得られ、出世すれば出世する程収入が減るという……そんな国営に携わる職業だ。

収入について文句を言うぐらいならハーヴェストになれというのがこの国の暗黙の了解。

自分が国を支えているという強い自負を持ち、社会に貢献している事に対して対価を求めない清い心を持っていないと、まずやってられない。

それでも毎年一定の人が国営士となるからこそ、この国は成り立っている。

色々な人がいるんだなあと思う。

「そうだけど。その割には、ユイスは今も図書館の国営士みたいな事やってると思うぜ」

「どうだろ。本を報酬とすれば前受けして、返してるような気がする」

「何でまたそこで屁理屈みたいな事言うし。まーいいけど」

こんな風に修学三年目、十五歳の僕は日々このまま後三年間過ごすのかとこの時心のどこかで思っていた。

次の瞬間、一階からどこからどう見ても最高に最低限文化的な制服を完璧に着こなす国営士が現れるまでは。

それは僕の曾祖父だった。

白一色の髪をしたユイスの曾祖父のその厳のような表情は一切揺らがない。

「久しいな、ユイス。お前に文だ」

どん、と響く重い声だった。

思わず慌てて立ち上がり、差し出されたその封筒を両手で受け取る。

「は……はい。久しぶり……です、大爺ちゃん」

その空気にハーツは声が出ず、隣の従業員も驚いていた。

「ユイス、『後で』まず一人で良く読み……充分考え返事をするように。ではな」

言って、ユイスの曾祖父は見送る暇も無くあつという間に去っていった。

取り残されたようにぼうつとするユイスにハーツが声を絞り出す。

「なあ、その手紙……つまり、国からお前に……？」

「ん。ああ」

我に返って封筒をよく見ると差出人は確かにレムリア真国だった。

「……国だよ」

レムリア真国は周囲を海に囲まれる単一大陸に、その上空の浮遊島「空の丘」を国土に加え、ただ唯一存在する絶海の国だ。

真国はその中枢であるレムリア真殿を中心としてそこから同心円状に、農地、生活区、農地、生活区、農地……と繰り返して広がっていくような基本的に造られ、それに従い標高も徐々に下がって海へと近づいていく。

もちろん真殿から離れば離れるほど山林、河川や湖などがある為に例外的なパターンも増えていくが、一つの生活区毎に街を形成していると言え、真都自体は真殿から第三生活区までを指す。

真殿の建つすぐ裏側には扇状約六十度にレムール山脈と呼ばれる広大な岩山が存在し、真殿はこの山脈を利用して麓に造られているという。

そして、レムール山脈の真上、地上の引力の正常に働く常気圏の

更上、外気圏という無重力域に、微重力を発する「空の丘」が浮かぶ。

「空の丘」には正規の生活区は存在しないが、そこは主に探索士達の駆る飛空艇の外気圏用発着場であり、彼らの空の拠点だ。

そんな頭に入っているだけの事をふと確認しながら、国営士を指してもいなかった、修学館に通い記憶力が取り柄の言わば本の虫の僕に、この国の中枢は何の用があるのだろうかと思議でならない。曾祖父から封筒を受け取ったあの日から六日後の今日、届けられた最高に最低限文化的な、質素を極め尽くした制服を着て、指定された時刻に間にあうよう僕は真殿の通用門に到着した。

別に緊張した足取りで歩いてきた訳ではなく、第二生活区に住む僕は地上から膝丈程度の高さで低空飛行する真殿行きの輸送艇に乗って、でもやっぱりずっと緊張したまま座ってやってきた。

というのも、僕以外にも同乗者は当然いて、その殆どが国営士の服装をしていたからだ。

見かけない怪しい奴だ、と誰かに話しかけられるのではないかと思っていたが、結局その心配も無意味で、僕を一度見た後はそれきり国営士の人達は僕を気にも止めていない様子で、その目にも何か含むような物も感じられなかった。

第一生活区を抜け、緑豊かな農地に入るといよいよ荘厳な真殿の外観が視界に近づき、国は色々最低限文化的と言われていても以前見た事もあった通り、国の中枢の建物は流石にとても文化的だった。輸送艇から降りると、同乗者はさっさと通用門で身分証明して次々中へと入っていった。しまった。

一人残される形になった僕は手紙に同封されていた通用証を恐る恐る取り出し、衛士にそれを見せた。

「通りなさい」

そう、衛士はその一言だけを簡潔に言った。

まだ子供にしか見えない、事実子供の僕を大して気に止める様子も無しに。

言われるままに通用門を通るとすぐ右手に真殿の入り口が見えた。一見何の装飾も施されていないすらりとした石造りの柱は近づいて見れば異様に精密な幾何学紋様が彫つてあり、地味に凝った意匠が施されている。

初めて門より先の中に入った僕は、ついつい目移りする割に同時に緊張し続けたまま、とうとう建物の中へと足を踏み入れた。

中は天井高く広々とした空間が広がり、思わず見上げてしまった。はた、と我に返り、落ち着いて息を吐きながら改めて見渡すと、中央通路の脇に酷く質素な机が整然と並び、それぞれの机の立て札の中に「総合案内」と書かれたものが目に入る。

ユイスはいつもとは逆の立場ながら、営士に無難に尋ねると通用証の提示を求められた。

それに従って通用証を提示すると、受付の女性営士が立ち上がり、「案内します。こちらへ」と手で示した。

「分かりました」

ユイスは案内に従い、大広間の中央通路の先へと進み、少しして途中脇通路を曲がる、階段はあっても無視して飛び上がる、そしてまた再び通路を歩くなどして……ややあって一つの扉の前に到着した。

「扉は叩かずそのまま中へ」

そう言われ、ユイスは営士の案内はここまでで、中に入りはしないのだと察した。

「案内頂きありがとうございます」

礼を述べて、ユイスは扉をゆっくりと開き、中へと入る。

「失礼します」

言って、頭を下げた。

「よく来たな」

聞き覚えのある重い声を聞き、頭を上げるとそこにいたのはユイスの曾祖父だった。

「大爺ちゃん」

呼んだ瞬間、咳払いを返される。

「……ここでは今からナリサ士官と呼ぶように」

「は、はい。ナリサ士官」

ちよつと戸惑いユイスは呼び直した。

「それで良い。少し待て」

ナリサは部屋の奥の幕へ向かい、顔を覗かせて何か小声で呼ぶと、すぐに元の位置に戻る。

部屋はそれなりの広さがあり、幕の前には背もたれのある質素な椅子が三つだけ用意されていた。

幕がめくられ現れたのは、すらりと背の高い儼かな存在感を放つ壮絶な美人だった。

柔らかな余裕を持った袖と裾のある白一色で統一された、それでも簡素な服に、煌めく長い白銀の髪と透き通るような青い目が映える。

「れ……レムリア……様……？」

ユイスは信じられないものを見たように呟いた。

「その通りだ、ナリサの曾孫よ」

心底不敵な笑みだった。

「レムリア様に名を」

「は、はい。……ユイス・リンドルスと申します」

ナリサに促され、若干混乱しながら頭を思い切り下げて名を名乗った。

「頭を上げよ。良くぞ来た、ユイス・リンドルス。二人共座れ」

言って、レムリアが席に着くと、それからナリサもレムリアの左手側の席に座り、

「御意」

「失礼……致します」

最後にユイスはレムリアの向かいの席に座った。

「お主を呼んだのは私だが……まず幾つか質問をする。それに答え

てみせよ」

「……はい」

緊張して答えると、レムリアが頷く。

「では始めよう」

本当にいきなりだった。

曾祖父から良く読むように言われて受け取った手紙には「できる限り、真殿に來られたし」と良く読めという割に大体そのような感じにしか書かれていなかったが、滅多に無い事に少し興味が沸いて「行く」と返事を出して……来てみたらこんな事になるとは思いもしなかった。

「真歴739年、主な出来事は」

「現在に至る基礎教育の制定です」

「真歴910年、メルキアス島で発見、調味料に使われている植物の花弁の数は」

「六枚です」

「真殿の入り口からこの部屋までに通った階段の数は」

「……三十八段です」

次々記憶力を試すような質問をされ、僕は覚えている事を答えて行った。

「……話通りか。お主、何故修学館に進んだ」

「家に、本屋の家に一番似ていて……一番本が読めるから……です」  
結局は何となく消去法で選んだような理由を、よりにもよってレムリア様に言うのは、酷く気が引けた。

「読書は好きか」

「はい」

「仮に、延々と一人読書し続ける職業があったとして、やりたいか」  
「それは……本当に、ただ読書するだけの職業ですか？」

「そう考えて良い」

聞いて、直感的にそれは違う気がした。

「それは……やりたくありません」

「……お主の本を読む行為の心の根底には、何がある」

この問いに、本を読むのは癖だ、などと答えてはいけないのだと思った。

自分の心に問いかけると、レムリア様はそう言っているのだと…

…。

「すぐには答えられぬか」

「申し訳ありません」

「良い。ならば私が一つ当てて見よう」

手で制し、不敵に笑った。

「え？」

「お主は、この国が、この世界が、何故『こう在るのか』……それを知りたいのではないか？」

心の奥まで見透かされるような透き通る青いその目は、どこか妖しげで、それでいてどうしようもなく魅力的だった。

「さて……お主を呼んだ理由を話すとしよう」

「あの、答えなくても良いのですか？」

「ん。答えなければ答えて良いが？」

「あ、えつと」

ユイスが慌てると、レムリアは軽く笑い声を上げて言う。

「その様子を見るに全てとは言わないが、あながち外れてもいない

……という所であろう？」

「……は、はい」

レムリアはいきなり立ち上がり、ずい、とユイスに近づき、頭に手を置いて口を開く。

「ユイス・リンドルス、ナリサの後を継ぐ気は無いか」

「大、ナリサ士官の後を……？」

思わずユイスは上体を後ろに倒そうとするが、頭を掴まれそれは叶わず、更にレムリアは顔を近づける。

「本人の意志を可能な限り尊重するのがこの国の理念、私の思想。無理は言わない。だが、これは私からの頼みでもある」

答えを、と促すようにじっと見るレムリアに、ユイスは口をぱくぱくさせるばかり。

ナリサがやや諫めるように声を上げる。

「レムリア様」

それでレムリアはユイスからすつと離れ、席に戻った。

「……本を読み続けるのもそれはそれで構わぬ。いずれ修学館を終了すればどこかしら、例えば家でお主は正式に働き、人の為になる事をするだろう。しかし、私はお主を必要としている」

レムリアは含みを持たせて言い直す。

「いや、私達はお主を必要としていると言った方が良いか。のう、推薦人」

「はい」

ナリサが首肯した。

しばしの沈黙。

「……あの、具体的にナリサ士官の後を継ぐというのは」

レムリアが手で制止する。

「私として説明したいのは山々だが、残念ながらこればかりは『受ける』とお主が答ええない限り何も答えられぬ。このような事前説明の無い話など碌でもないのは承知の上。危険そうだ、怪しい、怖い、そもそも受けたくない……そう思うなら素直に『受けない』と答えて貰いたい」

そう、レムリア様は言ったが、正直、この時も僕の心のどこかで答えは出ていたのだと思う。

例え、日常を失う予感がしたとしても。

「受けさせて、頂きます」

レムリア様。

このレムリア真国がレムリア真国と呼ばれるその最大の所以にし



て、起源にして、頂点にして、不変にして、絶対の存在。

レムリア様が持つ名は、その唯一レムリアという字だけだ。

国民には必ず字と氏が存在し、子供が満19歳で成人する年に「間」と呼ばれる名を本人が自分で付け、字・間・氏の三つを以後正式名として名乗る。

レムリア様が字だけを持つのは、レムリアという名を持つのがレムリア様ただ唯一であり、それこそがレムリア様がレムリア様たる事を絶対的に示しているからだ。

僕がレムリア様を初めてかなり近くで直接見たのは、5歳になって入学したばかりの初学館に新人生への言葉を下さりにレムリア様が現れた時の事だった。

僕にとって、いや、殆どの子供にとってだろうか、圧倒的存在感と壮絶な美しさというものをあの時初めて感じたと思う。

五歳にして一目惚れしたと言っても良い。

それ以来、一年に一度催される大地の恵みに感謝する為の真国祭で遠目に、歴史書の絵や近年の歴史書では写真で見たりしたものだ。本当は本ばかり読んでいないで外に出ていれば、仮にも真都第二生活区、レムリア様が飛んでいる姿、運が良ければ近くで、もっと見る事もできたかもしれないが。

そして、記憶では今年で136歳になる僕の曾祖父ナリサ・エリア・エサリア。

人生130年のレムリア真国において、曾祖父母、場合によっては高祖父母までいる事は十分普通にある。

単純に曾祖父母というと8人、高祖父母となると16人いる事になり、当然親類縁者だらけという事を意味するが、僕の曾祖父の一人であるナリサについて言えば、本当にたまにしか会わない。

それを言ってしまうと曾祖父ナリサの妻、つまり僕の曾祖母は「空の丘」で今も飛空艇の技工士として働いているとは聞いているが、曾祖父よりも更に会った事は少なく、寧ろ技術書の著者として名が載っているのを見る方が多いぐらいで、ついでに言えば「空の丘」

には僕は行った事もない。

殆どの子供は行ったことがないのが普通だが。

ともあれ、曾祖父ナリサが真殿に勤める国営士という事は知ってはいたが、流石にレムリア様の側で働くような、それこそ極めて安定した最低辺の収入で働いていそうだと容易に想像できるような奇特な人だとは思ってもよらなかった。

「その言葉に二言は無いか。引き返すならば、ここが最初で最後だ」  
怜悯な表情だった。

それでも、僕の心は決まっていた。

「ありません」

しばしの静寂が訪れる。

怜悯な表情でユイスを見ていたレムリアがその沈黙を破り、口を開く。

「……良く言ってくれた、ユイス・リンドルス。ナリサよ、お主の見積もりは当たりだったな」

「はい」

「いや、百余年の昔のお主に似ていると言った方が良いか」

レムリアが顎に手を当て微笑を浮かべ、ナリサが眉をひそめる。

「故に、同席をと」

「昔の自分を見たような感想はどうか」

「懐かしいと一言」

どつしりとナリサが言い、ユイスは突然場の空気が何だか和らいだ事に違和感を覚えるが、レムリアは顎に手を当てたままユイスを見て苦笑する。

「そうか。しかし、最初の死んだ魚のように生気の無い目以外容姿は余り似ていないな。それも当然だが実に可愛らしい。おや、何の間抜けな顔をしている。私は感情が素直に伝わるよう話す事を出来る限り常に努めている」

けなしているのか、誉めているのか分かりにくい言葉にユイスは凹もつか嬉しがろうか微妙だった。

「は、はあ……」

レムリアは苦笑から一転、含むような笑みを浮かべ、立ち上がる。「いずれにせよ、言ったからにはお主はもう後戻りできぬぞ。では移動だ。我らに付いてこい」

突然かなり軽くついて来いと言われてからの移動は何だか忙しかった。

レムリア様が現れた幕の奥の部屋にある扉から出て、早足に廊下を歩いては何度か曲がり、階段を無視して飛んでは、奥へ奥へと進んでいるのは分かったが、どういう訳か部屋から出て少しの間は他の営士の姿もあつたが、ある程度進んだ辺りからめっきりその姿を見かけなくなった。

「さて、この辺りで駆け足で行くぞ」

極めつけに駆け足になった。

既にかかなりの早足だったので寧ろ駆け足に切り替わって楽になったが、まさか国の中枢である真殿内を駆け足で移動するのがさも当然というレムリア様と曾祖父を見る事になるとは予想できる筈もない。

奥に進み続け、左右に長く伸びる通路に着いた。

大分高い所に来ている感があり、それを証拠付けるように、天井からは外の光が差し込んでくる。

その明るい通路の大分中途半端な位置で、レムリア様が壁に手を翳すと壁面が音もなく動き、更に奥へと進めるようになっていた。

と思えば、中に入ると更に三度壁面を動かして奥へと進み、その次は階段も何も存在しない綺麗にくり抜かれたかのような岩の空洞を真上へ飛び上がった進んだ。

上がり切った所は大きく球体状にくり抜かれ、そこが再び地面と並行に進める通路との合流地点の為、激突を防ぐようそうなっているのだと分かった。

今度の突き当たりはすぐ訪れ、レムリア様はそこで僕に振り返り、

手を翳して壁を動かしながら言った。

「レムリア真殿九院室へ、ようこそ」

その中は、普段見る事のある機械類より、確実に更に高度な技術が使用されていると思われるものが大量にあった。

目を奪われている間もなく、レムリア様は僕をその場にいる人達に紹介した。

「皆、新入りのナリサの曾孫だ」

「ユイス・リンドルースと申します」

ひとまず簡潔に九院室の面々がユイスに自己紹介した後。

ユイスはレムリアに連れられ、九院室の一室に移動した。

木造、石造りや金属とも異なる、穏やかな光沢を放つ素材で一面統一された室内。

レムリアが徐に机に置かれた機械装置を操作すると、巨大な画像が室内空間に投影される。

「そこへ」

「はい」

既に移動する前にユイスはそれと同じものを見ていたので、無為に声を上げる事も無く言われた通り椅子に座った。

レムリアはふわりと浮いて、ユイスと画像の両方が見える位置でゆっくりと口を開く。

「……ここがレムリア真殿九院室、見ての通りこのような技術が存在する」

ユイスは黙って頷き、レムリアは淡々と説明を続ける。

「国民一人一人が必ず異なるクアン反応を持つ事を利用した全国民の情報統括システム。これ無くして今のこの国は成り立ち得ない。詳しい仕組みは知らなくともこのシステムの存在は皆把握し日常的にも利用し恩恵を受けている故、それ程驚くことでもあるまい」

「……はい、それは。家の本屋でクアンを使った売買取引が無い事は逆に想像しにくいです。わざわざ紙幣を持ち歩くより皆身一つク

アンで済ませるのが常識ですから」

クアンとは人が普通に空中を飛んだり、遠くの物を同様に浮かして動かす時に使うレムリア真国の国民全てが持つ力の事を言う。

レムリアが頷き、ユイスを見る。

「その通り。さて、ナリサの後を継げという具体的な説明をしよう。まず、この九院室の存在は真殿の営士は皆知識として把握している。この九院室は入り口であの様だが、更にまだ奥にお主は見たことのない物がある。そして、九院室で必要とする人員は文字通り9人で充分、他にも似たような別働隊が存在するが……そういう事だ。仕事は腐るほどあるが設備がある限り問題ない。ここで重要なのは外部への無為な情報漏洩の防止。知つての通り、ナリサは今年で136を数え、引退が近い。その交代として適切な人員を探さねばと思つていた所、ナリサがお主を推薦したのが今回の真相という訳だ」

その流暢な説明にユイスは大きく頷く。

「良く、分かりました」

満足そうにレムリアは微笑む。

「よろしい。何か気になる事、質問はあるか？」

ユイスは少し目を泳がせて尋ねる。

「えっと、では……。ナリサ士官が推薦したから、というのは分かりましたが、成人してもいないのは良いのですか？」

「ふむ、はつきり言つて、仕事ができ、人格的に問題無いなら若ければ若い方が良い。そも、この九院室は既に今の9人体制になるまでに数百年脈々と続いてきておるが、その交代は基本的にそれこそ百年単位で行っている」

ぱかっと口を開き平然と隠された歴史を暴露され、ユイスは違和感を覚えた表情をする。

「……なるほど。できるだけ交代の回数は減らしたい、という事ですか」

「それもあるが……実の所、ナリサは本当に引退するまでこれからお主に仕事を直接教えられるというのが大きい」

「ああ」

「ナリサ以外の他の8人も大体親類で継いでおる。ナリサもお主と似たようなものでナリサの高祖母が推薦してここに入った」

それを聞いてユイスは遠い目をする。

「大爺、ナリサ士官の高祖母……七代前……」

「そういうこと故、ナリサからしつかり学ぶように」

「はい。……あの、九院室ができる前は一体どうされて……そもそもここはどのように……？」

謎だらけの事を続けて尋ねると、レムリアが楽しそうに笑い声を上げて言う。

「お主、やはり知りたい事だらけじゃなあ。……何を隠そう、私が全部造った」

不敵に微笑みながら言うレムリア様は、正しく起源にして、頂点にして、不変にして、絶対の存在だった。

こんな機会が訪れるなんて夢にも思っていなかったが、僕はレムリア様に聞きたいことが山程あったのだ。

歴史書を紐解けば、レムリア様は真国起源以来、民草に数多くのものを授けて下さったとされている。

その中でも今を生きる真国民が特に恩恵を受けているのは、レムリア様の名の下に、成人し働く全国民は職業により差が設けられているが「絶対給」と呼ばれる労働の対価としての報酬を授けられる事だろう。

この報酬は具体的な物、形として受け取るものではない。

国民一人一人のその身体に、具体的に感じ取る事はできないが、必ず授けられているものだ。

それを確かめるには「クアンリーダー」と呼ばれる個人のクアンを感知して反応する、一般に広く普及しているものが用いられる。

人がそれに軽く手を触れると現在の保有資産額の数字が浮かび上がり、確認ができるのだ。

それが一般的に商取引の決済手段に応用されていて、それを裏から可能としているのは、人によって必ず異なるクアン反応には名前、年齢、住所、所属、職業などの様々な情報も記録されているからだとされている。

クアンリーダー自体は物理的にいじっても情報がどう記録されているのか、その詳しい仕組みは国民には分からない。

それでも利用方法は至って簡単であり、レムリア様が造り授けて下さったこの英知は全国民が享受していると言って良い。

そして、それら全てを統括する場所である九院室をレムリア様は「私が全部造った」と言ったのだ。

それを聞いて、ああ、やっぱり当然そうなのだと納得した。

けれど、新たに沸き上がった興味を抑えられず、どうやって造ったのですか、と期待を込めて更に聞いた。

レムリア様は苦笑いをして、少し困ったように答えた。

「……お主の質問に答えるのもやぶさかではないが、かなり時間が掛かりそうな故、今一番聞きたい事を一つ申してみよ」

ハッとした。

レムリア様してみれば僕の質問がいつ終わるのか分からないのだ。

そして、僕も聞けば聞くほど新たに疑問が増えて、恐らく終わりが見えないだろう。

小さい時、何を見ても、あれは何、どうなってるの、どうして、と家族に聞き続け「なら本を読みなさい。丁度家は本屋だから」と言われてそこから僕の今までの日々が始まったのをよもや忘れる訳がない。

「申し訳ありません。では、お言葉に甘えて一つ。……『真暦起源年、レムリア様は空の丘と共に始まりの民を導きこの地に降り立った』と歴史書には書かれています。一体どこから……来られたの

ですか」

問いかけをした、その瞬間のレムリア様の表情は本当に本当に遠くを視るようだった。

「遙か、遙か遠くの空から。……このような答えで、満足できるか」

「……はい……」

それを目にした僕は頷くしかなかった。

「そうか。他の事は、また、追々時間のある時に少しずつ、な」

その後、レムリア様は真殿正規の執務室へと戻られ、僕は言われた通り九院室の入り口、情報統括室と呼ばれるその場所で改めて挨拶をしてから、曾祖父の横で九院室について、ここでの仕事と生活について、初めて触れる機器の使用法について、説明を受けた。

九院室はレムール山脈内部に構築されており、ここでの仕事は九人で十分とされているものの、この施設の全貌は非常に巨大かつ複雑、更に連れられてやってきた道順が唯一の物という訳ではなく、他の場所にも出入り口が存在する。

それを全部造ったとレムリア様は簡単に言ったが、今に大きく伝えられている数々の伝説のような過去の厳然たる事実を思えば、疑いの余地は無い。

九院室の仕事は大きく代表的に三つ。

一つ目が国民の個人情報統括。

全国民のあらゆる情報の統括、新生児の出生や死亡した国民の情報処理など。

二つ目が全国民及び国に申請を受理されている農商工店の保有資産及び収支の管理。

レムリア国民の経済面での生活支援の根幹を為している。

三つ目はクアンとは直接関係無く、レムリア真国の様々な情報を収集し、国の状況をレムリア真殿の正規情報部とは別口で九院室の設備を利用して把握できるようにする事。

とりわけ九院室ではレムリア様の要望もあつて探索士の動向や飛



空艇到達地域の正確な情報を収集する事が求められている。

生活において、九院室の構成員には真殿付属の士官宿舍、末端の方の部屋が割り当てられているものの、九院室の生活環境は整っている為に無理に移動する必要は無い。

欠点があるとすれば、外の自然光を採光できない閉ざされた空間である事ぐらいで、それゆえ定期的に外に出た方が良い。

機器の扱いは見ればその分全て覚えられるので特に問題なく、今の所九院室でしか役に立ちそうにない専門用語も覚えた。

この日初めての説明を受け終えた後、曾祖父と共に本屋の家へと帰路についた。

両親と二つ年上の姉は僕を見て何か驚き揃って「目の色が生きている」と言った。

レムリア様にまで「死んだ魚のように生気の無い目」と形容されてしまい、確かに日頃から似たようなことを色々な人から良く言われてはいたが、多分明らかにやる気が出たのが変化の原因だろう。

それもあってか、僕が曾祖父の元で準国営士としてレムリア真殿に生活の基盤を移す事について、詳細は営士の秘匿義務で話せないとなればかりの、要するに何も家族には分からない曾祖父の説明でも、そもそも今更選択肢はないのだが特段反対される事も無く、僕の九院室入りは確定した。

ただ、母は僕がカウンターで手伝いをしながら本を読むいつもの光景が無くなるのを思うとやっぱり寂しいと言って、それが僕には何だか嬉しくて、輸送艇に乗れば家とレムリア真殿は遠いとも言えない距離だからちゃんと定期的に家に帰ろうと、そう思った。

僕の正式な九院室生活は準備を考え四日後からとされ「何か真殿に持っていきたいものがあれば、制限はあるが持ち込む事もでき」と曾祖父に言われたが、僕の場合「なら毎日新刊されるものも含めて家のまだ読んでない本全部」となってしまいそんな事口が裂けても言えないので、結果的に生活に最低限必要な僕の衣類を携えるだけに留まった。

それからの三日を、四日後にレムリア真殿九院室に移動するまで大して準備する事も無いユイスは「できるだけ目立たないよう生活する事。修学館の方は手配しておく」と曾祖父に言われた通り修学館には普通に三日通い、授業が終われば本屋である家の読んでいない本で優先的に読みたいものを読んで過ごす事に決め、結局ギリギリまで生活は変わらずじまい。

その三日目。

修学館での授業を終えて帰宅してから本屋で普通に本を読んでいたユイスは、はどこであるハーツが探索記を読み現れた所で、自分の部屋に移動することを提案した。

元々家の殆どを本が占めているが、ユイスの部屋も同じように殆どが本で占められていた。

慣れていたハーツはそれには何も言わず、二人は丸いテーブルの間に挟み床に座った。

ハーツは頭につけていたゴーグルを磨きながら尋ねる。

「で、ユイスから部屋行こうってのは珍しいけど何？」

「明日から僕この家出て大爺ちゃんのとこで生活することになったから。一応ハーツには丁度来たし言っとこうと思って」

ハーツが手を止める。

「あ？」

「あ？」

ハーツの声にユイスはわざと返した。

「……あー、あれか？ この前の国からの手紙？」

「そうそう。国の秘匿義務のあれで、正直言えるのはいなくなるからって事ぐらいだけだ」

「へー。って明日かよ！ いつ決まったし」

「三日前」

「えー……」

「ええ」

微妙な目をしてハーツが言う。

「……唐突だな。しかも、今日俺来なかったらそのまま会わずにばいばいだった？」

「それは素直に危なかったと思う」

ハーツはユイスが抱えてる本を指さす。

「つか引越すのに、お前何普通に本読んでんの？ 近所とかに言った？ それより俺のところに言いにこいよー」

「そこは、国のアレだから目立つと駄目、って大爺ちゃんに言われてるから」

「あー、そういう事。じゃあ詮索しても」

「ならお帰り下さいって感じ」

「やっぱ？」

「うん」

即座に頷いた。

「……ホントお前あっさりしてるよなー」

ハーツは両手を床につけて上体を後ろに倒す。

「見た目程あっさりしてはいないつもりだけど」

「あれ、今気づいたけど、目が生きてる？」

突然ハーツは話題を変えた。

「その反応飽きたよ」

「皆に言われ済みってか。……にしても、冗談で言っただけが本当に国営士になるのか」

「僕も驚いた」

「ま、全然良く分かんねえけど、頑張れ」

「どうも」

「けどちょい困るなあー、新刊の探索記とか」

ハーツは腕を組みうーんと唸った。

「買え」

「お前もな」

「あれ、返す言葉が無いや」

「ざまー」

そこへ、部屋の扉がノックされる。

「はい、どうぞ」

ユイスが聞こえるように返事をする、扉が開き、

「しつれーい。お姉様です」

右手を挙げて全身を革製の服で包み、首にゴーグルをぶら下げたハーツと似たような格好をしたユイスの姉、ネネコが軽快に入ってきた。

「お姉様ちいっす」

「ハーツちいっす」

仲良いなあ、と思いながらユイスが普通に言う。

「どうしたの姉ちゃん」

ネネコがユイスの隣に座りながら言う。

「えー？ 入って来ちゃ駄目ー？」

「いいえ？」

バシ、バシ、とユイスの頭を本人は可愛がるつもりで平然と叩きながら言う。

「まーまー、動く図書館みたいな弟でも明日からこの家からいなくなるとなると、あたしもお母さんと同じで寂しーなっ」

「それは、何だか、嬉しいなっ？」

叩かれながらオウム返しのように言った。

そこでネネコは叩くのを止める。

「よろしー。ま、何でも良いから話しようよ。あ、ハーツ、実習で携帯針羅盤作ったんだけど見るー？」

「もちー！」

「じゃーん」

上着に幾つもある内の大きめのポケットから細かく線や数字の書かれた盤に複数の針がついた円形の物体を取り出し、テーブルに載せた。

「おおー、かつけえ！」

ハーツは目を輝かせ、素早くゴーグルをつけて携帯針羅盤を見始める。

「ほら、ユイスは誉めて！」

「はい。……姉ちゃん、スゲー！」

「もっかい。もつと心込めて」

ユイスは肩を落とし、息を吐いて少し真剣に口を開く。

「……分かりました。じゃあ、僕らしく。……五回生の技工士課程の携帯針羅盤作成は主針と副針の二つで良い筈だけど、針二つ増やして時計にもなってるのは凄い……というか勝手につけるの駄目な気がするけど、それだけじゃなくて、外装にも意匠を凝らしてるのはハーツも言った通り格好良い。それに光沢も均一で磨き方も上手いと来て、流石ネネコ姉ちゃん」

それを聞いてネネコはニコニコと満足そうに笑う。

「はっはっはー、そうだろーそうだろー。お姉様今良い気分。でもユイス、技工士の課程の詳細まで把握してるのは何って感じ」

「俺課程の詳細なんて知らねー。でも、ホント勝手に時計つけて良かったんすか？」

ネネコは頬を膨らませる。

「それがさー、怒られたー。ちょー頑張ったのに」

「あー……」

「やっぱり……」

指定外の機能を付けて実習において高評価を得ようとするような行為は基本的に無しとされている。

「まー、教官は『実習としての評価を度外視した場合は、その努力は学年一位だろう』って言ってくれた」

「姉ちゃん普段怒られるようなことしないのにどうして？」

ユイスが怪訝な表情で尋ねると、ネネコはこれだから、とため息を吐く。

「はあー。本ばかり読んでるから鈍いんだよー。三日あって、このあたしが怒られるような事して、ユイスの部屋を訪ねた事を考えて

「さー答えは!？」

「ああ……姉ちゃん僕に、くれる為に……」

「大正解！。ほら、ユイス、明日出発の割に持っていくの服ばかりでしょ？　だからこれはお姉様からの饒別なのです。……はいユイス、これあげるから一緒に持ってってね」

ネネコは携帯針羅盤を左手に取り、ユイスの左手を右手で掴んで手のひらを向けさせ、そこに握らせた。

それに、ユイスは大きくうなずく。

「ありがとう、ネネコ姉ちゃん。大切にする」

「どういたしまして」

言いながらネネコはユイスの頭をまた叩き始める。  
それを見てハーツはポケットを探り始める。

「あー、そういう事なら俺も何かって……ピンセットとか替刃とか……  
 ゴーグルはやれないけど、何か欲しいのあるか？」

叩かれながらユイスが苦笑する。

「無理に良いよ。ちゃんと、定期的に、戻ってくるし」

こうして僕は翌日、きちんとネネコ姉ちゃん手製の針羅盤兼時計を携えてレムリア真殿は九院室へと向かうのだった。

レムリア様が真歴起源以来説き続けこの真国に浸透した有名な教えは幾つもある。

曰く、「大地の恵み無しには人は生きてはいけない。故に、常に我々は大地の恵みに感謝し、日々生きている事を忘れる事無く己の胸に手を当て心より想うべし」と。

これこそがレムリア真国に広大な緑が存在し、緑豊かな地と地の間に人々が住んでいる所以だ。

今日、レムリア真国には収穫業に人手を掛けずに済むようになる

耕作機械を造り出すことは大いに可能だが、実際には運用されている程度は酷く抑えられている。

「人の意志を可能な限り尊重する」というレムリア様の思想は、逆に言えばどうしても尊重できない事があるという意味で、収穫業がまさにその最たるものだと言われている。

技工士が便利な耕作機械を開発しても、レムリア様は例外を除き絶対にその普及を認めようとはしない。

曰く、「それを使えば人はどうしても大地の恵みへの感謝を軽んじるようになってしまふ。もしこの国の民がそうなってしまったら、私はとても悲しい」と。

その昔、レムリア様に耕作機械の発明をした事を奏上し、その有用性を説いたある技工士に対し、レムリア様が言葉の通り酷く悲しい表情で言われたと、歴史書にはそう綴られている。

その話の続きは、その技工士がそれでも退くのを諦めようとせず何とか説得を試みようとする、黙って聞いていたレムリア様は静かに涙を流し始め、それを見た技工士は己の心の中に功績認めて欲しさに意見を通したいという欲求が少なからずあった事に気づき、恥じ、胸に手を当ててレムリア様の想いを察したという。

そしてレムリア様は「全てを理解して欲しいとは言わないが、お主が人の為になる発明をしたのは紛れも無い事実。それは私も分かっているつもりだが、お主もその努力を己自身で認め、納得し、また新たな発明をして欲しい」と言葉を掛け、後にその技工士は歴史に名を残す発明をし、現に今に伝わる技術書に名前が載っている。

必ずこの話は初学館の歴史の授業で学ぶものであり、僕でなくとも真国民は忘れていない限りは全員知っている。

確かに、種植、耕作や収穫を機械で済ませたとしたら労力は掛からないだろうが、毎年真国祭の前にレムリア真国の全収穫士ハーヴェスト総出で一斉に黄金色の稲麦の穂を刈るあの見事な光景が無くなると思うと、それだけで何だか心寂しくなる気がする。

そのような歴史的出来事があり、技工士達は以来、耕作機械の発

明に手を出すのを憚り、一部を除き研究は積極的に行われていない。そうしたレムリア様の教えに加え、収穫士の絶対給が全職業で最も高いという経済面からの一助と相まって、真国は収穫士の人口が最も多いのだ。

そして、最も高い絶対給を得る選択肢を取らず収穫士以外の職業を選ぶ人もやはり厳然として存在するのもまた現実。

家のように街で様々な商売を営む者、技工士、探索士やその他の職業は基本的にやりたい事があり、それが努力に比例して収入も増やす事ができるからこそ人々は往々にしてそれらを選択する。

しかし、国営士はそうではない。

国営士は収穫士とは収入において対極に位置し、努力に比例して収入が増える事も無く、逆に努力して出世すればする程絶対給が減少する職業。

国営士にあるのは、誠実さ、国家権力、質素さ、レムリア真国にとって収穫士にも勝るとも劣らない必要不可欠の存在である仕事を行っているというその遣り甲斐、そしてレムリア様の心よりの国営士個人個人に対する感謝だろうか。

そんな国営士達が必要とされる数を何とか満たす分に存在しているのは一重に真国唯一の頂点であるレムリア様の存在に依る。

真国起源年以来、レムリア様の我々真国民の庇護に対し、仮にそれに見合う対価を考える場合「何を以てしてもレムリア様の御業に足りることはできない」と言われている。

例えば、長期間雨が降らず水不足に陥った状態を「干ばつ」と呼ぶそうだが、生憎僕はそれを見たことがないし、両親も、祖父母も、曾祖父母、高祖父母と幾ら遡っても見たことがないという。

なぜならレムリア様が空をひと度舞えば海より雨雲を連れて現れるのだ。

圧倒的、絶大な、絶対的な、その力を行使し、レムリア様は雨雲をこの国の大地の空へ連れて来る。

そして、その後には地に雨が降る。



逆に真国に巨大な嵐が迫れば、レムリア様はまた空を舞い、完全に、完璧に、吹き飛ばす。

自然の力すらその力で押し伏せるレムリア様は紛れもなく絶対の存在だ。

レムリア様に感謝の意味を込めて品を献上しようとする人は歴史に記録されている限りでは、その昔は幾度もあったという。

しかしレムリア様はそれを全て断った。

曰く、「私にはこの国がある。この国の民がいる。それで充分。私に欲しいものがあるとすれば、それは真国の民全てが笑顔でいてくれるその姿。だから、笑顔でいて欲しい。もし、私がその品を欲しいと思ったその時は、私は私から自分でお主の元へ『その品が欲しい故、譲ってはくれぬか』と言い貰い受けに行こう」と。

その話の続きは、献上に上がった者は少し残念がりつつも品を持ったまま帰ると、丁度その時レムリア様が空から舞い降り、数ある品の一つを示して確かに「その品が欲しい故、譲ってはくれぬか」と本当に貰い受けに現れ、その者は笑顔でレムリア様に品を渡したという。

つまり、レムリア様は品そのもの欲しい訳ではなく、品を貰うことでその人の笑顔が見たかった、というのがこの話の要旨なのだろう。

現在では、品の献上は控えるべきものとした慣習が根付いている為、そのような事は少ない。

しかし、レムリア様自身はたまに、例えば、新鮮な生で食べられるような野菜を、飲食店屋台の商品を、海辺に行っては新鮮な海の幸を、個人的に買いに現れる事がある。

それ故、商売を営む人々は大抵皆レムリア様が自分の店にやってきてくれはしないか、と心のどこかで思い、良い物卖ろうと努めている人が多いと言われる。

様々な逸話に事欠かない絶対的な存在であるレムリア様だが、真国民全てがレムリア様をレムリア様とだけ呼び、その名を呼ぶこと

を憚る事はない。

一つ、歴史の授業で教えられる事のない、図書館に保存される最も古い歴史書の中の僅かな一節を個人的に紐解かなければ知る事のできない逸話がある。

その昔、真国の起源には「神」という人知を超えた絶対的存在を示す言葉、概念が存在したという。

その言葉を知っていたある始まりの民はレムリア様を「神」と呼んだ。

しかし、レムリア様は首を振った。

「私は絶対に、断じて、神と呼ばれる存在ではない。私はレムリアであり、レムリアという存在でしかない。私の事はレムリアという唯一私を表す名だけで呼んで欲しい」

以来、「神」と言う概念を以てしてレムリア様を「神」と呼ぶ事だけは絶対に控えなければしないと記されている。

そして、レムリア真国の「真」というのは「神」という読みが転じて「レムリア」という名こそがレムリア様を示すただ唯一の「真」実である「国」という意味で、この国はレムリア真国と呼ばれ、真歴や真都などのような言葉が時代と共に出来上がったと言う。

「神」という概念でレムリア様を呼ばないようにという記述はそもそも、であれば伝えずに歴史の裏に消してしまえば良いのに、と当時その歴史書を読んだ僕は思ったが、今思えば「神」という言葉かどうかはともかく、そういった概念を自然に考えつく人が現れる場合を考えての事なのだろうと思う。

そして今日、レムリア様は「レムリア」様としか呼ばれていないのだ。

……そんなレムリア様に憧れるからこそ、レムリア様のようにありたいと思うからこそ、国営士になる人々がいるのだと思う。

考えてみれば、僕もレムリア様に憧れ、必要としているとまで言われ、九院室の国営士となる事を決めたその一人と言えるかもしれない。

早朝僕は家族にひっそり見送られた後、輸送艇に乗って景色を目にこんな事を考えながら、刻々とレムリア真殿へと近づいて行った。

レムリア真国民、人生130年。

個人的顔の違いから印象の違いはあれど、大人の年齢を外見で正確に判断するのは困難を極める。

19で成人してから70代前半辺りまでは目立った外見の変化は無く、安成期と呼ばれる段階が維持される。

そして70代後半辺りに入ると中狭期と呼ばれる段階への老化現象が始まり、個人差はあるが一定の所でその進行はピタリと止まり、110代後半までその状態が続く。

最後に120に入ると老化が再び進行し、白衰期と呼ばれるいよいよ人生の終わりが近づいたという段階に至る。

白衰期においては、曾祖父ナリサのように髪が白一色に綺麗に脱色するという特徴的な変化が起こる。

そして、総じて女性の方が男性よりも安成期への突入が早い。

その為、家と言えば既に姉は、僕は姉だという事を当然知っているからこそ区別はついているが、後二年したら今よりも更に両親と年齢差が殆ど分らない状態になるだろうし、僕も後四年すればいずれはそうなるのだろう。

人生の伴侶を選ぶうとする場合、これはしばしば恥ずかしい思いをする状況を引き起こす事があるという。

子供の時に初学館で共に学んだ者、そのままそれぞれの選択した専門教育に進み子供だと見た目に分かる者は、覚えていさえすればその人達が自身と年の近い同年代だというのは分かるが、もうそれ以外となると本当に分からない。

できるなら若く思われたいと思うのは人の常であり、自身の年齢を積極的に話すという習慣は無く、初対面の場合少し人の動きを観

察したり、少し話をしてみるなどして、相手と自分の間に知識や経験の差を感じた場合、ああ、この人は年上なのだろう、と皆そうして推測し、上手く対応を合わせて行くのだ。

僕が入室した九院室の構成員も漏れなく初見では年齢の判断は殆どつかなかった。

ただ、はつきり分かったのは安成期の大人が五人、中狭期の大人が三人、僕に仕事を教えてくれている曾祖父一人が白衰期、僕が自他共に認める子供、そして敢えて加えるならばレムリア様が言うまでもなく最高齢だという事だろう。

更に、安成期の五人中一人が男性、中狭期の三人中一人が男性で、男女比は今僕がいる事を除けばきっちり一対二だ。

自己紹介はしたが、九院室の構成員はやはり世間での慣習通り年齢を述べはしなかった。

とはいえ、全国民の全情報を統括する場合なので調べればすぐに分かるのだろうが、曾祖父に言われて今はメンバーの情報は調べないようにしている。

九院室情報統括室には、曾祖父曰く主に超硬度炭素材というもので作られているというかなり大きなU字型を描くデスクがあり、そこに九人が等間隔に、今は僕もいるので十人だが、基本的に席に着いて仕事をする。

その周囲には高度な精密機器が幾つも並び、デスクの前にはそのU字型に沿って設置された半透明の壁のようなメインモニターが天井高く存在している。

今日で僕が九院室に入室してから五日目。

情報統括室入ってすぐに見て、逆U字、つまり字に設置されているデスクの一番右端の席で曾祖父から僕は仕事を教わっている。教わる以上会話するしかなく、それが他の人の迷惑にならないかと思ったが、その心配はすぐに杞憂に終わった。

口から声に出して操作する普通に機器があり、更に、かなり間を取って各席は等間隔に離れているので、メンバー同士で会話する場

合、相手のウィンドウをメインモニターに開き、同じ室内にいなから他の人と画面を通じて会話がしばしば行われている。

僕にしてみれば何だか不思議な状況だが、話し声は特に問題にならないのだ。

またメンバーはずっとデスクに向かっている訳ではなく、不意に立ち上がってどこか別の場所へと消えていったと思えば、気がつくと戻ってくる。

人は必ず空腹になるもので、その時は必ず全員で食事をする事になっていて、食事は当番制でメンバーが作る。

僕も曾祖父に連れられ調理場で十人分の食事を作る事があった。しかし、何しろ本の虫の僕が料理などレシピはそれこそ知識で知ってはいたが、まともにやった事は無かったので少し戸惑った。

それでも、曾祖父の指示に従い、何の料理なのか分かれば手順だけは知ってるので僕も手元はおぼつかないながら料理した。

曾祖父の手際の良さには驚いたが、皆それで普通らしい、つまり僕もそうなる必要があるという事が分かり、そして、その料理の味も申し分無く家庭的だった。

極めて家庭的な味で、食べている時は何だか普通に家の母の料理を食べているようなどこか安心するような気分がした。

今のところ九院室で食べたのは全て家庭的だ。

仕事時は殆ど曾祖父と会話してばかりだが、食事を共に取り、それも五日目に入ると大体メンバーがどのような人なのか掴めて来た気がする。

「ユイス君、大分慣れてきましたか？」

丁度昼食時、長机の一番端にユイス、その隣にナリサが座り、ユイスの対面の女性、アメリカ・エリス・テルが声を掛けた。

「あ、はい、それなりに」

答えると、ナリサがどつしりと言う。

「記憶力はあるから問題はない」

「そつえばナリサさんと同じでしたね。覚えることはまだまだあ

るから頑張つて」

肩口までよりも少し長い髪に、右の目元に泣きばくろのある優しげな目をしたアメリカは、柔らかに微笑んだ。

「はい。あの……アメリカ士官は探索士カイル・メル・テルとは親戚関係がありますか？」

「あら。本当に調べていないんですね。カイル・メル・テルは、私の夫です」

一瞬意外そうな顔をしてアメリカは面白そうに答えた。

「……え？……あ、すみません。ちょっと驚きました。でも探索士カイルと結婚されていて、その……情報とか大丈夫なんですか？」

「ええ大丈夫ですよ」

「カイルは表向きは普通の探索士だが、裏ではレムリア様私設のことは別動隊、両隠宮に所属している。メルテもそうだ」

淡々と低い声でナリサが説明を加えた。

「えっ、カイルに大婆ちゃんまで……大、ナリサ士官、それって、なら空の丘には」

「まあ、そういう事だ。まだ教えていないがそれも今後追々な」

「は、はい」

驚きが収まらない様子でユイスは頷いた。

そこへアメリカの横の短く髪を刈り込んだ男性、セイル・アルク・ルルクがキリツとした顔で言う。

「ユー、因みに俺とリアは夫婦！」

「あー、それは流石に知ってます。しかも昨日も一昨日も、その前も聞きました。というか最初の自己紹介で聞きました」

「いいね！ その突っ込みを待っていた！」

ええー、と思わずユイスが微妙な顔を見ると、きつちり肩までの髪にややつり目の女性、シーリア・ユリア・ルルクが右隣のセイルを一発叩いて言う。

「悪いね、ユー君。うちのこんなんで」

「いえ」

聞いて驚いたが、この国には本当に表には知られていない存在があるのだと、良く分かった気がする。

アメリカ士官、セイル士官、シーリア士官の三人は、仮にカイル・メル・テルとほぼ同年代だと仮定すれば多分50代ぐらいに当たると思う。

曾祖父の右横二席には順に男性のオーマ・エルマ・テルマ士官、女性のマリナ・ナナ・ラポーラ士官と来て、シーリア士官の左横一席に座る女性のライラ・プライ・ドミニス士官の三人は中狭期の人達。

大体80代……祖父母ぐらいの年なのではないだろうか。

セイル士官がユー、と僕を呼び始めてからこの三人はユーちゃんとかだか孫に対するように話しかけてくるので、そんな気が、する。この人達は名前からしてセイル士官とシーリア士官のように九院室内で結婚しているような人達ではないのだろう。

両隠宮という所の人達と、そういう関係にある可能性は否定できないが。

九院室残る二人が僕とは正反対の端の席に向かい合って座るミイコ・レミル・レストール士官とナーコ・トエル・レストール士官。

双子の女性で容姿が酷似している。

成人の名前なので最低でも19歳以上、136とかなり高齢である曾祖父の交代に僕が入る事を考えれば、19歳以上30歳以下といった所だろう。

この二人がどういう人なのかは、まだまるで話をしていないというか、口数が異様に少なく、食事の時でも今ののように席の距離が離れていて、多分凄く大人しい人達なのだと思う。

しかし、その二人を他のメンバーは時々何だか、仕方ないなあ、という顔をして見ている割には特に話しかけもせず、微妙な違和感がある。

しかも髪型が毎日違い、ミイコ士官とナーコ士官は日替わりで交換したりしていて……他の人からすると判別しにくいだろう。

双子と言えど顎の骨格にはどうしても微細な違いがあるので、それを覚えていて僕にはどちらがどちらなのかは見ればすぐ分かるが、そんな事を考えながらアメリカ士官にカイルの探索記を読んでいる事などについて話をしつつ、食事を終えて再び九院室のメンバーは仕事に戻った。

「覚えてはいても……」

椅子に座りユイスがコンソールをおぼつかない手で操作しながら呟いた。

「時期に慣れる。実践あるのみ」

「……はい」

「ふむ……丁度商家だ。試しに実家を基点に商決済の確認をしてみるか」

「やります」

頷くと、ナリサが促す。

「ではやってみる」

「はい」

コンソールを操作し、目の前のメインモニターにリント書房の総合データを出す。

総資産、全従業員名や関連商人などの情報が次々とウィンドウに出る。

「まずは探索士協会との決済から」

「はい」

家が探索士協会真都第二支部と密接な関係があるのは両親のアイデアと交渉によって成った事だ。

探索士にとって飛空艇を駆り海を越えて各地の探索を行うためには未開の所以外に行く場合はルートや生物の生態系などの情報は予め調べるのが常識だが、最低限の事は知ることができても、探索士協会自体は何でも調べられるような情報屋ではない。

探索士協会は探索士として登録されている者の管理、外部者からの依頼の仲介、探索士が出発する場合に予め必要な食料や道具など



の申請をすることによって探索士本人が行わずともそれらの手配をしてくれる支援所でもあり、正式に探索士に登録されたばかりの新米などが適切な経験を積めるよう合同研修や師弟制度の実施、飛空艇の建造やメンテナンスの為に技工士の仲介なども行っている。

そして現在、探索士には協会への探索記の提出義務がある。

しかし、探索士にとって探索記を書くのには時間が掛かり積極的に詳細に書く動機を得にくいもので、個人によってその内容の質には差があり、その一方で探索士が探索に出た回数だけ探索記の数が増え情報管理が煩雑になったという。

探索記には、虚偽の情報を書くと後に確認し直された場合本人が信用を失うだけであり、基本的に事実と不明確な場合は推測や考察などが書かれ、きちんと利用すれば有用な情報源と成りうる。

当時の両親が探索士協会に提案したのは、探索士が皆質の高い探索記を、読んで楽しい探索記を書くように意識改革を促しうるものだった。

曰く、「例えば、探索記をただ事実だけを記載したものではなく、探索士本人がその場所に至るまで、至って、見て、感じて、発見した事やその感想を小説風にして、写真や場合によっては精密に写真した絵何かも入れて本にして売ります。そうすれば、ただの事実よりもきつと分かりやすい筈で、読んでも方もそれが実体験を元にしてるのは明らかなんですから面白いと思う筈です、いや、僕が読みたいです。それに売れば、その分を探索記を書いた探索士本人にも還元すれば新たな収入源にもなって、皆さん頑張って探索記を書くようになると思うんですが、どうでしょうか」と。

その後「なら、まず一度やってみましょう」という事で話がほとんど拍子で進み、協会員が数人の探索士に探索記を小説風にする事を頼み、探索に出て帰ってきてできあがったものを、多少の推敲は加えて実際に本にして売り出した。

結果、宣伝の甲斐もあって探索記は飛ぶようにすぐ売り切れ、書いた探索士は名前が有名になり、収入も得られと良いこと尽くし。

以来、探索記の情報資料兼小説化は熱を帯び、探索士達はこぞって面白くなるように、しかし、虚偽は入れないように、探索記を生懸命往々にして長くなりがちな飛空艇での移動時間などを利用して書くようになった。

それは瞬く間に国中に広まり、僕が生まれた頃には既に当然のものになって今に至り、レムリア真国から危険を犯して海の外に出ない真国民馴染みの読み物、探索士にとっては探索を追体験できる重要な資料となっている。

実際僕は探索記をそれこそ今まで大量に読んでいるし、ハーツも、例えば探索士カイルの書く観察眼と洞察に富み、写真ではなく極めて精密な写実絵をふんだんに入れ、独特な文体も読む気を起こさせてくれる、特に人気のある探索記を読んでいるのだ。

「うん……」

探索記一冊が売れるという一見簡単な取引の裏には色々ある。

探索記を書いた探索士、探索士協会、それを本として刷り納入する出版社、そしてそれを実際に売る、ここでは僕の家……それに關わる労働者個々人の人件費や、本を刷るのに掛かる原価、各契約料など。

次々と関連のある情報ウィンドウを開いていくと資金の流れが複雑に絡み合っていると分かる。

「システムが自動処理をしている以上、必要な所だけ手を出せば良いが、理解はしておくように」

「……分かりました」

曾祖父の言う通り、システムが自動で現地で行われている情報を収集し処理し続けているので、経済システム自体には余り手を出す事は無く、九院室で行うべきは、例えば、実体の無い取引や架空の取引が商人同士の間で行われてはいないか、国の各所で働く国営士が地力で以て収集した情報と併せて、確認、監視し、問題があればその処理を行う事だ。

「次はこの実家のように契約関係が多い場合起こる、過去の事例と

対処の確認をする。一度で覚えられるな」

「はい」

それには、自信がある。

「ではC - 674にアクセス」

こうして僕は、レムリア様に後を継げと言われた通り、徹底的に曾祖父の経験を受け継いでいく。

九院室に入室して十日目の夜、ユイスは自身に与えられた部屋ですやすやと眠りについていた。

その部屋の廊下の前に、小声でこそこそと話す同じ顔をした二人の人影があった。

「ねえ、なこ……ここで話す意味ないよね？」

ミイコがナーコの袖を引っ張って言った。

「えっ、来たいって言ったのみーこでしょ」

「そんな事言ってないよっ……!!」

ナーコが忍び笑いをする。

「正解っ。……でも内心ちよつと来たかったんじゃない？」

「ん」

問われてミイコは口ごもった。

ナーコがにやにや笑う。

「えー？ 私は結構来たかったよ？」

「っ。わ、わたしもそれなりに来たかった……です」

尻すばみに言っと、ナーコが聞き返す。

「それなりに？」

「わ、割と？」

ナーコが両手を適当に広げる。

「これくらい？」

「こ、これくらいかな？」

首を傾げてナーコの広げたソレより控えめに両手を広げてミイコが言う。

「え、そんなに？ 私これくらいだけど？」

驚いた顔をしてパツと手を縮める。

「それずるい！」

ミイコが不満の不を声に出すと、じとつとした目でナーコが一方的に黙った。

はあとため息をついてミイコが観念する。

「……わかりましたわたしもけっこうきたかったです」

「素直が一番。今のセリフみーこユイ君に言ったら喜んだんじゃない？」

「言わないよ！ 言うかよ！ 言えないよ！」

豹変したように叫んだ。

若干引き気味にナーコが言う。

「……また一瞬口悪くなったね。まあさ、それで……どうしよっか？」

「どうしよっかって？ どれの事？」

「いつ芝居やめるか」

「いつって……」

要領を得ない返事に、ナーコが更に言う。

「早くしないと、かまう前にユイ君どんどん可愛くなくなっちゃうかもしれないよ？」

パツと顔を見上げる。

「でもブサイクにはならないと思うよ？」

「そういう意味じゃないって。あのままナリサ教官みたいになるかもしれないじゃん」

ナーコが呆れて手を振るとミイコが首を振る。

「それはかわいくない……」

「でしょ？」

「うん……。でも別に、普通にやめればいいだけだね。明日にで

も」

突然冷静になって言った。

「……いきなりぶっちゃけたね。じゃあそつする?」

「そうしょつか?」

「はい、そうしよけてーい!」

「けてーい!」

二人はハイタッチをした。

ナーコが議題を提案する。

「次。休日の明日ユイ君が実家に戻る件について」

「件についてー」

ナーコが指を立て、

「堂々尾行しちゃう?」

「堂々尾行するの!??」

ミイコは驚きの声を上げた。

「情報によるとユイ君のお姉さん私達と同年」

「そこ関係ある?」

ミイコが首を傾げるとナーコが顔を近づける。

「お友達になれるかも」

「……うん。それはそれで良いかも」

頷くと、ナーコが再び離れて言う。

「堂々無言ですーっとユイ君の背後を尾行して、丁度良いところで私達がわぁ! ってやっておどかす」

両手で虚空に向かって驚かせて見せた。

「それで?」

「成り行きでユイ君の部屋に押し入って私達のとんでも正体をバラした後にユイ君のお姉さんとお友達にもなる」

「とんでも正体じゃなくてとんでも本性じゃない?」

「そうとも言つかも」

「そうだと言う」

仕切り直すようにナーコが口を開く。

「……ともかく、教官から教えてもらった話によるとユイ君がまとももに持ってきた私物お姉さんが作った時計だけだつて。きつと姉属性あるよ。あの子私達が教官に頼んで伝えて貰ったときちゃんと守るよいこ、で？」

「わたし達の情報も調べて無い」

二人は同時に頷く。

「だから、私達が間名をレムリア様から貰つてゐるせいでもかなり年上だと勘違いしてる筈。お姉さんと同い年だと知ったら？」

「お姉さんのように思ってくれるかも」

更に同時に頷く。

「思ってくれるといい。私達はようやく前からねんがんの弟分を手に入れられる。なんて甘美な響きい……」

ナーコが顔を上げて一瞬恍惚とした表情をすると、ミイコが顔をしかめる。

「手に入れるって何か言い方悪いよ」

「じゃあ、ねんがんの弟分を可愛がれる？」

「かわいがれるね。えへ……でも、何か気持ち悪いとか思われないかな？」

にやあ、と一瞬笑つたのを見て、ナーコがどん引きする。

「今の笑い方は絶対気持ち悪いな」

「ええー！……今そんなに気持ち悪かつた……？」

慌ててミイコは自分の頬を両手で触れた。

「いや、ユイ君がどう思うか分からないけど。私的には私もそんな風に笑うと思つたら何かさ……」

「気をつけないと……」

思い詰めたように言つと、ナーコがけろつとして言う。

「まあ最悪、気持ち悪がらないで！　って直接言えば良いよ！」

「おもいっきり歪んだ想いが伝わりそうだよ？」

「そのうち正常な想いになるかもって付け加えたら？」

ミイコが一步下がる。

「え、それは……ほ、本気で？」

「今は嘘でもそのうち……？」

ナーコも一歩下がった。

「ど、どうかな……」

「私もそこはどうだろ……」

二人はほぼ同時に首を傾げた。

ミイコが恐る恐る声を上げる。

「実際ユイ君の方は……どうなのかな……？」

「異性への興味、15歳なのに見た感じ無さそうだよね……」

ミイコが口元を右手で覆う。

「む……ムツツリ……かも？」

せわしなくナーコは両手をとつかえひつかえ顎に当てる。

「え、でも……いや、やっぱり男の子ってそうだって言うよね。んで

も、レムリア様曰く寝食を忘れて本を死んだ魚のような目で読み続

けてたような子だよ……？」

「何かそう聞くと嫌々本読んでるみたいだけど……でも怪しい本と

かも……実は読んでるかも？」

二人の顔が一緒に僅かに赤くなる。

「そこは……もしそうだったとしたらどうなの？ 本屋の家族の監

督ザルすぎるって」

「その監視の目をかい潜って普通は部屋に隠すんでしょ？」

「普通はって……いや、元々そんな事ユイ君する必要無いよね。教

官と同じ絶対完全記憶できる子なんだから」

はっとして気がついたように言うと、ミイコも目を丸くする。

「そうだった。でもそういう方向に使ってるとしたら……だ、大変

態さんだよ……。何か不潔……」

うえ、と両手を見るようにして言うと、ナーコは思い詰めるよう

に唸る。

「もし思い出されるとしたら……さすがに血が繋がってる訳でもないし……想像したくない、なあ……」

「下手なスキンシップも危険かも……」

「でもーこ」

「うん、なこ」

二人は声を掛け合うと、

「こんな事考えてる」「わたし達が一番」

「不潔だね……」「不潔だよね……」

同時に呟いた。

何ともいえない間の後。

「……それはそれとして。結局明日どうしようか？ バラすのはバラすので、楽しい方がよいよね」

「そうだね。うん」

そこへ第三者の声がする。

「何をバラすとな？」

「何ってわたしたちの本性を……って」

二人は同時に気がついた。

「レムリア様！」「レムリア様！」

わたわた、とミイコが手を動かし、

「あ、あ、あの、もしかして……」

ギギギ、とナーコが頭を動かして尋ねる。

「聞かれて……ました？」

「実は全部最初から聞いておった」

レムリアが平然と言った。

二人は同時に両手を上げる。

「ええー！？」「うええー！？」

「というのは本当じゃ」

更に二人は両手を高く上げる。

「うええー！？」「ええー！？」

驚いてるのを無視してレムリアは注意を促す。

「お主達、忘れてるようだが、ユイスと外で目立つ関係性を疑われるような堂々尾行は控えろ？ まあそもそもそれは尾行とは言わ



ぬが」

「あー……」

「はい……」

二人は少ししょんぼりし、

「正しく尾行し、実家で上手く接触するなら可とするが」

ピツと元気よく返事をする。

「了解です！」「了解しました！」

レムリアはふわりと廊下で浮かび上がりながら言う。

「で、どうじゃ、ナリサの引継ぎの話を大分前にした時『是非可愛い男の子が良いです！』と二人揃って言っておったが」

「見た目はバツチリです」

「わ……わたしも、アリです」

ナーコとミイコがそれぞれ答えると、レムリアは微妙な顔をする。

「見た目は……の。性格は……観察するからと言って碌に話しておらなんだか」

「はい……」「はい……」

「最初から分かっておったが、実に努力の方向音痴に思える。私はそんなお主らが面白いから構わぬが」

レムリアが苦笑して言うと、二人は手を頭の後ろに回す。

「あはは……」「それはそれは……」

レムリアは不意に顎に手を当て深刻そうに言う。

「ふむ……しかしアレは完全に私に惚れておるから、もし本気ならば骨が折れるやもしれぬなあ」

ミイコが心底残念そうな声を上げる。

「ええー」

「うーん……。あ、やっぱりみーこ、素で狙ってるでしょ？」

気がついて突っ込みを入れると、慌ててミイコが手を振り否定する。

「んな、そんなこと無いよ！」

眉をひそめてレムリアが追い打ちをかける。

「どう見ても露骨に残念そうに見えたぞ？」

ミイコは今度は両手を一緒に左右に大きく振り始め、

「いえいえいえ、今のは会話の流れから言って定番の反応をしたただけであってからして別にそう言う……にゅうう……」

床に両手をつけて倒れた。

残念な物を見る目でナーコが言う。

「己の見苦しさに心が痛んだか……素直になーれ」

「ナーコの言う通り。では、明日、本性を存分にバラすと良い」

「はいっ！」

そして、レムリアは去っていった。

レムリアに対し返事もせず倒れたままのソレを見てナーコが声を掛ける。

「ほら、みーこ、もう寝よ。……あ、もし動けないなら、このまま

ユイ君の部屋で寝る？」

「しないよ！ するかよ！ できねーよ！」

バン、バン、バンと床を叩いた。

「これはヒドい」

何故こうなったのだろう。

九院室での連日続く曾祖父からの指導が十日経って丁度今日が休日という事で、実家にただ戻って来ただけだったのに。

今僕の部屋にはテーブルを挟んで、同じ顔をした二人の人がいる。

左からミイコ士官とナーコ士官だ。

早朝に実家に帰り家族に挨拶をして朝食と一緒に取った後、どうして過ごそうかと思った所、目立つと駄目かと考え、僕は家の中で過ごす事にした。

僕から何をしているのか話すことはできないので、姉が話題を出しては会話をして過ごしたり、何だかんだ家族に本を持ってきても

らって適当に過ごすこと半日。

家の店側ではない勝手口二人が訪ねて来た所、応対に出た姉が連れてきた。

姉は今確実に僕の部屋の扉の前でビツタリ張り付いているのが容易に想像できるが、それはそれとして、二人は相変わらずの堅い表情で全く口を開かず沈黙を保ったままだった。

気まずい沈黙に、下手に九院室の事も話せない僕はそろそろどうにかしないと、どうせなら姉が入ってきてくれた方が何とかなりそうだと思っていると、不意にナーコ士官がメモを取り出し、テーブルに乗せて見せた。

「えっと……」

読んでみると綺麗な字で「私達の正体を当てて見て下さい」、そう書いてあった。

良く意味も脈絡も分からないが、何とか答える事にした。

「僕の仕事上の上司……です？」

二人は顔を同時に見合わせ、僕から見えない手元でこそそこそ何かまたメモに書き込み始めた。

それを見て、ああ、九院室の人は外では筆談で会話するのかなと思い、僕もすぐ手近な紙とペンを取って待機した。

けれど、二人は僕の動きを見て一瞬停止し、僅かに間を置いて完成したメモを見せた。

（私達の本性を当てて見て下さい）

本性って何。

文面は正体が本性に変わったただけだが、突然怪しくなった気がする。

とりあえず、同じく書いて返答する。

（本性という事なので。普段物静かで大人しい人達と見せかけて、本気だと実は気分が高揚しすぎる、本性）

見せると、うーんと無言で頷いて、また書き始め、僕らは作業に入り始めた。

（私達は具体的に何歳だと思いますか）

（25歳ぐらい……だと思います）

（不正解です。曖昧表現は無しで何度でもお願いします）

（19歳）

（不正解）

（……30歳）

（ちげーよ！）

ええー……。

表情を伺うと何か「本当にそう見えるの？ 本気で？ しまいは怒るか泣くよ？」という顔をしていたように見えた。

ナーコ士官とミイコ士官は交互に書いているので「ちげーよ！」という荒い言葉はミイコ士官が……多分文章だからちよつとしたおふざけ……いや本気……？

（すいません。失礼な事を書きました。……20歳で）

（不正解です）

（21歳）

（不正解です）

（22歳）

（出題しているのはこちらですが、できればもっと良く考えて下さい。一番近いのは二番目の答えでした）

何なんだ……この人達。

二番目というと19歳だが……20歳が違うとなると、必然的に成人していないという事になるが……それは変だ。

（間名があるのに、成人していないのですか？）

（驚いた？）

どやああ、という顔で二人は見てきた。

正直文面で伝えられると驚くも何もあったものじゃないが。

（はい）

（では、続きを）

（まさかの15歳に一票）

少し投げやりに書いた。

（その発想は無かった）

（え、その方が良かったですか？）

ナーコ士官、ミイコ士官の順だがミイコ士官の微妙に嬉しそうに踊って見える文字は何だろう。

（間を取って17歳で）

（キター！）（キター！）

書いたすぐ後二人はハイタッチした。

（姉と同じ年だったんですね。間名はどういう事なんですか？）

内心僕も驚きつつ疑問を書いた。

（レムリア様が付けて下さったものです）

本当に驚いてユイスが声を上げる。

「そうなんですか！？」

思わずミイコとナーコもびくつとして、それからナーコが頷いて見せ、ミイコは勢い良く返事を書き始める。

（ユイ君もレムリア様から間名付けて貰えるよ！ 良かったね！）

デーン、と突きつけるように見せられ、ユイスは戸惑いながら頷く。

「は……はい……」

いまいち、会話と筆記での口調が一致しているのかしていないのか分からないのが何とも言えない……。

ユイスが頷くとミイコは書いたばかりの紙を小さく折りたたんで懷にしまった。

逆にナーコが小さ目の便箋を二人の間に置いてある鞆から取り出して、テーブルの上に差し出した。

促されて、ユイスはそれを開けて中から手紙を取り出し、読み始めた。

ユイスは凄い速さで読んで行き、読み終わった頃に、少し難しげな表情に変わった。

ナリサがユイスに九院室のメンバーの情報を調べないように言っ

たのは、ミイコとナーコがそう頼んでおいたから。

ただ、もしユイスが勝手に調べてしまった場合は仕方なかったという事。

ミイコとナーコが初めての自己紹介の時含め、この十日大人しく静かに過ごしていたのは予めそうすることをメンバーに伝えていたから。

とにかく、全てはこうして驚かしたかったから、決して無視してた訳ではないという内容が書いてあった。

「あの、ちゃんと驚いてはいるんですが、やっぱり手紙だともうも反応が薄くなってしまうって、すいません」

そうユイスが言くと、二人は首を軽く振り、またしても筆談へと突入する。

（今の手紙とこの状況を踏まえて、私達の本性を当てて見て下さい）  
またか、と思いユイスはゆっくりペンを取って返事を始める。

（いたずら好き）

（それも一理あるかもしれませんが）

（他に思いつくことは？ 質問が本性だけで埒がなければ私達に対して想像できそうな事でも良いです）

ミイコ、ナーコと見てユイスは頷く。

（……はい。では、こういう質問をしている事からレストール士官は僕と少なからず感情や意思のやりとりをしたいのではないかと思っています）

そこまでで見せると、二人は頷いて続きを促した。

（それで、17歳というのを当てた時に喜んでいたようなので『年が近いので仲良くしたいですね』と言った感じでしょうか）

ナーコがそれを見て書く。

（その先は……？）

まだ何かを求めるのか、と思いながらユイスがトントン、とペンを立ててから書き始める。

（えーと……では、ミイコ士官がユイ君と僕の名前を書いたのがど

ういう意図かは正確には判断しかねますが、それを加味すると仲良くとはいっても弟的な何かとして接するつもり……というのがありそうかなと)

書き終えたソレを、二人がじーっと見ると、顔を見合わせ、互いに両手をがっちり握手してみせた。

ふうー、と息を吐くと、二人はユイスに向き直ってナーコがようやく口を開く。

「それは私達を姉的な何かとしてユイ君は見てくれてるって事で……良いのかな？」

首を傾げながら普通に尋ねられ、今までの筆談は何だったのかと思いつながらユイスは何とか答える。

「あ、え？ えっと、今推測したことなので……」

「そ、そくだよねー……」

「はは……とミイコは乾いた笑いをした。

それから急にナーコが改まって口を開くと、

「まあ、何を隠そう私達は」

「弟という存在に」

「憧れのようなものを……」

「抱いていまして……」

二人は交互に暴露した。

「な、なるほど……」

そ、そうだったんですか……とユイスは返した。

ミイコが恐る恐る尋ねる。

「勝手にこんな事言っで、やっぱり……気持ち悪いかな？」

「いえ、そんな気持ち悪いという事は無いです。レストール士官は

『え、君何本気にしちゃってんの？ きもーい！ ゲラゲラゲラ！』

と、言っただけで後で相手の反応を見て楽しまれたりするような方ではなさそうなので……」

その一人芝居に二人は驚き、ミイコが慌てて言う。

「そんなの絶対無いから！ それより大丈夫？ もしかしてそんな

酷い事誰かに言われた事あるの？」

その慌てぶりにユイスは大きく首を振って否定する。

「い、いえ……無いです。そういう展開の話を読んだことがあるだけですよ」

「しょ、小説かあ」

「ちょっと驚いた……」

二人はほっとしたように息を吐き、ユイスはうーん……と考えてから口を開く。

「……ところで、レストール士官がどう思われているのかは何となく分かりましたが、それって所謂『いない姉弟の存在に幻想を抱いたまま後でその現実に幻滅する』ありがちな事になりかね無いと思うんですけど……あ、いえ、何でもないですごめんなさい今は忘れて下さい……」

話しているうちに二人がみるみる内にしょんぼりして行くのを見て、ユイスは言葉を濁した。

「しまったあ……とユイスが場の空気の悪さを感じていると、そこへ扉が開けられ、

「しつれいしまーす。お姉様達はどなたですかー？」

ネネコがトレイに飲み物を乗せて入ってきて言った。

「ミイコ・レストールですユイ君のお姉さん！」

「ナーコ・レストールです、ユイ君のお姉さん！」

途端に二人は今日の目的のもう一人を見てキリッと挨拶をした。

「これはどうもー、あたしは弟の姉のネネコです」

やあやあ、とネネコは自己紹介しながらトレイを床に置き、ユイスの隣に座った。

「あのさ……姉ちゃんずっと聞いてたよね？」

尋ねると、その一方でミイコとナーコはテーブルの上の紙類をいそいそと片付け、ネネコが返事をする。

「んーそんなことあるねー。で、ユイ君なんて言って可愛がってもらってるの？」



「今日初めてそう呼ばれたから。というかまともに会話するのもこれが初めてだから」

「そっかそっかー」

うんうん、と頷いていると、ナーコが身を乗り出し、

「あの、ユイ君のお姉さん」

ミイコも身を乗り出し、

「私達ユイ君のお姉さんと同じ年なんですけど」

「お友達になって下さい!」「お友達になって下さい!」

同時に言った。

パツと気づいてネネコは快諾する。

「ん。もちろんいいよー」

「ネネコちゃんありがとう!」「ネネコちゃんありがとう!」

パアアつと二人は顔を輝かせ、これはこれは、とネネコが挨拶をする。

「こちらこそー。二人は弟のお仕事仲間さんらしいけど、弟をよろしくお願いします」

「はい! もちろんです!」「はい! それはもちろん」

同時に言つと、ネネコは床のトレイを空いたテーブルの上に置き、飲み物を勧める。

「では、ひとまず飲み物どうぞー」

そこで一度四人は一息ついた。

コップから口を離して、徐にネネコが聞く。

「それで、なーことみーこはユイスを弟扱いしたいの?」

「えつと、まあ、うん」

「そ、そうだね」

曖昧な返事を二人がすると、ネネコが困った表情をして、

「うーん、ユイスの姉はこのおねーさまだけだからなあ……みーことなーこ、喧嘩する?」

シャツとファイティングポーズを取った。

「え」「え」

「弟はー……渡さなーい！」

驚いている二人を置いて、ネネコは立ち上がり間延びした声で両手を広げ宣言した。

「そこを何とか、ユイ君を下さいっ！」

ミイコもノリで立ち上がり、その暴拳にナーコが声を上げる。

「ちょ」

「ええー……」

何だこれ……というユイスの呟きが漏れた。

「まーまー。やはりここは穏便にだね。あたしの部屋で作戦会議をしよう！」

言って、ネネコは招くようにしてミイコとナーコを流れてそのまま部屋から連れ去った。

「何だかなあ……」

まあいいか、と思い、ユイスは筆談に使ったペンと紙を片付け、トレイと飲み終わったコップを片付けに部屋を後にした。

ユイスの本だらけの部屋とは対照的に、技工士の使う工具、測量機などの精密機器や技術書が幾つも置かれているネネコの部屋。

「散らかっててごめんねー」

ネネコはそう言って適当に床にスペースを作り、三人で座った。

「二人はさー、ユイスにお姉ちゃんとかお姉様とか呼ばれたい系？ 頭撫でたりしたい系？ それとも食べたい系？」

ぶっちゃけた発言をしながらネネコはゴーグルを磨き始めた。

「ま、前二つを……」

「同じく……」

「まー、それなら別に良いんだ」

ポツリと呟くと、二人はホツとしたような表情をする。

「家の弟は歩く図書館と呼ばれてるぐらいで、本当に図書館にあるような本しか読んでなくて、アレな本も家では取り扱ってない。で、レムリア様一筋の子でもあって、その教えは人より多く知ってるし、きちんと従ってる。この前まで死んだ目してた子で一見何か世間の

裏まで知ってそうに見えるけど、実は綺麗さっぱり真っ白な子です。大爺ちゃんと同じ絶対完全記憶なのが分かった時は大爺ちゃんがアレな物は絶対に大人になるまでは見せるなって言って、まあ結局そんな心配しなくても弟は見なくて、極めつけに男の子の初めてのアレも15歳になってもまだ来て無い。要するにアレ系に対しては医学的な事は知識では馬鹿みたいに知ってても所詮は初心そのもの。だから、大人になるまではできるだけ変な事は教えないでねって事を言っておきたかったんだ」

ネネコの思い出すような説明を、二人は真剣に聞いて最後に頷いた。

「分かりました」「はい」

それを聞いてネネコは笑って言う。

「うん。まー、弟は人の温もりを感じると普通に嬉しいから、手とか頭とかさりげなく触るといいと思うよ」

「おー……」「へえ……」

良い事を聞いた、という表情を見ると、ネネコが付け加える。

「あ、でも他人にやられると恥ずかしがるかも。耐性無いから。という訳で作戦会議しゅーりょー」

「ありがとー」「ありがとー」

二人がパチパチパチと手を叩いた。

「どういたしましてー」

手を叩き終わると、ナーコが、あ、と気がついたように一つだけ尋ねる。

「あの、初めてのアレが来てないのって……?」

「あー、大爺ちゃん曰く大人になったら自然と来るからって聞いた」「そうなんだ……」「そうなんだ……」

二人は教官からそんな事聞いてない、と思いながら同時に呟いた。

「そうだー、アルバムとか見る?」

「見ます!」「見せてください!」

ネネコの発案から、その後しばらく三人はリンドルース家のアル

バムを見て過ごした。

そして、改めて三人はユイスの部屋に突入した。

「ただいまー」

「ん。おかえりー？」

何かを読んでいたユイスが気がついて言うと、いそいそと二人はテーブルの傍に向かい、鞆を手にとった。

「あれ、ユイ君、それ何？」

「えっと、家の過去の帳簿……取引記録です。下から借りてきました」

パツと浮かせてユイスは見えるようにした。

「まあ……」「えらい……」

二人は同時に口元を手で覆って言った。

「あ、そろそろ私達帰るね」

「突然来てごめんね」

「あ、いえ」

そしてナーコとミイコの二人は勝手口から見送られ、去っていった。

「で、ネネコ姉ちゃんレストール士官と何話したの？」

玄関口で尋ねると、ネネコが呟く。

「んー。アルバム見てた」

「え？」

「ユイスもお姉様と見る？」

「覚えてるけど？」

肩をすくめてネネコが残念そうに言う。

「つれないなあー」

「いや……見るなら見る？」

「お、ホントー？」

「うん」

「じゃ、いこいこー」

ネネコはユイスの肩を押して、二人は上の階へと戻って行った。

何だかレストール士官のお陰様で無駄に疲れた気がしないでもない僕は、姉とアルバムを見始めると結局、姉が何の写真か分からないものを全部いつのどの時のものか説明させられ余計に疲れたが、それはそれで何だか良かったような気もしたのだった。

### レムリア真殿九院室。

レムール山脈内部を掘り、密かに構築されているここは決して表に明らかにされる事はない国の裏側そのものだ。

曾祖父から付きつきりで仕事を教えて貰い、片っ端からそれら全てを覚えていく事十数日。

昼食後、唐突に曾祖父が僕がまだ見ていない九院室の奥を案内すると言った。

その際、この前家に突然やってきて弟という存在に憧れていたという本性を持っていたレストール士官は二人して「ナリサ教官、私達がユイ君を案内しましょうか？」と僕と曾祖父の対面の席で同時に言ったが、軽く曾祖父は「それには及ばん」と一蹴した。

レストール士官は「お姉ちゃんって呼んでくれないかなー？」というラを常に発しているが、僕はやっぱり普通に恥ずかしいので呼んでいない。

ともあれ、僕は曾祖父の後について、情報統括室の最も付近に繋がるメンバーの部屋や調理場兼食堂よりも更に奥に行く事になった。ただ、かなりの急ぎ足になったが。

九院室は基本的に暖かな橙色の照明を用いているので、密閉されたこの空間であつても気持ちは滅入りにくい。

それでも通路は全て超硬度炭素材の壁材が使用されていて、それが延々と敷き詰められた単調で無機質な感じがする。

定期的に出くわす隔壁を幾つも通り抜け、飛ぶ必要のある上下に伸びる通路を移動し、再び何度も分かれ道になっている通路を定期

的に曲がりながらついた先に出たのは、ここがレムール山脈の内部だというのを忘れてしまいそうになる程に情報統括室よりも更に巨大な、巨大な、ぽっかりと開けた、そしてとてつもなく明るい空間だった。

「ミーティアクリスタル……じゃ、ない？」

「そうだ。ただのミーティアクリスタルではない。クアントプリズムと直結している。これが情報統括室の全システムの中枢だ」

そう、曾祖父が言っただけの空間の眼下に見えたのは、ただでさえ巨大な空間の大部分を占め、複雑なコード類の繋がる台座に浮かぶ、大きなクアントプリズムを内包する更に巨大な虹色に輝くミーティアクリスタルの塊だった。

「これでシステムの処理を……」

「そうだ」

「でも、山脈内なのにこの光量は、あれは一体」

「見て分かる通り、数ヶ所の孔を通して地上に降り注ぐ天の光を収束採光し照射している」

「どうや……いえ、何でもないです」

どうやってと聞いた所でここはレムリア様が造ったのだ。

「当然夜になれば、光は集められないが……。最悪ここにだけは部外者を通してはならない」

ナリサは重々しく言った。

「え？ 部外者なんて……」

「例え万一にも有り得ないとしても、部外者が絶対に入ってこない保証は無い。今お前には仕事しか教えていないが、極秘の国営士たるからには今後戦闘訓練も積んでもらう」

「そうなの！？」

聞いてないよとユイスは心底驚いて声を上げた。

「何を驚いている。当然だろう。国営士の課程には何がある」

当然知ってるけど……とユイスは嫌そうに言う。

「戦闘訓練……です……」

「そうだ」

「えー……」

ナリサは厳しく言う。

「えーでもあーでも無い。基本的にここは何でもできなければならん」

「は、はい……。では、レストール士官も戦闘訓練を当然……？」

「当然だ。あの双子は強いぞ」

「そ、そうなんだ、ですか」

「それだけ九院室は重要な所だという事を覚えておけ」

「……はい」

ユイスは間を置いて、その言葉を心に刻みつけるように頷いた。

「では次に行くぞ。ついて来い」

言って、ナリサは元来た道を戻り始めた。

ある程度戻り、そこからまた別の道を進み始めてからしばらく。幾度も隔壁を通過した先に、九院室の終りを告げる扉があった。

「ここから先が両隠宮との共同区画に入る。行くぞ」

「はい」

入ったその先で曾祖父が言う両隠宮との共同区画で見たものは、簡単に言ってしまうと工場のようなものだった。

見たこともない機械が大量に並ぶその工場はこの時動いてはいなかったが、散々見てきた超硬度炭素材などから始まって色々造られるのだという。

両隠室のメンバーとはいずれまた別の機会に会うことになると言われ、共同区画入ってすぐの所で話を聞かされてまた戻った。

通路を引き返す途中、曾祖父から両隠宮についての説明を聞かされた。

両隠宮とは空と地上の両方において九院室と同じく表では明らかにしない事を秘密裏に行っているレムリア様私設の特殊部隊で、九院室と同じく極秘の国営士に、技工士と探索士を加えたメンバーで主に構成されているという。

どおりで、技工士の曾祖母に探索士カイルが所属している訳だ。

「空の丘」にいる両院室のメンバーは定期的にレムール山脈の地表に偽装されて作られている出入口を通り飛空艇で空と地上とを行き来するらしい。

そんな出入口がレムール山脈に存在するという話にまず驚いたが、この二ヶ所を案内された後、息抜きは終わりだと言われ僕と曾祖父は再び情報統括室は作業に戻り、いつも通り夜までそれは続いた。レムリア真国の現在一般に知られている技術水準を遥かに超えるものがここにはある。

そして、それらを作ったのはレムリア様だ。

ここに来てから、レムリア様が持ち得る高度な技術を国の中枢で何故秘匿しているのか、その理由を考えていたが、真国の歴史とレムリア様の教えを考えると少し分かって来た気がする。

歴史を振り返ればレムリア様が民草に授けて下さったものは数多いが、レムリア様は基本的に技術は発展しなくても良いと考えている方だ。

それでも真国民が自然に技術を発展させて来た分には、収穫業における機械の普及禁止などの例外はあるが、その成果は現在に至るまでに基本的に反映されている。

レムリア様から技術を授けて下さるその内容は、往々にしてその真国民の技術発展の段階に応じている気がする。

多分それはレムリア様は何よりも真国民の心を大事にしているからなのだろう。

例え高度な技術が無くても人は大地の恵みに感謝し、互いに笑い合う事ができるのだから。

真暦起源年、レムリア様は一体どこからこの地に来たのかと尋ねた時に「遙か、遙か遠くの空から」というその答えを思い出すと疑問は止まらない。

遙か遠くの空とは、一体どれ程遠くなのか、真歴起源前には一体何があったのか、そもそも一体どうして遙か遠くからレムリア様は



来たのか、どうしてレムリア様は絶対的な力を持ちながら常に真国を優しく見守るかのように居続けて下さるのか。

真国民が笑顔でいる事がレムリア様の欲しいものだから、と言っても余りにもレムリア様はレムリア様でありすぎる。

そして僕は、レムリア様を思い出すと、その度に質問に答えて下さった時に一瞬見せたあの表情が脳裏に浮かび上がって仕方がないのだ。

丁度そんな事を考えながら部屋のベッドで寝ながら眠りに入ろうとしていた時、部屋の扉が開き、レムリア様が顔を出して言った。

「ユイスよ、上で少し、話をせぬか」

円形を描くその間には夜空の淡い光が注ぎ込んでいた。

ユイスはレムリアに小脇に抱えられ、九院室上層部にある下から続く空洞を通ってそこに上がって来た。

「さ、到着だ」

「は……はい……」

少しぼーっとのぼせたかのようにふらふらと床に足をつけた。きょとんとしてふわふわと浮いたままのレムリアが尋ねる。

「随分顔が赤いが、そんなに恥ずかしいか？」

「はい、それはもう……」

下を見ながら言つと、にこりとレムリアが微笑む。

「そうかそうか、そんなに嬉しいか」

「え、いや、あの……。はい」

慌てて手を動かしたが、最後に小さく頷いた。

「うむ。して、ここはどうじゃ？」

「えっと、綺麗……だと思います」

空を見回すようにして答えると、レムリアが首を傾げる。

「私がか？」

「あ、それはもちろんレムリア様は綺麗どころか」

口早に言い始めたのを見て、苦笑して手で制止する。

「いや、良い、冗談じゃ。ユイスよ、追々と言っていたその約束通り話をしようという事なのだが、何か聞きたい事はあるか？」

控えめに口を開く。

「では……この前の続きという訳には……」

「言っておいて何だが、その話を語ると私の心が救われてしまうのでな」

レムリアは困った様子で言った。

「……え？」

「自分語りとは概して他人に自分の内や過去を知って貰い、理解されたことに自身が安堵してしまうものだという事じゃ」

その説明を、ユイスは黙って聞いた。

続けてレムリアが口を開く。

「尋ねられたからといって、私が過去をまだ15歳のお主に何でも話すのは余りにも卑怯に思う」

未だユイスは沈黙したまま聞き、レムリアが指を立てて問う。

「そこでだが、少し遊びを交えよう。ユイスよ、私は一体何者だと思うか」

ん、と一瞬考えて口を開く。

「れ、レムリア様はレムリア様で……」

「はは、何と可愛らしい答えじゃ。撫でてやろう」

にこり、と笑って言うと、ユイスが素っ頓狂な声を出す。

「へ」

「遠慮せずとも良い、減るものでもなし。立ったままというのも何じやろう。それ」

はいはい、とレムリアがユイスに力を掛けると、ユイスを浮かび上げらせ、

「あ、わ」

レムリアにまた小脇に抱えられる形で頭を撫でられる。

「正直、私はそう言われるのが一番嬉しい。私の心の寂しさはこのようにしか埋められないだろう。幾ら物があっても何の意味も無い」  
重力を全く感じず浮いたままレムリアに小脇に抱えられ、身体も密着した状態に、ユイスは恥ずかしさで目を白黒させた。

少しの間ゆっくり頭を撫で続け、ユイスも少しは慣れて来た所で徐にレムリアが口を開く。

「お主なら読んでいるだろうが、ある概念の事は知っているか」

ユイスはレムリアの顔を下から見上げる形で言う。

「……は……はい……知っています。その概念で決してレムリア様を呼んではいけないという事も」

「あの概念で呼ばれるとな、心が裂けそうになる程に痛む」

ユイスの無言の返事に一つ間を置いて言う。

「私はな、この世界で特に傲慢で罪深い存在の一人だろう」

その独白にユイスは信じられない言葉を聞いたと言う風で尋ねる。

「レムリア様が……傲慢で、つ、罪深い存在の一人……ですか？  
そんな事は」

「お主は真国をどう思う」

言おうとした所をレムリアがユイスの顔をしっかりと見て遮った。  
ユイスがゆっくり頷く。

「……僕は好きです。皆生活にもお金にも困らないし、レムリア様が仰るように笑顔で、幸せです」

「だが……本当の意味で人々は自由に、自然に生きていると思うか？  
ユイスは反論気味に言う。

「……レムリア様の教えの中で、皆やりたい事はやろうと思えば何でも自由にできます」

「その私の教えの中で、と言うのが既に自由でも自然でも無い」

レムリアが首を振ると、ユイスが声を上げる。

「それはレムリア様が絶対で」

「そうだ。そうなるように私が真国をそうした。私の傲慢とエゴでな」

ピシヤリとレムリアが言った。

「……でも、傲慢というにはレムリア様は真国民に余りにも見返りを求めなさすぎます」

「言つたろう。私は物是要らぬと。国の頂点の地位も権力も本当は要らぬ。全てはただ心が欲しいからだ」

目を閉じて小さく首を振ると、再び目を開きユイスを見て笑つて言う。

「……安心せよ。私は全て自覚し、意図してやっている故、後悔は微塵もしていない。お主のような子供を見ると確信できる」

ユイスがその言葉に少しホツとした表情になると、レムリアは空を見上げて言う。

「私が一体何者なのか、今の話から想像を巡らせてみて思いついたら、それが大体私の正体……そういう事だ」

「は……はい」

二人はそのまま空を見上げて静かにしていると、再びレムリアがぽつりと口を開く。

「時にユイスよ、もうじきこの国は別の国と、人と出会う事になるかもしれない」

「え？ 別の国……ですか？」

ユイスは考えても見なかったような顔で、レムリアは、おや、と首を傾げる。

「そんなものは存在しない、とでも思っていたか？ 私は遙か遠くから来た。当然そこに、人は住んでいたのだ」

そうか……とユイスが目を揺らして気がつく、レムリアは遠い目をして言う。

「千年を優に越すにはやってこれたが、そろそろ時代の変わり目かもしれないぬ。……済まぬな」

「何故……レムリア様が謝られるのですか？」

悲しげにレムリアは呟く。

「異なるものとの接触は、人を変える。お主が好きだと言ってくれ

たこの国もな」

「それは……」

レムリアはユイスから表情が見えないよう空高く見上げ、少し語調を強める。

「だがな。私は守ってみせる。ひたすらに私の傲慢とエゴを貫き通し、この国と民と私の心の居場所を。……例えまた再び罪深き行いをする事になるうとも……な」

レムリアは小脇に抱える力を少しだけ強める。

「レムリア様……」

「そのために、九院室と両隠宮を作ったのだから」

その瞬間、どんな表情をしているか見えないレムリア様から、頬を伝って流れた涙が僕の頬に落ちてきた。

ただ、とても悲しい表情をしているのだという事だけははっきりと分かった。

## 絶海のレムリア 原版・過去編

レムリア真国が成立する以前の遙か遙か遠い昔。

そして遙か遙か遠い人類発祥の地にて、まるで終わること無く文明は進歩し続けた。

人々は自由に機械を以て大空を飛び、上空に存在する数々の浮遊島へとその足跡を伸ばし他の生物と比較すればその繁栄は実に見事なまでのものだった。

人は無から有を造り出す事ができない。

資源が枯渇すれば人は遠くへ、遠くへとまだ人の手のついていない遠くへとそれを取りに行き、自然にその遠くの地にもいつの日にか街ができ国ができた。

高度な技術力を誇る資源の枯渇した国々と、高度な技術力を誇った者達に移り住んだ資源の豊かな新興の国々。

無限に海と大地と大空の広がるこの世界においてすら彼らはいつの日にか争いを始めるようになった。

高度な文明を持った彼らの争いは壮絶だった。

感覚の麻痺した者が一度外気圏に浮く浮遊島を他国の地上の大地に落とし、その国に甚大な被害を及ぼすという超えてはならない一線を超えてしまつて以後、その戦争は止まらない拡大を遂げた。

禁止されていた筈の大量破壊兵器による報復、そのまた報復、戦火の勢いは止まる事無く瞬く間に広がっていった。

文明の始まりの国々から最も遠い辺境の国々で戦火に巻き込まれるのを恐れた人々の中にはより遠く、遠くへとまだ見ぬ新天地目指し逃げ出して行く者もいた。

しかし、そうでない国は自国が生き残るには最早他国を全て滅ぼさねば終わらない終わりの見えない恐怖に陥った。

そんな中、以前より人そのものの強化の研究を、超能力を操る浮遊島に生息する生物などを元に行っていたある国が存在した。

その国の中枢で行われていた計画の名を人類絶対進化計画と言った。

その計画はいつからか、生物兵器としての転用にも熱を帯び始め、その国にも戦火が及ぼうとしていた時、まず二体の白銀の髪と青い目をした人造人間が生み出された。

自我を極限まで抑えられた二体の超能力を操る人造人間の生物兵器としての性能は確かに優秀だった。

人型の大量破壊兵器として、二体は攻めると命じられた国を跡形もなく破壊した。

しかし、その二体は致命的な欠陥があった。

自我を極限まで抑えられた結果、命令が正常に働かなくなり暴走を引き起こした。

二体の人造人間は猛威を振るい、次々に国を滅ぼしていった。

最早コントロールの効かなくなったその二体に対し、その国は保険として用意していた更に四体の人造人間を投入した。

その四体には人類が戦争によって最後その文明と技術の殆どを失ってしまったというありとあらゆる知識を注ぎ込まれ、最悪、人類を導く存在となるよう人間の個としての人格を与えられ生み出された。

四体は真つ先に暴走した二体の抹殺を行いに向かわされ、戦闘を行った地域で壊滅的被害を出すことになったが、激闘の末に倒すことに成功した。

だが、その後すぐにこの人造人間を生み出した国は他国に酷く恨まれる事になり、四体は結局暴走した二体と同じく他国を滅ぼすよう、そして自国を守るように命令を下された。

四体は下された命令を忠実に遂行して行つたが、人間としての人格を持たされたが故に自分達の存在意義に対して実際にしている行動に疑問を抱き始め、四体の内一体が自身の判断で自国に牙を向き、滅ぼしてしまった。

最早その時、文明の始まりの地一帯の大陸は巨大なクレーターの

湖が幾つも残り、時には陸地ごと吹き飛びただただ海が広がり、僅かに陸地の一部分が残るに過ぎない有様だった。

かくして、四体はその後最終的にそれぞれ東西南北の方角に別れ、遙か遙か遠くの空へと散って行った。

別れた四体は、自分達の存在意義を遂行する為、人類を導くべく、戦火を逃れた辺境の地に住む人々の元に降り立った。

知識はあっても経験の無かった彼らにとっては人類を導くというのは失敗の連続だった。

最初は好意的に迎えられても、次第にその余りにも普通の人類と隔絶した力に恐怖され、迫害され、追い出された。

そして、その後も何度も何度も失敗した。

それから永い時を生き、白銀の髪に青い目を持った四体の人造人間の内の一人が「レムリア」と呼ばれる存在だった。

白銀の髪に青い目をした四人の者達が空に浮いていた。

「粗方の事は終えた。……我々はもう共にいるべきではない」

面立ちが秀麗な男性に見える一人が言った。

その男性に全く劣らぬ美貌の女性が言う。

「だが、私達はこの世に四人しかない同胞だ。別れなければならぬ訳では」

その女性と全く同じ容姿をした女性が言う。

「もう、自覚している筈だ。私達は既にこうして四人で居続けても、心の痛みが癒える事はない」

「別れても問題ない。我々は互いに離れたとしても、どこにいても分かるのだから」

目を閉じて四人目のもう一人の男性とやはり全く同じ容姿をした男性が言った。

「我々は未だ破壊しかしていない。故に再生させなければならない、我々の存在意義にかけて」



「だが、本当に再生させる必要があるのか？ また同じように」  
「破壊しかしていない我々にそのような議論をする資格は無い」  
「行動しなければ始まらない。ただ、やるだけだ」  
その後、四人はそれぞれの分かれる方角を決める。  
「さらば、同胞よ」「さらば、同胞よ」  
「さらば、同胞よ」「さらば、同胞よ」

そして、四方向に散っていった内の一人が私だった。

私達四人は、荒廃しすぎてしまった文明発祥の地で僅かに生き残った人々に恐怖されながらも、彼らをより集め、せめてまともに生活できる状態まで戻す手伝いをした。

しかし、彼らは私達を見ては恐怖と憎しみの目を向け「世界に終末を齎した者」と呼び、私達は最早この地に留まり続けたとして文明再興などできないと判断した。

そして議論の末、四方向に分かれる事を決めた。

文明発祥の地から離れば離れるほど戦争の傷跡は目に見えなくなっていたが、戦火を逃れ目的地を定めず無計画に移動をした人々の技術力は余りにも移動を急ぎすぎた為に、移住の成功した例に比べ失敗した例は非常に多く、そのまま衰退してしまっていた。

未開の地には当然未知の生物が住まい、未知の病気が存在し、気候が違う事もそれを助長していた。

それでも生活をしていた人々の元へ私は降り立ち、失われた技術の復活を目指し協力しようとした。

だが、彼らはすぐに恐怖を目に浮かべ、私を拒絶した。

当然のように空を超高速で自力飛行し、どんな外敵であっても、それが生物で無く自然現象だとしても軽く薙ぎ払う事のできる力は、私達四人が「世界の終末を齎した者」と呼ばれる事を知らない彼らにとっても、単純に恐怖の対象でしかなかったのだ。

良かれと思ってやったが、当時の私は余りにも人間を知らなさすぎ短慮で、その後も愚かな行いを繰り返した。

一度学んだ反省から、為になるとしても安易に力を行使しないようにと決め、また新たな地を探し求めた。

辿りついた先に見えたのは十数の飛空艇の姿だったが、惨状が広がっていた。

当時の飛空艇は高速で移動でき、水に関しては大気中の水分を抽出する技術があったが、後続からの補給部隊がある訳ではない以上、食料は必須な存在であり、補給の為に海上で海洋生物を獲る、地上に着陸して現地植物の採集や動物の狩猟によって賄うか、そうでなければ定住して作物を栽培する必要があった。

その十数の飛空艇は、その地に定住して作物の栽培を行おうとしたが、気候条件や知識不足の問題で失敗していた。

高度な機械化のお陰で作物を容易に大量生産可能だった当時の多くの人類の中で、早々に戦火を逃れるために逃げ出した富裕層は、農業に関する知識を持たなかったのだ。

彼らは予定していた作物が取れなくなると採集や狩猟に力を入れたが、未知の生物との遭遇によって人々の命に犠牲が発生する事もあり、戦争とはまた違う恐怖から、果ては地上に乗員を残したまま飛空艇を勝手に発進させて逃げ出した者も現れ、次第に集団としての統制を失った。

私が見たのはそれでも懸命に食料を調達しようとする者達の姿だった。

安易に力を使わないと決めた筈の私はその状況にどうしても我慢ができず、その代わりに今度は彼らと直接の接触を控え遠くから見守ろうと決めた。

夜に現地生物及び植物で食用に耐えうる物を狩って彼らの住まいから程遠くない彼らが普段狩りに出かけに通る所に置いておいた。

翌朝、彼らは充分な量の食料を見つけ、気味悪がったが飢えを堪える事はできず、それらを食べて腹を満たした。

遠くから見えた彼らの表情が少し綻んだのを見て、私は嬉しくなったが、それは間違いだった。

それからというもの、定期的に食料を届け続けると、ある時から彼らは自分達で採取と狩猟に出かけるのを止めてしまい、私が起こしている現象を待つようになってしまったのだ。

私は彼らが自分達で努力する氣力を削いでしまったのだとその時になってようやく気づいた。

これ以上続けるのは良くないと判断し、ある夜、彼らの住まいから程遠くない地域で広範に森を吹き飛ばし、大地を耕し、川の流れを整えて畑を作り、彼らの栽培していた穀物の適切な栽培方法を見つからないよう拝借した紙に畑の位置と合わせ書いて残した。

加えて、穀物の栽培が軌道に乗るまでは食料は届けるが、それ以後は自力で何とかして欲しいと書き添えた。

既にこの時私は無意識に人々に恐怖される事に怯えていたのだろう。

文明を元に戻す以前の問題だった。

彼らが穀物の栽培に成功するまで見届けた後、私は最早彼らに接触できずその地を後にした。

力を使っただだ一方的に助ければそれで全てが解決するものではないという事を、ようやく理解した。

その後私は、どうしたら人と上手く関わり文明再生ができるようになるか、その手がかりを求めてまずは人の心理を学ぶ事にした。

その為、目立ちすぎる髪を染め、小国規模で移住に成功した比較的人口の多い新たな地を見つけ、そこで人々に紛れ生活を始めた。

小国規模で移住に成功していた地は、実際既に国と言って差し支えないぐらいに、その国は強力なリーダーシップを執る指導者の元で纏まり、機能していた。

そこにレムリアという名ではなくマーサという偽名で紛れ込んだ私は、その時私が手を出さなくとも自然と文明は復活していくよう

に思ったが、私が取り返し の付かない破壊の限りをし尽くした事は紛れも無い事実で、せめても技術の早期復活に協力できるようにと研究者として働き始めた。

そして実際その国で技術は時を重ねるごとに目覚しい復興を遂げて行った。

基幹産業が整えられ、食料の機械による大規模大量生産が当然のように行われるようになり、次々に物が作られ、売られるようになり豊かになった。

復興中は国民が一丸となって働いていたが、生活基盤が安定し、機械が普及し生活が楽になり、余裕が生まれていった。

一方で私はひたすら研究者として働き続けた。

膨大な知識のあった私には、失われた文明の機械の設計図、機械の部品を製造するための機械の設計図、必要な材料や加工法、原理、それら全てを文字としては当然の如くまるで映像で見てきたように知っていた。

次々に失われた技術を復元させ、全く疲れず睡眠も必要とせず飲食も必要とせず昼夜問わず働き続ける事のできる私は研究所で重宝されたが、共に働いていた研究者達は研究所を離れていった。

本当に最初は、私は髪を染めてはいたものの、それ以外の容姿が人にどう思われるのか恐怖された経験しか無かった為、男性から好意を向けられ、女性からは嫉妬を向けられ、その初めての経験には動揺したが、それより最も異端なのは私の能力が高すぎた事だった。私を好きだと言った男達は、私が余りに優秀すぎた事で好意から一転劣等感を抱いて研究所を辞めて行き、女性も劣等感からやる気を失い研究所を辞めていった。

放っておいても全く容姿の変わらない私は、年を重ねたように見えるように偽装して生活を続けた。

度々国からは功労を表彰されたが、その周囲からの視線は異物を見るような目で、私は孤独になっていった。

私が過去にした行為から考えれば、孤独である事など何の代償で

も無いとその時は思えたが。

知識通り資本主義経済は再興し、一応の私の存在意義は果たせているのだと……その時私は思い込んでいた。

だが、研究者の私は度々命を狙われた。

当然私を殺す事など不可能なので、全て未遂で終わったが。

余りにも早すぎる技術の復活の原因となった私は恨みを買ったのだ。

国からは感謝されたが人からは恨まれる。

目覚しい再生を遂げたその国において、確かに生活は豊かになったが、私が急速に失われた技術を復元して機械化が進みすぎた結果、労働力として必要な人の数を超えた分の人が余った。

余った人々は生きる為に移住しようやく定住した筈のその国から、今度は金を稼ぐ為に仕事として国を出て他の地の開発に行くようになっていったのだ。

国で誰かが不自由なく暮らす一方で、誰かが見知らぬ地に飛び出し苦勞して暮らす。

人と人との間には厳然たる経済格差が開いていた。

不満が生まれるのは当然だったのだろう。

国民一人一人にIDを付与し、国がその管理を機械で行い、社会秩序は保たれていた。

しかし、他人に危害を加える者、殺してしまう者、自殺する者がいなくなる事は無く、世間ではその情報が淡々と流された。

戦争から逃れ生き残る為に、移住してきた筈なのに。

最早国が一丸となっていた時の人々の活気はその国からは無くなっていた。

人の心理を学ぶというのも余り上手く行かなかった。

結局技術の復元に集中したのも原因だったが、時間が経てば経つほど私と人との直接の会話は減っていった。

人と食事を取る度に感じた違和感はこの時から私の中にあった。

彼らは至極当然のように食事を取り、場合によっては残す。

大規模生産できるようになった以上、残しても人が食べるのに必要とする分には確かに問題なかったが。

「食事ができるのは嬉しいと思いますか？」

私が彼らにそう尋ねると、

「え？」

「ん……まあ、嬉しいには嬉しいと思うよ。美味しいって言った方がいいかもしれないけど」

「はい！ オレ、食事ができて、嬉しいですっ！」

一人がそう明るく言った瞬間、彼らはくすくすと笑った。

彼らの様子は必死で生きる為に食料を集め、食べていた時の人々の表情、私が見て嬉しくなった時の表情とは違った。

「あの機械女でも、あんな事言うとはね」

「嬉しいですか？ ってアイツが一番嬉しくなさそうな顔してるよな」

「そうそう、自分の顔見て見ろっての。にしても美人なのに勿体無い」

「逆に美人すぎて気味悪いと思わないか？」

「お前、初めて会った時惚れてただろ」

「お前がな」

彼らは私に面と向かっては言わず、私のいない所でそういう事を話していた。

彼らは時と場合によって言うことを変える習性があったから、それが本当に本心なのかどうか私には判断がつかなかったが。

本心を「言っている」のか、「言っていない」のか、それとも「言えない」のか、それが私には分からず、彼らは複雑な生命体だった。

私は研究者として働いた給料を、自分の為に何かを必要とした訳でもなかった為、それらほぼ全てどこかしらに寄付していたが、招待されて寄付先の施設の子供に会いに行った事があった。

子供達の必要とするものを私が一人の子に手渡し、

「ありがとっ！」

そう笑顔で受け取った子供の顔は、私が見て嬉しかった表情と同じで、私は嬉しかった。

人は成長するにつれて本音を曖昧にする。

本音を曖昧にする事が人として成長するという事なら、それはやむを得ないのだろうか。

また、失われた技術を復元した研究者として有名で、多額の寄付をしていた私は、ある報道番組にゲストとして呼ばれた。

「相当多額の寄付をされているという事です、どのような想いで寄付をされていますか？」

「寄付を必要としている所がある一方、私には特に使い道がないので、必要としている所で使用して貰った方が効率的と考え寄付しています」

「そ、そうですか……」

その女性キャスターは驚いた。

「使い道が無いと言われましたが、何か今欲しい物がありますか？」

「ありません」

「で、では、普段休みの日には何をされて気分をリフレッシュされますか？」

「いえ、復元していない技術が残っているので、その研究をしています」

「休日にも研究をされているのですか？」

「はい」

「ま、まだ技術の復元をされるのですか？」

「しない方が良いですか？」

彼女は困ったように言う。

「い、いえ、そういう事では……。では、研究による技術の復元とは、マーサさんにとってズバリ何でしょうか？」

「私にとっては特に必要の無いものです」

「……は？」

「……私自身にとって技術の復元は必要ないですが、この国にとってはあった方が良いでしょう？」

意味が伝わらなかつたと判断し、私は改めて説明をした。

「そう、ですねえ……。あの、マーサさん自身にとって必要ないとは……どういう意味でしょうか？」

「技術が復元されなくても私は生きていけるという意味です」

「な……なるほど……」

その取材を終えた後、その場に居合わせた人達の私を見る表情は奇異な物を見るようだった。

そして、それ以来私が命を狙われる回数が増え始めたのだった。文明を再生させる事、それこそが私の存在意義なのだと思つてやつてきたが、私自身は特に感慨も無く空虚な気持ちで技術を資料に残し終えた後、私は研究室を去り、国を去り、また違う地へと向かい、同じように技術を復活させていった。

そしていつの日か気がつくと、また戦争が始まった。

人は年を重ね成長するとしても、過去の間違いを繰り返さない訳ではない。

戦争の発端は独立戦争だった。

急速に技術が復活した国を出て、新たな地を開拓してそこに移り住んだ人々が本国から独立して新たな国を建国する為に始まった。

問題は兵器の性能が既に高すぎた事だった。

未開の地の生物に対する高性能兵器や山林の開発や鉱物資源を採掘する為の高火力爆薬などを、脆い人間に対して使えば甚大な被害が出るのは明白だった。

互いの国の基幹産業を潰し合い、軍事施設を破壊しあい、経済は破綻し、人が大量に死んだ。

人に原因があるのか、高度な技術に原因があるのか、私に原因が



あるのか。

その状況下で、私は力を行使しなかった。

経験から言つて、私が力を行使して一番早く戦争を止める方法としては一国を残し周囲の他国全てを消し飛ばす事しか考えられなかったからだ。

結果として、自然に国は荒廃し、その形を失い、文明は再び衰退した。

戦争をして潰しあつた国で生き残つた人々は、戦争をしていなかった国へと難民となつて流れ込み、また問題を起こした。

私があちこちで技術を復活させていた為に、どこの国も必要以上に労働力としての人を必要としていなかったのだ。

「もうこれ以上人はいらない」

ある国の高官が思わずこう口走つた。

「要らない人間はいるのか？」

という問いがある。

「要らない人間はいない」

しかし、大部分の人はこう言い、更に再びの問いが返る。

「それでも本当に要らない人間はいないのか？」

「それでも要らない人間はいない」

そしてまたこう答えが返るのだという。

私には不思議だった。

「要らない人間はいない」と大部分の人はそう言いながら、戦争では事実殺し合っているのだ。

しかし、私にとって「要らない人間はいない」という問題自体「いてもいなくても私は生き続ける」ので考える必要性が無いが、そうでありながらにして私は億単位で人間を殺し尽くしたどうしようもない存在の一人だった。

少なくとも、難民が流れ込んだ国にとっては「人は要るのか、要らないのか」という問題ではなく、表現としては「受け入れられない難民は邪魔だから他所に行つて欲しい」と言う状態だったのだろ

う。

文明生活に再び慣れてしまった大分部の人々は元の生活を、近くに豊かな国があるにも関わらず、それを見ずに新しくやり直すという選択が取れなかったのだ。

難民の受け入れに窮した国で、手早く対策を打った国はまた新たな地の開発を自国の保有する技術で始め、彼らをそこに移住させる計画を実行した。

難民の受け入れが上手くできなかった国は、治安が悪化し、暴動が起き、ついには難民の虐殺が起き、虐殺される難民がその国の国民を殺し、また争いの火種となって国は衰退し、泥沼の様相を呈した。

流石にそういう事態を見て、人は自然に物理的ないしは経済的にも、どうあっても争い合うのだろうと大体そう理解した。

ただ、技術を復元させ、文明を復元させればそれで良いというものではないとも理解した。

「痛いよお」「お腹すいた」「寒いよ……」

戦争で荒廃した国を訪れると、親を失った子供、親に捨てられた子供が泣いていた。

それを見た私は、助けようかと思ったが、一時的に力を振るって助けたとしても、彼らは、ましてや子供なら確実に私に依存してしまっただろうと思い、それはできなかった。

だが、難民問題を抱えている国を放置しておけば、いずれまた、目の前の惨状が広がるのだろうと思った時、私は再び力を使う事を決心した。

私は戦争が起こり荒廃した土地で、飛空艇を作る設備が残っていた場合は襲撃しては破壊し尽くし、荒廃した国を去って豊かな国に移ろうとする飛空艇に襲いかかつては力を掛けて強制的に元の地に戻し、飛空艇を奪い取って置き去りにした。

既に難民が溢れ返っていた国では、強制的に彼らに力をかけて、奪い取った何隻もの飛空艇に押し込め、同じように戦争が起きた地

に戻し、徐々に飛空艇を増やしながら、その工程を繰り返した。一通り終わった時には、自力で空を飛ぶ何者かが無人の飛空艇団を引き連れ、難民を次々に連れ去ったという情報が彼らの国々では有名になったが、確かに最悪な事態になるのは強制的に止められた。しかし、それで全てが解決した訳ではなく、荒廃した国で人攫いが横行したりと、新たな問題は起きたが。

その後、私は国々の動向を監視もし再び戦争が起きた場合には介入して無用な争いを止めようと考え、外気圏のとある浮遊島に集めた飛空艇団と共に降り立ち、私個人の研究所として使用する事を決めた。

浮遊島の地盤をくり抜き、巨大な地下空洞を作り上げ、そこに飛空艇をしまい込んで、それらを分解し研究所の為の資材とした。

他に必要な機器は、最後に研究者として働いた国に一度戻って調達し、各種資源は自力で空を飛び回り集め、研究を行った。

国々の監視ネットワークを作るのは私が同じ技術を復元し続けただけに容易だった。

浮遊島にいながらにして、各国のネットワーク情報収集が可能になったから、特にやることは無かった。

そこでふと、人類絶対進化計画の研究を、今の互いに争いを始めてしまう人類を私のような生物兵器としてではなく順当に進化させる事に応用したら、何かが変わるかもしれないと考え、以後かなりの期間その研究に没頭する事になった。

監視生活を始めてから、致命的に文明が衰退するような大規模な戦争は起きなかった。

流石の彼らも私達が猛威を奮った終末戦争から逃がれ、技術復元後の独立戦争を経験し、強力すぎる兵器での相互攻撃をしたが最後にそこに勝者など存在せず、国の致命的な衰退しか無いのを早々忘れ

はしなかったのだ。

また、今度は終末戦争が行われた地の方角に戻るという方法も存在し、資源問題で争い合う事も早々無かった。

私が難民をそれぞれの地に強制送還し置き去りにした国々も、それぞれの復興を時間と共に徐々に遂げて行った。

それよりどうかしていたのは私の方だった。

人類絶対進化計画それ自体が私達のような異端な存在を生み出した研究であるにも関わらず、私はその研究をずっとしていたのだ。

何しろ、私自身という生きた資料が存在する為、体内の各種自己修復・自己増殖型ナノマシンや「クアントリア」という私の強大な力の源泉である変異性極小共生生物の抽出などは容易だった。

研究の過程で小動物を捕まえては、老化抑制ができるか、「クアン」が使えるようになるのかどうか実験を繰り返した。

試行錯誤の中、既に人間用だったものをデチューンする必要性があったが、老化抑制は正常に働き、変異性を正常性のクアントリアに戻したモノを更に調整して拒否反応を無くして共生させると、飛ぶ事ができるようになり、確かに成功した。

その後も幾つかの生物で実験しデータを蓄積した後、生態系を乱す訳にはいかないのでそれらは処分した。

また、知識の中にクアントリアには自然界に存在する結晶クアントリズムと反応性があるという情報があった事からクアントリズムの調達をして特性研究も行い続けた。

地上の急速な技術復元を遂げた国々は、戦争をしなかった為に悲惨な事態にはならなかったが、時と共に高齢化が進み、若い者達は将来を見据え自発的に新天地へと飛び出して労働人口が流出していき、更に高齢化が進行していった。

医療費の増大で財政が逼迫した国々の中には、私達を生み出した国のように、人間の老化抑制などの技術を研究するようになったが、それが成功する前に彼らを新たな脅威が襲った。

新型ウイルスの流行。

広範に人が広がり未開の地を巡り、潜伏期間が長くかつ致死率の高い未知のウイルスと遭遇した結果は悲惨だった。

高齢化社会かどうかに関わらず、次々に人が倒れ、急速に人口が減っていった。

人々は働いている場合ではなくなり経済は麻痺し、ワクチン製造が間に合いそうもない事態に人々は恐怖し、また飛空艇に乗って遠くへと逃げ出して行った。

彼らは逃げ場があるが故に本当に良く逃げ出す。

社会が成り立つのに元々必要分しか存在しなかった人口の四割がウイルスで死に、飛空艇で逃げ出した人々がその分いなくなつては、残った人々だけで社会を維持するのは明らかに不可能だった。

クアントリアのお陰でウイルスなどに感染しない私がワクチンを開発した時には、時既に遅く、国には人ではなく使用されなくなつた建物と機械が残つたというような有様だった。

私が復元させた技術の数々が取り残されているのを見て、それはまるで私が取り残されたように思えた。

文明が自然に衰退していく一方で、私は一体どうするのが正しいのか分からなかった。

失われた技術の復元は確かに行つたが、結果は一時期戦争を引き起こし、ウイルスで人が大量に死んで無意味な物になった。

人類を導くと言っても、人は余りにもあちこちに広がりすぎていた。

地上で戦争が起きないかどうかの監視は意味がなくなり、人類絶対進化計画の研究もある程度進んだ所で、私はこれからどうすべきなのか、何か手がかりを見つけれないか、と特に当てもなく、浮遊島ごと外気圏を移動しながら各地の地上を放浪し始めた。

人々が飛空艇で移住していった新たな地においては、失敗した例の多さと成功の例の少なさがまた見られ、ただ過去を繰り返しているようだった。

行き先も決めず、ふと、偶然見つけたのは、ある大陸の小さな村

だった。

高度な文明の姿はそこには無かったが、確かに人は生き、その表情は明るく見えた。

私は上空から村の状況を見た上で、村の中心から明らかに離れて建っている一件を、接触しても目立たないと思い訪れる事にした。

家の外で畑仕事をし、健康に日焼けしている老人は私にすぐ気がついた。

「あ？ おめえ、どこから来た？」

「あの方角からです」

手で示した方角は確かに私が来た方向だった。

「んー……あっちの方角なあ。荷物ももたねえでか？」

「私には必要ないので持っていないせん」

首を傾げて老人が言う。

「ん？ なんだあ、変な別嬪さんだな。……んで俺に何か用か？」

「特段私はあなたに用はありません」

「……あ？ あー、そうかあ。特に用もねえのに来たのか？」

訝しげな目だったが、この老人は今までに人々が私を奇異の目で見てきたような、そういう目とはどこか違った。

もしそういう目で見られたらいつも通りすぐに立ち去れば良いと思っていた私は、彼と会話をし続ける気になった。

「行き先も決めず旅をしているので偶然着きました」

腕を組んで唸る。

「はー、旅。旅……旅、なあ。俺もどっか行ってみてえと思う時はあるがあ……おめえ旅はどんなもんだ？ 楽しいのか？」

「楽しい……？」

「何だつまんねえのか？」

私は手を振って答える。

「楽しい楽しくないではなく、私はどうしたら良いのか、その答えを探しているだけで……」

「何言ってんだ？」

「え？」

「『どうしたら良いのか』って、そんなの『おめえが何したいか』

……. ほんだけだろに」

当然のように言われたその言葉は、とても新鮮だった。

「私が何をしたいか……？」

「そうだよ。おめえ何したいんだ？ 旅じゃねえなら何だ」

「……私自身にはしたい事はありません」

彼は要領を得ない様子で聞く。

「はあー、つまり何かあ？ おめえは自分のしたい事を探してんのか？」

「そういう事ではなく私はどうしたら私の存在意義を正しく果たす事ができたと言えるのか、その答えを探していて」

上手く伝わっていないと思いながら私は普段言わない事まで言った。

「んなあー、複雑みてえだが……このまま立つたままつても何だ、あつちだ」

言つて、老人は家を示した。

そのまま後をついていき、私達は家の庭先に座った。

「私には失われた文明の技術を復元させ、人類を導くという存在意義があります」

「は、何だそりゃあ？ じゃ、おめえ試しに俺を導くとやらをするとしたら、どうすんだ？」

「技術を教えます」

私は極普通に答えた。

「俺が必要ねえって言つたらどうすんだよ」

「必要ないのですか？」

「現におめえがいなくても今まで俺は生きてるが？」

「はあ？ と彼は言つて、私はそれに肯定するしかなかった。

「……. そうですね。……. そう言われると私は存在意義が無くなってしまう」

「大体おめえその存在意義は、どこから来たんだ？」

「私が生まれたその時から、そう決められています」

「おめえの親がそう決めたのか？」

「そのようなものです」

「つかあー、随分調子こいた親だなあ。で、その存在意義を果たす  
つて？」

「はい」

「だが、現にどうしたら良いのかわかんねえんだろ？」

「……はい」

事実だった。

「まあ俺が思うに、今のおめえじゃ人類を導くなんて一生無理だ」

彼は腕を組んでそう断言し、私には衝撃だった。

「何故……ですか？」

「そんな湿気た面で『俺がめえらを導く』なんて言っても誰もつ  
いていかねえよ。寧ろまだ俺の方がマシかもしれねえ」

無性に悲しくなった。

「……では、どうしたら良いでしょうか」

「とりあえず笑ってみろ？　いくら別嬪でも今のその表情じゃ駄目  
だ」

「……こうでしょうか？」

私は笑顔という状況を再現するように表情筋を動かした。

だが、彼は本当に酷い物を見たように言った。

「おめ、ひでえなあ。不自然すぎて気味悪い。そもそも笑ったこと  
あんのか？」

「……どうでしょう」

「まあ無理に笑っても意味ねえ。だが、俺は笑えるぞ。……こうだ  
あ！」

大声を上げて彼は心底嬉しそうな笑顔を作って見せた。

それは私が昔見て嬉しかった表情と酷似していて、私は驚き、ど  
うしてそんな風に笑えるのか尋ねた。



「何故、笑えるのですか？」

「俺はなあ、今この時を生きると心の底から思えば、それでいつでも嬉しくなるんだよ。だから笑える」

「今この時を生きている……」

「おめえもやってみろ？ そのままで無理なら『俺は生きてる！』」

……とこんな具合に腹に力込めて声出してみれば良い」

挑戦する事にした。

「……私は生きている」

「もつと腹から！」

「私は、生きている」

「もつと大きな声で！」

「生きている！」

私にとって久しぶりに上げた大きめの声だった。

「出るじゃねえか。で、どうだあ、顔は全く変わってねえが、何か気分変わったか」

「……少しだけ、何かがこみ上げてくるような感じがしました」

「それだそれ。嬉しい、楽しい、面白い、そう感じた時には自然に笑うもんだ。そういう風に感じたことは無いのか？」

「嬉しいと感じた事があります」

「おう、どんな時だ？」

「空腹だった人が食事をした時の表情や子供に物を渡した時にありがとうと言って笑った時の表情です」

「そうかあ。なら、丁度頃合いだし飯でも作って食べてみつか？」

「……はい」

私の話を聞いてくれた彼の「ゲン」という老人は、私にとって、悲しさと虚無感以外の感情を呼び起こし、抱き、自覚し、それを言葉で、表情で、表現できるようにしてくれた。

紛れもなく私の先生だった。

食事を作るに当たり、畑で作物を収穫する作業から始まった。

「おめえ、野菜育てた事はあるか？」

「直接育てた事はありません」

彼はため息をついて説明を始めた。

「何だ、無えのか。いいかあ、これはな、畑耕して、石どけてえ、肥やし撒いて、種撒いてえ、水やって、雑草抜いて、寄ってくる虫共追い払ってえ、そうやって育てて実ったもんだ」

「はい」

「そうすつとなあ、俺が育てたあ！と達成感がある。しかもどうだ、美味そうじゃねえか。で、次に実際食べてうめえ！と実感する訳だ。それで腹を満たして、満足してえ、俺は生きてる！とまあ苦勞と達成感の後には嬉しい事だらけだ。やってみなけりや分からんだろうが、おめえもやる気があつたらやつてみる と良い」  
そうして必要な分の作物を収穫する彼の姿は、私が技術を復元した国々に住んでいた老人達と比べると、比べる必要も無く活き活きしていた。

生きていた。

実際に料理する時も、食べる時も、そうだった。

「どうだ、うまいか？」

「美味しいです」

「なら、もつとうまそうに食べ。おめえの場合はうめえ！って声に出せ。これがうめえんだ！ってなあ。おめえも手伝って作ったんだ。これは俺が作った料理だ！って実感しろ」

私は彼に言われた通りに「美味しい」と声に出して食べた。

これは「私が作った料理だ」とも声に出して言った。

声に出すと、少し心が温かくなったような気がした。

当時の私はこの経験がレムリア真国に大きな意味を持つ事になるとは思ってもみなかった。

食事の後、彼は陶器造りをしているのだと言って、どうするか聞

かれ、私は見学させて欲しいと頼んだ。

部屋には轆轤があつたがそれは使わず「手捻り」という方法で彼は土を素手で触って器を作り始めた。

「見てねえでおめえもやってみるか？」

そう言われて、私は挑戦する事にした。

知識にもあつたが、説明された通りにやっているのと彼が声を上げた。

「うめえじゃねえか」

「そうでしょうか」

「おめえの場合はそこであ、そんな事聞き返すんじゃないで褒められて嬉しい顔をしろ。する練習をしろ」

「はい」

「次俺が褒めたら、ありがとつでも嬉しいでも何でも良いから言ってみろ」

その後実際に彼はまた私を褒めてくれて、私は「ありがとございます」と返した。

声に出すと、また少し心が温かくなったような気がした。

次に彼は陶器用の土をすぐ近くの山に取りに行くと言ったので、私は彼が準備するのをそのまま待っていた。

「何だあ、ついてくるのか？」

「はい、ついて行かせて下さい」

「別に構わねえが、その格好で良いのか。汚れるぞ？」

「問題ありません」

「まあそう言うならそれで良いが」

山道をのぼっていくとやがて、目的の土が取れる場所に到着した。彼に言われて私はスコップと一緒に土を採取していった。

彼が少し疲れた汗を掻いてるのに対し、私は全く疲れていなかった。

「おめえ、見かけによらず力あるなあ」

「ありがとございます」

「今のは感心しただけなんだが……まあ、良い」

土を積んで重くなつた帰りの台車を行きと同じく彼が引こうとしたので、私は昼食を食べさせて貰っているからと言って、台車を引いた。

力を使えば全で一瞬で済んでしまう事だが、私は彼の目の前であからさまな力を使う訳にはいかなかった。

戻ってからは持ち帰つた土を陶器用の土にする為に空気を抜く作業を手伝い、夕食もまた一緒に食べた。

「ところで、おめえ旅をしてるっていうが、今晚どうすんだ？」

「その事ですが、近くに私の畑を作つても良いですか？」

「はあ？ 話が見えねえ。今晚どうすんのかって聞いてんだよ」

「畑を作ります」

「夜にか？」

「はい。駄目ですか？」

「寝ないのか？」

「はい」

技術の復元をした国々では寝ないで作業するというのは一定の頻度に押さえていたが、私は肯定した。

「……おめ、ホントに不思議な奴だなあ。俺には夜寝ねえで畑を作るつてのが信じられねえが、駄目とは言わねえよ。普通はそんな事いう奴いねえけどな。一応聞くんが、おめえ、おめえ自身の事は大丈夫なんだな？」

「はい。大丈夫です」

「おう、なら俺は寝る用意すつから。鍬なら使つても構わねえが風邪引くなよ？」

そして彼は宣言通り寝る用意を始めた。

夜も煌々とつけられる照明が無い環境では夜になったら人は寝る。一方私は彼の家を後にし、一気に浮遊島に戻って適当な作物の種類から始まって必要な道具を持っていた素材で用意し、地上に再び戻って作業に入つた。

一晩の作業で彼の畑と同じ面積を耕し、畝を作り、種を撒いた。作業を終えた私は畑の側で朝になるまで必要はないが寝て時間を潰した。

朝になってから、水を畑に撒き始めると、朝早く起きて来た彼がやってきて驚いた。

「おお、何だあ！？ ホントに畑できてんじゃねえか」

「おはようございます」

「おはようさん。にしても、おめえ、すげえなあ」

「ありがとうございます。……でも、良いことばかりではありませんん？」

「私が力を発揮すると、人々はやる気を無くしてしまい、私に依存してしまいます」

彼は難しい顔をした。

「そういう経験があんのか？」

「はい……」

「……まあ確かにそうだなあ。一晩でこんだけ畑作れちまうと、家の畑も作ってくれないかなんて言う奴は出るだろう」

彼は納得するように言って、思い出すように続けた。

「何だったか、昨日の。人類を導くつーのは人の面倒見まくるのとは違うだろうさ。だが、やっぱりおめえ次第なんじゃねえか？」

「私次第……ですか？」

「人がおめえに依存するのが良くないと考えるのは分かるが、どうやらおめえにはそれだけできる力があるらしいと」

「はい」

事実だった。

「だがおめえには、開き直って人がおめえに依存すんのを気にせず力使っつて選択肢はあんだろ？」

「開き直って……？」

「ああ」

「しかしそれでは」

彼は私の言葉の上から言葉を重ねた。

「って事あ、おめえはそれはやりたくないってこった」

「それは、はい……」

肯定すると彼は道ばたを指した。

「どんだけおめえに力があるのか知らねえが、例えば、その辺に死にかけの子供がいたとする。……で、おめえは助けたら依存しちゃうからって見過ごすのか？」

「……見過ごしたことは何度も、あります。恐らく彼らは……」

私には泣いている子供達の姿がすぐに思い出され、彼は頭を掻きながら口を開いた。

「……ホントにそんな経験あんのかあ。また暗え顔だが後悔してんのか？」

「どうでしょうか……正直、良く分からないんです。本当に」

更に彼は頭をかきむしり始めた。

「ぬあー。そもそもおめえにとって導くらしい対象の人類ってのは何だ？」

「それはどういう……？」

「おめえにとって、必要なのか、大切なのか、要らねえのか、それともどうでも良いのか、そういう事だよ」

「私にとって……必要です。人類無くして私に存在意義はありません」

言うまでも無い事だったが、言った瞬間違和感を覚えた。

「次だ。おめえにとって、一人一人の人間は何だ？」

「私にとって……」

「おめえにとってはおっかの人間一人が生きようが死のうが構わねえんだろ？」

「それは」

「俺もそうだ」

「え？」

彼は真剣な顔で話を始めた。

「俺の知らねえ遠くのどつかで誰か一人が死のうが生きようが正直、知らねえ。そのどつかの誰か一人は俺には会った事も見た事も無い知らねえ奴で、そもそも生きてるのか死んでるのかも、いるのかも認識できねえからな」

彼は首を振る。

「だがなあ、この村の人間が死んだら俺は悲しい。だが、この村の人間が死んだ事を遠くのどつかの誰かは悲しむのか？ 悲しめねえだろ。死んだ事に気付け ねえんだから、そいつ個人を知らねえんだから。……おめえが見過ごした死にかけの子供ってのは偶然おめえが見た子供だ。見てない子供で死にかけのもいただろ。んできつと今もどつかに一人はいるだろうよ。今この瞬間死んだかもしれねえし、誰かが助けたかもしれねえ」

彼は私に指を突きつけた。

「おめえはなあ、おめえの存在意義とやらを人類という集合体と結びつけてる割には、人類が必要だと言う割には、人間個人を全く見てねえんだ。おめえにとって個人は常にそのどつかの誰か一人ではない」

言葉が、出なかった。

「だが人間一人一人がわんさか集まったのが人類だ。導くんできたのか知らねえが、人類に関わるんなら、おめえが一個人として、存在意義だとかは置いといて、誰か一個人にきっちり関わらない事には何も始まらねえよ。おめえに人が依存しちまうのが嫌だってんなら、力は使わないか隠すしかねえな」

「はい……」

彼は一呼吸おいて確認するように言った。

「……おめえ、実は恐がりで寂しいだけなんじゃねえのか？」

「私が……？」

恐がりで寂しい。

「寂しく無いなら、わざわざ俺の畑の隣に畑作るか？ 見過ごした子供も、助けて自分に依存した後に逆恨みされるのが怖かったんじ

やねえのか？」

「私は、私は……私はっ……私、はっ……」

どうしてか、その瞬間から涙が溢れだして止まらなかった。

私は地面に膝をついて泣き続けた。

私はこの時、悲しみと虚無感の裏に、無意識に人に恐怖される事に怯えて、寂しかった事によりやく気づいたのだった。

「おいおい別嬪さんがそんなピーピー泣いたら台無しだぞあ。まあ何だあ、俺みてえなじじいで良けりゃ話し相手になってやるよ」

「……はいつ……ありがとう、ございますっ……」

彼が差し伸べてくれたごつごつした手は、触れるととても、とても温かった。

ゲンさんとの日々の会話により私は時と共に感情豊かになった。

私が素直に感情を言葉に乗せられるようになると、ゲンさんは照れる事が多くなったが私は気にしなかった。

ゲンさんの家の近くに私は家も建て、作物をじっくり育て、ゲンさんの陶器作りを手伝って過ごし、その際、人が作った物には心が籠っているのだと何度も何度も教わった。

そしてゲンさんは私に度々「私自身がどうしたいのか」を見つけると言った。

作物の収穫を何度か経験し、そして気がつくと一年が経ち、二年が経った頃、ゲンさんは私にまた旅に出るように言った。

「何故です。私はゲンさんと、もっと、ずっと話をしたい」

「……雛鳥はなあ、親鳥の元をいつかは離れるもんなんだよ。初めて会った時のおめえは雛鳥だった。だが、もう今なら大丈夫だ」

私は頑として首を振った。

「嫌です。寂しいです。離れたくありません」

「ったあく、おめえは色々知ってる癖にこれだからなあ。そう言わ



れると旅に出ると言いにくくなるだろうが」

「言わなくて良いです」

「おめ、子供じゃねえんだからよ。このままだとおめえは精神的に俺にどんどん依存しちまう。だから、そうなる前に、おめえは旅に出るべきだ」

私は泣いた。

悲しくて、寂しくて、別れるのが嫌で泣いた。

「……仕方ねえなあ。たまに帰ってきて構わねえから旅には出る？  
戻ってきた時、外の話聞かせてくれりゃあ良い」

観念したゲンさんがそう言い、私もそこで妥協をした。

「……分かりました。でも、必ず戻ってきます」

「よおし。だが毎日は駄目だぞ？」

「では二日置きに」

「おいおい、せめて七日ぐらいは頑張れよ」

「善処します」

「……ああ、そうかい。まあ旅に出るだけマシかあ」

そして出発の際、私はゲンさんに言った。

「あの、ゲンさん」

「ん、何だ？」

「見送る際に、私を『レムリア』と呼んでくれませんか？」

「おめえの大層な名前か。ああ、構わねえよ」

「ありがとうございます。では、行ってきます、ゲンさん」

「おう、行ってこい、レムリア」

私の名を呼んで、軽く手を振って見送ってくれて私は嬉しかった。

「はい。すぐ戻ってきますね！」

「だあつ、こらあ！　少しは頑張れよ！」

そうして、私は村から十分離れた所で一気に飛び上がり、再び各地の放浪に出た。

最初は頻繁に村に戻ってはゲンさんに「戻ってくんのが早すぎるだろうが」と悪態を突かれながらも旅の報告をしていたが、少しずつ

つ、少しずつ、出かけている日数は増えていった。

二年程度では各地の状況は大して変わっていなかったが、各地を巡っていると、いつの日にかにも見た、泣いている、そのまま放っておけば死んでしまいかもしれない子供を、子供達を見つけた。

昔と違い、私の存在意義とは関係なく、私個人の感情で、助ける事で彼らが私に依存してしまうかもしれないとしても、はつきりと「助けたい」と答えが出ていた。

私は空を舞い、彼らが移住するに耐えうる新たな辺境の地を独力で開拓し、畑を作り、家を建て、生活環境を整え、各地で彼らを保護して運んだ。

突然飛んで現れた得体の知れない私の存在に子供達は怖がったが、中には怖がらない子供もいた。

その子供が言った言葉が、

「……かみさま？」

だった。

そう言われた瞬間、私は何か嫌な感じがしたが、その本当に神を見るような子供の透き通った目を見てしまうと、わざわざ否定できず「君を助けに来た者だ」と言つて、その子供の頭を撫でた。

ただ、純粋な目で見上げてくるか弱い子供達を助けようと、そう思った。

私は子供達が私に依存してしまわないようにできるだけ気をつけしたが、空をどんな飛空艇よりも速く飛べる事だけは隠さず、たつぷりあった時間で子供達に様々な教育を施し、空を飛ばして欲しいと頼まれれば抱えて飛び、子供達は無邪気に喜んだ。

ゲンさん直伝の、生への実感を与えてくれる作物の育成とその収穫は子供達と共に一緒にその事を教えながら行った。

しかし、私はゲンさんの住んでいた村で子供に会った事が無かった訳ではなかったが、子供というものを知らなすぎた。

それと同時に、彼らから多くを学んだ。

衣食住が整い、普通に生きていけるにも関わらず、彼らは些細な

事で喧嘩するし、人の数だけ個性的だった。

食事の具の量が違うだけで、互いのものを見比べて少ない多いと騒ぎ、一人がお代わりすれば、それを見て、俺も俺もお代わりしたと思えば結局食べ切れないなど……。

残した分は私が全て食べたが。

だが、喧嘩による言葉や行動の裏には本音が常にあった。

私はそれが知りたくて、どうい感情を抱いているのか、本当は何が言いたいのか、それらを喧嘩する彼らに尋ね続けた。

それを知れば、人が争い合う原因が分かるかもしれないと思って喧嘩していた子供達は、私が「何を考えているのか」「どう思っているのか」「本当は何が言いたいのか」と尋ねると、パツと停止して私に「何でもない」「アイツが悪い」「いじめられた」などと「そもそも言おうとしない」「他人を非難する」「自分が被害を受けた事を主張する」と言った方法で答えて来たが、そういう事を知りたい訳ではなかったので、何度も尋ねた。

答えるのを拒否し、逃げ出そうとする子供もいたがそれはパツと捕まえて、最終的に彼らは大体、

「俺は、取られて、怒ってるの！」

「僕はっ……アレが欲しくてえ、羨ましかったんだあ」

と喧嘩よりも私の問いによって泣き出しながら答え、

「あー！泣かせたー！」

と別の子供に非難された。

この時私は子供を集め私の意思で面倒を見ていたとはいえ、私が私の思う教育を施し、逆に子供から私が学んでいくその行為が、ある意味人体実験のようなものである事をその時は気がついていなかった。

彼らが成長し、大きくなると、私は彼らと離れたくは無かったが、ゲンさんと同じく、巣立たせる事の必要性を感じ、嫌だと言っても一定の年齢に達すると彼らを人が自然と形成した社会へと送り、旅立たせた。

だが、幾ら辺境の地と言っても、飛空艇を駆り人がやってきた。

新天地を探していた彼らにしてみれば、小規模とは言え、都合良く充分生活環境の整った地があるように見えたのだろう。

「ここを開拓の拠点にさせて欲しい」

そう言い始めた。

しかし、私は泣いている子供を助け、いずれは旅立たせたかったのであって、放っておいても各地を開発する人々と、私が子供達の為に作った地を共有する程彼らに個人的感情を抱けず、寧ろ見なかった事にして立ち去って欲しかった。

それでも彼らにしてみれば都合の良い土地があるのを見つけてしまった以上、それを利用しないという選択肢がどうしても取れないのだ。

それは、戦争が起きた国々の人々が難民となつて豊かな他国に押し寄せたのと全く同じ心理なのだと思つた。

彼らが見過ごしてくれない以上、私が取つた方法は彼らからの逃亡だった。

いつの日にか、人々があちこちに逃げ出して行つたように。

私は表面上彼らの申し出に、構わないと言い、自国に戻つていった彼らを見送つた。

その後、私は私達が住んでいた一帯の土地を地盤ごとくり抜いて浮かび上がらせ、また更なる新天地へと、私達の方が海を越えて移動したのだ。

その現象に子供達は動揺したが、もつと驚いたのは再び飛空艇でやってきた所、大穴が空き、何も無い地を目にした彼らの方だっただろう。

逃げるという選択肢が本当に正しいのか、間違っているのか、それは分からなかった。

だが、幸運にも充実した表情で静かに亡くなるのを、涙を流して見届けられたゲンさんは「おめえがそれで良いと思つたんならやってみろ。やらずに後悔するよかやって後悔した方がまだマシだ。そ

んでまた一つ学べば良いじゃねえか」と私にそう教えてくれたから、私はやって後悔する方を選んだ。

私がした事は間違いだったのか、私は悩んだ。

私が保護し、育て、再び人間社会に送り出した成長した子供達の様子は定期的に確認したが、上手く社会に馴染める者達がいた一方で、上手く社会に馴染めなかった者達がいたのだ。

上手く社会に馴染めた者達は、ゲンさんから私が教わり、私が彼らに教えた事を社会に揉まれる事によって徐々に忘れて行ってしまうようだった。

逆に上手く馴染めなかった者達がいたのは、私が刷り込んでしまった形になった価値観と社会との差に適応ができなかったようだった。

特にその影響が顕著に出たのは、高度な文明が進んだ社会においてだった。

それ以来、私は子供達を自国に戻すよりも、ゲンさんの村のような所に送り出すようにした。

私は自分がしている事が間違っているとは認めきれない割に、子供達が苦しむのを見て、何が何だか分からなくなってしまう、いつしか私自身による子供達の保護は打ち切り、保護した場合、各国の孤児院に任せてしまった。

保護していた子供達を全員送り出した後、またもやどうしたら良いのか見失ってしまった私には亡くなったゲンさんは記憶と心の中にしか居ず、目の前で相談する事ができず、寂しくて、辛くて、泣いた。

私はゲンさんの教えが間違っているとは絶対に思わなかった。

あの生き活きと生きていた姿と高度な文明社会の中で暮らす人々の姿とは何かを比べるまでも無かった。

私は再び考えた。

人が成長すると、本音を曖昧にするようになり、純粋さを失っていくように見えるのは本当にやむを得ないのか。

しかし、ゲンさんとあの村を見れば、やむを得ない訳がないのは明白だった。

人が純粋さを失うのは、機械のせいなのか社会のせいなのか。

私はまた社会に紛れ込み、その原因を探る事に決め、各国の国々を転々とし始めた。

存在意義とは関係なく、自分の意思で。

変装によって姿を偽っては技術者として働き、時には農業をして働き、時には企業で働き、時には教師として働き、時には社会学者の元で生の意見を聞き意見を言い、時には政治活動をと様々な事に取り組んだ。

経験して分かったのは、私が価値を感じる事は、高度な社会においては建前として形骸化し、個人が何を言おうと現実との間にはどうしても乖離が開いてしまうという事だった。

農業において、便利な耕作機械を一度導入し、そのあまりに高い効率性を目にとると、その後人々は手作業というわざわざ効率性の低い方法を続けようとはまず思わない。

そしてその瞬間から、天候不順によって作物が不作になると慌てるにも関わらず、人々は無意識に食べて生きていける事を当然のように認識するようになる。

もちろん、それが豊かになったという事の証明だ。

だが、その瞬間、人々は大地の恵みの尊さをどうしても、不可避免地に忘れてしまい、意識しなくなる。

貨幣経済が浸透、安定し、高度化した社会において、多くの人は無意識に職業を報酬額と結びつけて価値判断をしやすい傾向がある。ただ、報酬額が異常に高く、人々が一般的に認識するその職業と釣り合っていないと多くの人が認めるような例外も存在するが。

本来国々を丸ごと吹き飛ばしてしまった私が言えた事ではないが、

私にしてみれば、何度も崩壊してしまう社会における貨幣には大した価値を感じられず、その貨幣価値を裏付ける珍しい金属などこの無限に広がる世界において適当に掘れば幾らでも持つて来られる物でしかない。

一方で、貨幣経済が浸透、安定しておらず高度化していない社会においても、職業を報酬額でないとすれば、地位や権力によって差別する傾向が強い。

自然に発展する社会において、人々は金、地位、権力に個人の意思とは関係なく自然に揉まれてしまうように見えた。

「あなたはどんな職業につきたいのか」

社会において、こう問われると人々は答えに対し、やはり連動している以上報酬額を完全に、完璧に切り離す事ができないように思う。

また、高度な技術により生活が豊かになった社会においては、個人は消費者としては充実していくが、労働者としては不安定になっていくという現象が起きる。

収入や雇用には格差が生まれ始め、その収入と雇用を維持する為に、人々は終わりなくどこまでも努力し続けなければならない。

こうした社会の中で人々は表立って殺し合いなどはしないが、常に自然に、自然競争に晒され続けているのだ。

もちろん当然だ。

それが自然な姿だから。

努力した者が基本的に勝ち、努力しなかった者は基本的に負け、努力した者でも例外的に負け、努力しなかった者でも例外的に勝つ。

自然だからこそ基本が存在し、例外も存在する。

自然淘汰という考え方からすればそれで正しいのだろう。

動物であれば強い者が生き残り、弱い者は死ぬ。

だが、高度かつ複雑な社会を構築する事ができる人間の間では、人殺しは犯罪で、弱者だからといって完全に切り捨てるといった事はまず行われない。

その点は本来的にあるべき自然の姿とは異なり、不自然だ。  
まるで私のように。

何の努力もしていないが、私は生まれた時からこれ程の異端な能力を持っている、余りにも不自然で、人工的な存在。

そして紛れもなく私は人によって作られた存在だ。

競争の行われる社会一つを国と見れば、更に国と国同士も競争をする。

そして国同士になると最悪の場合、人が死ぬにも関わらず、悲しいことに戦争が起きてしまう。

一人一人の人間、個人個人の意思とは関係なく。

そして私が経験したこれらの社会には、私がゲンさんの村で経験した人の心の幸せ、嬉しさ、喜びが明らかに少ないように思えた。

どうにも人間は「自然」を相手に生きるより、人間同士で「自然に」争い合ってしまう生き物なのではないだろうか。

この人と人との争いを解消するとすれば、その方法は「自然」と「不自然」が入り交じった社会ではなく、完全に「不自然」な社会を作るしかないのではないだろうか。

そして同時に、それは「不自然」な存在である私にならできるのではないかと思えた。

思えてしまった。

それが酷く傲慢な考えだというのに。

……それからが私の、本当の、失敗の、連続の、始まりだった。

失敗した。

失敗して、失敗した。

失敗して、失敗して、失敗した。

失敗して、失敗して、失敗して、失敗した。

人は狂った。



人は狂って、狂った。

人は狂って、狂って、狂った。

人は狂って、狂って、狂って、狂った。

私の時間を度外視した壮大な社会実験と壮大な人体実験の数々は人々の自然状態に影響を及ぼした。

人間は脆い。

肉体を喪失すれば死んでしまう。

それまで私のような異端な存在がこれ以上生み出される事がないよう、私と同胞達が造り出された失われた文明の生命に関する復元させて来なかった技術を敢えて放出すると彼らは狂った。

基本的に文明が進み、科学技術が普及している国々で絶海の、他からの干渉を受けない唯一国は存在しない。

まず発展の過程で国が増えてしまうからだ。

それでも私がある国で老化抑制ナノマシンを世に発表すると、社会は議論を醸し、肯定的意見と否定的意見が出た。

まず他の国々にも、老化を抑制するナノマシン技術が開発されたという情報は瞬く間に伝わり、その国々も技術を欲した。

だが、彼らの社会構造からして、老化抑制という技術は劇物だった。

数十年働いた後老後の期間が存在するのが当然であった所、寿命が飛躍的に長くなるとすると、彼らが一生に必要なとする金が増える。漠然と老後を考えていた人達にしてみれば、現状ではまだ生きている筈にも関わらず彼らは、寿命が延びるという一見善い事の一方で未来の事を考えると急に困り出し、慌てる。

生きて行くのに金が必要なために、働くのを辞め、リタイアする訳にはいなくなるのだ。

当然、高度な機械化の進んだ社会においては、例に漏れず必要分の労働力しか基本的に必要とされない為、元々リタイアする筈だった人達は今の職にしがみつき、企業は若者達を雇いにくくなるが、老化抑制によって辞める者達の仕事に老化による支障が出る事もそ

れ程無くなるので、そのままなるようになってしまう。

若者達にしてみればまたしても職がなくなり、収入を得る事ができなくなる割に、長寿を生きる事になり、彼らは止むを得ずまた別の新天地を目指さなければなくなり、人口バランスがズタズタになる。

結果として社会が否応なしに歪み、狂い出していくのだ。

老化抑制自体ならまだしも、高度な技術社会において、その技術革新の速度はより急激に、急激になる為、あっという間に次の段階にシフトする。

不老化ナノマシンの実現。

だが、この段階に到達した瞬間、人々の希望と恐怖の入り混じった感情は自然にうねりとなって現れる。

資源問題からして、一つの土地に永遠に住み続けるというのは不可能な事で、そうであるが故に失われた文明の地は古い国と新しい国が争ったのだ。

資源を食いつぶしながら、物理的に致命的損傷を受けない限り死ななくなった人間達は生活水準を維持する為にはいずれまた国を捨て、旅立たなければならぬ。

しかし、未開の地の開発は常に危険が伴い、物理的に死ぬ可能性がある。

不老化した人々は誰も好き好んで未開の地の開発に進んで行くことはしなくなるのだ。

誰が行くのかと揉める一方で、ならばと彼らは作業用ロボットの開発を始め、無人の飛空艇での開発を行おうとするようになるが、当然のように同じように新天地を開発しようとする者達と競合する事になり、争いに発展する。

この段階で争いになるパターンはまだ良い方で、不老が実現した瞬間「それは生命の禁忌」だとしてその時点で内戦や他国との戦争になる事もあった。

私も何度も命を狙われた。

いずれにせよ、彼らは長生きしたい筈にも関わらず滅ぶという矛盾した結果に至ってしまう。

戦争が起きた時は私は昔決めた通り、介入して一時的に止めさせた事もあったが、一度そうなってしまうと人のうねりというものは止められず、人の漠然とした信用によって成り立つ社会秩序は乱れに乱れ、程なくして私も止めるのを諦めてしまい、再び文明は滅びてしまった。

また時には、不老化の技術は一部にのみ秘匿するよう国の上層部が抑えつけ、一部の人間達だけが恩恵を受けるようになったり、それがバレれば内戦になったりと、碌な事が起きなかった。

更に、脳神経情報転写技術という勉強しなくとも脳に直接情報を注入する事ができる技術の放出も問題ばかりが起きた。

学校の大部分の存在意義が崩壊し、教師達はこの技術を「外道な技術」として非難するものの、結果として高度な知識を持った子供はもちろん人々が大量に生まれる社会になった。

しかし、まず子供に関して言えばまともな情緒を育む事はできなかったし、知識的に全く同じ人々であるにも関わらず、それぞれの職業につける限界人数が存在する以上、やはり争いになってしまった。

人間社会はどうあっても自然に高度化していく以上、高度化した先は大抵崩壊してしまうその前に既存の社会形態を大きく転換させる極端に自然とは相反する不自然な技術を私は敢えて投下し、崩壊とは違うその先にある変化が起きないかと期待したが、かくして失敗に終わったのだった。

そして、その後散発的問題として自然に起きた事に、不老を獲得した人類で死を免れた人々が再び新たに社会を築き上げようという時、不老ではない人々に対し支配者として君臨しようとするという事などがあった。

しかし、不死身ではないので、大抵従えようとした人々に殺されて彼らは死に、飢えや病気や自然災害によっても自然に彼らの生き

残りはその数を減らしていった。

だが、老化抑制ナノマシンによる寿命延長の効果はその後の人類には知らずして脈々と受け継がれていく事になった。

老化抑制ナノマシンは人が満19歳になる事が起動トリガーの条件であり、満19歳になると自動的に稼動し始める。

そして、老化抑制ナノマシンは、起動タイミングを任意に設定した上で投与しなければならない不老化ナノマシンと異なり、人々が子を成せば自動的に胎内で子にも受け継がれる性質を持っていたのだ。

再びの文明衰退を経験した後の人類はこうして長寿化し、病氣などを経験する事による要素を排除すれば理論的平均寿命が130年になったのだった。

当然私に手の届く地域全ての人類が長寿化した訳ではなかったのだ、その後の人類は純粹種とナノマシンを体内に有する非純粹種との間で遭遇すると争いが起きやすくなり、純粹種の人々の中には長寿と若さを求め非純粹種の人々を無理矢理捕まえて無駄に血液を抜き取って殺してしまうなどという事象が後を絶たなかった。

私は後悔はしたし、私が育てた者達が子を残したであろう社会で戦争を間接的に起こした事に悲しくて泣いたが、実際に人間の寿命が延びるという明らかな変化が起き、再び文明が新たに始まり直す事を思うと、これからが本当に変化が起きるのではないかとまた淡い期待を抱いてしまった。

私は再び発展途上の社会に紛れ込み、それまでに積んだ経験から、指導者として人々を纏めるというとうとう具体的に人類を導くという存在意義とも被る行動に出た。

私は極力文明の発展がゆっくり進むように努めたが、どうあっても便利さ、金への欲求を持つ人々にとっては私の指導方法には不満や反発を見せ、仕方なく正確な技術を小出しにすれば、まだ隠し持っているのではないかと追求され、疑いの目を向けられ、でなければ私の周りに寄ってくる者達は皆、私の指導者としての近くに

こととただ恩恵を受けようという魂胆がありありと分かり、私にはそれが辛くて悲しくて嫌だった。

死にかけ、泣いていた子供達を集めて育てた時の方が余程ある意味一つの社会として上手くいっていたと思い至った私は、寂しさもあつて、再び各地を巡り、孤児の境遇となっていた子供達を保護しては遥か遠くの辺境の地で育て始めた。

今度は子供達をどこかに送り出す事はしまいと心に決め、時と共に彼らは成長し、大人になっていった。

それぞれが必要とされる仕事をして働き、工夫をし、大人になった子供達同士が子を成し、徐々に人口が増えていった。

村が出き、街が出き、徐々に社会としての大きさが広がっていった。

そして自然に彼らは便利な機械を考えつき、私は無用な反発を招く事を回避する為に好きにさせた事で、ゆっくりではあったが徐々に技術は進歩していった。

私が空を飛べるという事は皆に明らかにしていたが、不老である事を知られ、迫害される事を恐れた私は老化する偽装をしていた為、150年が経過する時には彼らから去らざるを得なかった。

その後も似たような事を各地で150年ずつ繰り返し、心の寂しさを埋めた。

しかし時には遥か遠くの辺境の地であつたにも関わらず、文明の進んだ所から新たな人々がやってきてしまう事があり、彼らは私が飛べるのだと知るとあり得ないものを見たように迫害し始めた為、私の勝手に地盤ごと逃げ出す訳にもいかず、そこでは数十年という期間にして泣いて逃げ出さざるを得ない時があつた。

しかし、逃げ出した後にこっそり確認しに戻ってみると、私は後悔した。

私は完全に間違っていたと思い知って、酷く後悔してもし足りず、勝手に涙が溢れた。

私が共に過ごした皆は、私を追い出した新天地から現れた者と争

った後だったのだ。

だが、飛空艇に強力な武器を搭載していた彼らに適うはずも無く、街の建物はあちこちが壊れ、男達は多くが殺され、一部生き残った者達は重い錘を付けられ、女達と子供達は虐げられていた。

私は本気で怒った。

これ程までの怒りを感じたのは初めてだった。

私は姿を偽るのを止め、白銀の髪と青い目の姿で彼らの前に降り立った。

「……よくも」

「おい、貴様何者だ！」

「コイツ空飛んで現れたぞ！」

紛れも無く私にとって敵でしかない者共が何か喚いていた。

「構わん！ 殺せ！」

言って男が銃を発砲すると、銃弾は男の胸に跳ね返って直撃し、死んだ。

「なっ！」

「……絶対に許さない。絶対にッ……」

私は人類史上最凶の生物兵器としての姿を本当に本当に久々に解放した。

撃ってきた者達は全員自分の放った弾丸で死に、私に恐怖した奴らは飛空艇に逃げ込み、その瞬間飛空艇を無動作で跡形もなく潰し、消した。

逃げ送れた奴らは蒼白な顔で街の者達に銃を向けて何かを喚いたが、再び無動作で地面に叩きつけ、そのまま全員死んだ。

本当に脆い奴らだった。

街の者達は僅かの間に奴らが全員死んだ事に呆然としていた。

私は奴らを殺し終わった後、自分の行動の愚かさを呪って、悲しさと後悔で泣いた。

「……レムリア……先生なの？」

一人の女の子が恐る恐る近づいて来て尋ねた。

「済まない、済まないっ……済まなかったッ……」

「やっぱり先生っ！ 先生どうして、何も言わずに行っちゃったの？ みんな先生と一緒にいたかったんだよっ！」

そう言っ、泣いて私に声を掛けるその子の言葉に私は何度も「済まない」と謝り続けた。

その後、またいずれ飛空艇がやってくる以上、私は結局また地盤ごと更に遙か遠くの地へと移動した。

そのまま私は去ろうとしたが、彼らはあるうことが私を引き止めた。

彼らは私に恐怖を全く抱いていないという訳ではなかったが、それでも引き止めてくれたのだ。

私は嬉しかったと同時に、本当に申し訳なかった。

減ってしまった人口に私はその地に時間を掛けて各地から少しずつ孤児を保護して育てて行った。

そしてある時、それまで何度も言われていたが、再び子供から「僕も飛べたらいいのに」と言われた。

その瞬間、彼らが虐げられている光景と共に、モスボールした浮遊島の研究所とクアントリアについて研究した事を思い出した。

そして確かに、人間用に共生させる通常のクアントリア自体は完成の域に達していて、後は投与するだけだったのだ。

皆にもクアンが使えれば、私との差異が減るのではないかと思えた。

それが私のまた愚かな行為にして、後に完全に開き直って傲慢とエゴをどこまでも突き通す事になる切欠だった。

私は皆にクアントリアを投与し、共生させた。

結果として、彼らは病気にかかる事は無くなり、クアンを使う事ができるようになった。

力の制御はクアントリアが全て無意識のうちに教えてくれるので、暴走する事は無い。

それでも空を飛べるようになり、物を動かせるようになった皆の中には少しはしゃぎすぎる者達もいたが、クアントリアは人の感覚を鋭敏にし、宿主に対し害となる物理的事象が向けられると自己防衛する為、不慮の事故はまず起こらないので大して問題は無く、平和だった。

何度か地盤ごと引越しを行いながら、時と共に再び徐々に人口が増え、技術が進歩していくと、皆の中にもまだ見ぬ所へと行ってみたいと思う者が現れ始めた。

やはり人間の性質なのだと、抑圧しても反発を引き起こすだけだと思い、私は禁止しなかった。

この時、もし他国と出会った場合どうなるか、薄々恐ろしい未来が見えていたが、私は幸せに生活できている事にばかり目を向けて、敢えてその事を考えずにいたが、その未来が訪れるのはそう遠く無かった。

速度は遅いながら飛空艇もできると、本格的に外へと皆は飛び出し始め、特にその進出は外気圏の浮遊島において目覚ましかった。

本来通常の人間は無重力の外気圏では高推進力を持つ飛空艇無しにはまともに移動できず、浮遊島も居住適正にはそれ程優れていない環境だったが、クアンを行使できる皆には浮遊島での生活は何の障害も無かったのだ。

繁栄は見事で、皆が各地に広がり始めると、いつの日にか地盤ごと引越す訳にもいなくなり、とうとう通常の人類と出会ってしまった。

そして、皆は狂ってしまった。

通常の人間は皆を「化物」と呼び、皆は通常の人間を「力も持たない下等な原始人類」と称し、瞬く間に争いに発展した。

発端は皆を「化物」と呼んだ人間達が、捕まえてその力を探ろうとした事が全ての始まりだった。



そして共生しているのが通常種のクアントリアと云えど、皆の本気の戦闘能力の高さというと、脆弱な通常の人間の比では無かった。相手が武器を手に持てば、それを力で吹き飛ばして武装解除し、皆は何も持たずして遠くから相手の首を捻れば簡単に死んでしまう。私は普通の人間を滅ぼしたい訳など無く、ただ皆と過ごせればそれで良かった。

恐れ慄いて逃げ帰った人間が自国に戻った時点で、どうなるか想像はついていた。

彼らは私達が彼らを滅ぼそうとするのではないかと恐怖し、先手を打って攻撃をしかけて来た。

私は皆に戦争をさせる訳には行かず、最前線に出て、攻めてきた飛空艇団は全て彼らの国へと強制的に追い払った。

彼らの国についた途端、私は集中砲火を受けたが、反撃はせずに皆の元へ帰った。

皆は私が彼らに攻撃しない事に意義を唱えたが、私はそこだけは頑として認めなかった。

それからというもの、昼夜問わない私の防衛と無反撃の日々が続いた。

私が反撃しない一方で、彼らの攻撃は時間と共にエスカレートして行った。

延々と私が防ぎ続けるのを見て、皆は私が休みも取らず防衛だけを続けてその場に縛り付けてしまっているのに憤った。

そしてある時、私が反撃しないなら、と若者達が独断で飛び出してしまった。

クアン反応で皆一人一人の位置が感知できる私にしてみれば、いい迷惑だった。

若者達の進行ルートは私に見つからないようにしたつもりなのか酷く迂回していて、私は最大速度で彼らを連れ帰り、再び防衛に戻った。

一体いつまで続くのか、次第に私の心は無感情な物になっていっ

た。

人間というのは共通の敵を作ると互いに争っていた筈が一転、団結することができる。

恐らくその対象が私だったのだろう。

彼ら普通の人間の国々に見れば、それこそ使えば国ごと終わるような大量破壊兵器の保有をするにも維持費が掛かり、分解するにも金が掛かるという状況下、都合よく幾らそれらを撃つても問題のない都合の良い的でしかなかったのだ。

ようやく止まった時には、私は精神的にすり減っていた。

しかし、彼らがいつの日にか来ない訳がなく、私はまた地盤ごと移動する事に決め、順番に遠くへ、遠くへと移動していった。

ただ、中には移動を拒否し、残りたいと主張する者達もいたため、止む無くその者達は私は置いていくしかなかった。

かくしてクアンを使える新人類の間においても、幾つもの国ができて行った。

距離的遠隔性というのは、須らく人々のコミュニティを明確に分ける。

こうなってしまうと、後は人類同士の争いが新人類同士の争いに発展するだけの事で、私がその争いに介入すると、皆はとうとう私を邪魔に思い始め、完全に私の手から皆が溢れてしまった瞬間だった。

その割にどこの国も「レムリア様、是非我々の国にお越しく下さい」などと言う始末で、辺境の国では結局私が昔防ぎ続けた普通の人類との戦争が始まり、国が吹き飛んだ。

私は一切自業自得だなどと言う気は起きず、これが人間の定めなのだとしたら何と悲しい事なのかと、ただただそれだけが悲しくて堪らなく、泣いた。

人類を導くなど、土台無理な話なのだ。

だからこそ私が思い出したのは、

「『おめえが何したいか』……そんだけだろうに」

というゲンさんの言葉だった。

結局私がそれで始めたのは、やはり泣いている子供達を保護する事で、何も変わっていなかった。

そして子供を保護していく中で、助けが間に合わず、願いを私に託して腕の中で逝った子がいた。

「レム……リアさま？」

子供は青白い顔で、私の名を呼んだ。

「……何だ？」

「あのねっ……わたし今度生まれてくる時はね……」

「うん？」

「みんなが笑って暮らせる……世界がいいなあ……」

そう言って、その子は息を引き取った。

「ああ、そうだな……。つく……。うつ……。……」

私はまた、泣いた。

そして、遂に決心した。

子供が言った通り、世界は無理でも、せめて皆が笑って暮らせる国を作ろうと。

私の感情で、私の意思で、私の傲慢で、私のエゴで。

そこからレムリア真国建国の始まりだった。

国造りに当たって守るべき条件を考えた。

他国との接触を防ぐために、遙か遠くの絶海の大陸を唯一の国土とする。

人々が常に「自然」と向き合っている事。

故に農業において、例外を除き大規模な機械化は絶対に認めず、手作業で生への実感を人々に想起し続けさせる。

人々がより高い報酬を求めて自然に競争する心理を逆手に取り、「自然」に向き合う農林水産業から離れないよう農林水産業に最も高い価値がある事を常識とし、高い報酬を与える事によってそれを裏付ける。

気象という自然現象は私の力で完璧にねじ伏せる。

しかしながら、抑圧にならないように意志さえあれば、報酬は少なくする代わりに、国の発展と共に商人やそれ以外の職業に就くことを選択できるようにする。

商人が金を民から吸い上げるのではなく、民の方が常に余裕を持つて商人に金を供給する経済形態を取る。

原則的に民にとって必要以上に金の価値を持たせないようにする為、金は労働と共に常に蓄積し続けるようにし、当人が死亡した場合、物理的財産を除けば残った金は一切相続させずに消滅させ一代限りのものとする。

人と人との繋がりを重視し、職業の別無く人の居住区はできるだけ連続性と一定の完結性を持つようにし、無作為に孤立点在させ社会の中に更に小規模な社会を不必要に増やさない計画的街造りを徹底する。

人の未知への興味を抑圧する事は不満を引き起こす為に、いずれ飛空艇が生まれた時には国土の外へ飛び出す事は認めるしかない。

但し、他国の人間と接触しないよう、飛空艇の性能は速度面と航続距離面から上手く抑えて行き、当然、建国の地の位置が最も重要である事は言うまでもない。

権力が徹底的に腐敗する以上、絶対的に私がそれを阻止し、同じく権力を持つ者達には努力と報酬の切り離しを行い、農林水産業よりも圧倒的に低い報酬を設定し、権力が強まるにつれてそれを反比例させる事を徹底する。

それを実現させる為に私自身が見返りを求めぬ国の絶対的存在となる事によりあらゆる不平と不満を跳ね除ける。

そして国の運営に携わる者が少なくても民の状況を把握できるようなシステムを構築する。

私が国の絶対的存在として力を存分行使できるようにする為に、民は全て新人類に限定する。

必然的にクアントリアを体内に共生させるが故に病気はまず無くなり、老化によって身体が動かなくなつたとしてもクアンで移動す

る事ができ、ナノマシンの効果と合わせて介護を必要とせず、不慮の事故での死亡確率を減らす。

更に、民の総体そのものが家族として機能するよう、人と人との繋がりを増やす為に、常に四、五世代が存在するように民が子を成すように促し、人口の増加にも注意を払って調整をする。

平均寿命が130年である以上、一生の内、複数の職業を経験したい者達の為に、転職がいつでも可能なように、常に別の職業になる為の教育を受けられる機会を儲け、専門教育では子供大人問わず入り交じって勉強ができる環境を整える。

自己の中にある幸せを、他者の中にある幸せを、互いが共有し、その輪が広がっていくようにする。

その為には言葉に感情を素直に乗せ、不和や誤解を招きにくくなるよう民に国の思想と理念と価値観を幼年時に徹底的に洗脳教育し刷り込み、皆が笑って暮らせる社会にする。

私は何としても民の心の幸福を、笑顔を守る。

……それが引いては私の心の寂しさを埋められる唯一の方法だから。

私は今度こそ、今度こそ失敗しないようにと、動いた。

まず、研究所を秘匿していた浮遊島の施設を、高速移動の際風よけとなる外周を山に完全に囲まれた盆地のあるより大きな浮遊島へと完全に移し替え、他に必要な物を予めできる限り揃え、そこで移動しながら民が充分に生活を送る事のできる環境を整えた。

始まりの民は各地を巡り、技術の進歩が進んでも自然を愛し、私の意見に賛同してくれる者達を集めた。

そして、果てしなく遠く、遠くの地に移動しようと、浮遊島に移り住んだ私達は、私の力によって昼夜問わず浮遊島ごと超高速で移動し続け、文明の滅びの速度を計算に入れ経験則上向こう千年以上は外部の人類が到達し得ない理想の地を目指した。

移動の間に、始まりの民達とは常に互いが笑顔でいられるように会話を絶やさなかった。

遙か年単位で飛び続け、ようやく見つけた。

巨大すぎず小さすぎず、気象条件、気候、地形、資源、景観それらを勘案し、周囲にあった不必要な陸地を幾つも消し飛ばして人工的に環境を整えたのが、今のレムリア真国の大陸だった。

そして陸地に降り立った私達は、畑を作った。

ここが緑豊かな、心豊かな、笑顔豊かな国となるよう願って。

……それもようやく千年を優に超えてまた終わりを迎えようとしているのか。

私はそれを見ると思わず悲しくなって、涙が出てしまった。

「済まぬな……気にするなユイスよ。さて、そろそろ眠いだろう。戻るとしようか」

「……はい、レムリア様」

腕の中で素直に頷くユイスの自然な笑顔とその温もりは本当に暖かく、心の芯にまで優しく染み入るようだった。

## 絶海のレムリア 原版・過去編（後書き）

原版をここまでお読み頂いた皆様、ありがとうございます。

意図的に造られたディストピアの国、そうでありながらも、確かにユートピアとも呼べなくもない国という、コンセプトそのものは変わらないのですが、良く考えなおすとこの原版は社会設定に不足があり、新しく書き直しを致しました。

## 探索士課程試験（前書き）

こちらがあらすじ通りの新しく書きなおしたものです。



## 探索士課程試験

絶海のレムリア。

海上の陸地を俯瞰すると雲を突き抜けて高く聳える塔を基点に緑豊かな自然の風景と人々の住む家々が見える。

その陸地の上空、大気の性質の変わる空域には一つの浮遊島が悠然と存在し、その周囲の空には飛空艇が飛び交う。

人々は完全に平等では決していないが、生きることには不自由する者は一人たりとして存在しない。

しかし極端なまでにある者のエゴが貫き通された国、レムリア真国。

それを理解した者は果たしてそれをユートピア呼ぶべきなのか、デイストピアと呼ぶべきなのか。

空は遠くまで晴れ渡り、そこかしこに小さな花の咲くならかな丘には心地よい風が吹く。

草原に座る女性が目の前の四人の子供に色鉛筆を渡し、続けて紙を出し並べて浮かせて見せると子供の一人が声を上げる。

「さんまいー？」

「はい、紙は三枚です」

女性がにこやかに答えると、子供が次々に声を上げる。

「えー！」

「たりないーい！」

「たりないよー？」

「その通りですね、一枚足りません」

続けて僅かに間を置いた女性は優しく尋ねる。

「……こんな時、どうしましょうか？」

四人は一瞬停止すると、ぽけーっと口を開けて考え始め、一人が閃いて手を上げる。

「もういちまい持つてくる！」

子供の言葉をゆっくり繰り返して女性が答える。

「足りない分を持つてくる、良い考えです。ですが、今、紙がこの三枚しかないとしたら……どうしますか？」

その質問に子供達は答えに詰まって静まり、少しして一人が控えめに言う。

「……ひとりお休みで、三人がかく」

「それで四人は良いですか？」

「お休みの人がかわいそう……」

その丘の近くを四十一人が荷物を背負い飛行していた。眼下の様子がふとミヤネの目に入る。

（あ、懐かしい）

心なしか自然に顔が少し綻び、そつと視線を戻した。

そのまま上をすぐに通り過ぎ、向かい風が両サイドの栗色の髪を揺らし飛び続けながら、一瞬緩んだ気持ちちが周囲を共に飛ぶ者達を見るとまた緊張していく。

（合格率は毎回異なるけど、この中で受かるのは多くても数人……）  
飛び続けること長身の女性試験官の先導に従い見えたのは山々に完全に囲まれた盆地に広がる樹林。

一行は盆地の中心、湖畔傍の草地に降り立った。

「皆、ここで少し待機しているように」

女性試験官はよく通る声で言うと、現地で待機していた制服姿の四人の元に近づいていった。

三時間に渡る飛行に受験生達の多くは疲れて息を切らし、一旦背中の荷物を下ろして適宜水分補給をするなど休息を取り始める。

ミヤネも水筒の水を口に軽く含み、周囲を軽く見渡す。

（レーゲ樹林、ここが試験場……）

視線を元に戻すとふと、到着直前まで女性試験官のすぐ後ろを飛んでいた二人の横姿が目に残る。

二人は荷物も降ろさず立ったままで、疲労した様子が見えない。

（あの二人……）

少し驚いて離れた所から見ていると試験官達が受験生達に近づき、女性試験官が口を開く。

「これより、探索士課程後期選抜試験、初回受験Bを始めます。改めて、私が主任試験官のエストです。これから四日、我々五名が受験生諸君の試験を担当します。それでは、受験生は各自試験官へ受験票の提出と引き替えに荷物を受け取って下さい」

受験生達は流れてそれぞれの試験官の元に集まり出す。試験官に受験票を提出した受験生は腕時計と地図を受け取って元の場所に戻って行く。

エストの前に並んだミヤネは両手に受験票を持って出す。

「ミヤネ・コリントです。よろしくお願いします」

「こちらこそ宜しく。ではこれを」

「はい」

他の受験生と同じく受験票と引き換えに腕時計と地図を受け取り元の位置に戻った。

（方角が書かれてない……。それにこのチップは……？）

地図を開いて見たミヤネは試験官の方に顔を上げると、その五人は丁度時計と地図を全員に配り終えて荷物を背負っていた。

エストが一枚の小さな白いチップを掲げて説明をする。

「続いて試験上の課題を説明します。配布した地図上の青ラインで囲まれた領域、つまりこのレーゲ樹林周辺にこのような印の入ったチップがあります。見本は地図にも記載しているので適宜参照して下さい。これらを探して回収し、三日後の午後三時にこの場所に集合して下さい。注意事項は配布した時計を紛失しないようにすること及び地図上の赤ラインより内側で行動するようにすること以外は共通試験要項通りです。それでは、各自行動を開始して下さい」

それだけか、という程簡潔な説明が終わるとほぼ同時に試験官達は飛び上がり、五方向に勢い良く散開していった。

殆どが呆気にとられる中、ミヤネが先程目を留めた二人が最初に

浮き上がり、それぞれ正反対の方角に別れて飛んでいった。

それを見て、疲れてはいても動ける受験生達者達は遅れを取るまいと荷物を背負い、浮き上がって適当な方向へと散っていく。

（私も、行こう）

地図をもう一度じっくり見ていたミヤネも荷物を背負い、ふわりと真っ直ぐ上昇する。

近くの木々よりも少し高い位置で止まり周囲を見渡すと、既に小さくなった人影が幾つも見える。どの方向へ行こうかと少し逡巡すると、とりあえずこつちと決めた方向へと移動を開始した。

（搜索範囲を端から端までただ飛ぶだけなら全速力で十分強……だけど……）

レーゲ樹林の規模は縦約11km、横約9km。

単純に飛ぶだけならともかく、課題はその広さの樹林の中から親指と人指し指の間で軽く摘めるぐらいの小さなチップを探しだすこと。

どれだけの数があるか知らされなかったが、探すためには地道に目を凝らして時間を掛けるしか無い。

「ちよつと気が遠くなりそう……」

思わず独り言が口から出ながら適当な樹上で止まると少し旋回し、山々に囲まれていても遠くに聳え建って見える塔が視界に入る。

地図を出しピンと紙を張って浮かせ、スタート地点の湖を目印に地図の向きも回転させピタリと固定させる。

（真央柱があつちだから北は、と……）

懷からペンを取り出し、地図にまず方角を書き加えて行き、「うん」

現在位置も大体の検討をつけて印を入れた。

ペンと地図を一旦しまい、垂直に降下するとゆっくり地面を両足で踏みしめる。

さっきまで上から俯瞰して眼下に見えていた緑色の海のような風景から一転、周囲は鬱蒼と生い茂る木々で薄暗い。

「よし……探そう」

深呼吸すると自分に言い聞かせるようにそう呟いて、探索を開始した。

「見つからない……」

木々のざわめきに小さな呟きが混じって掻き消えた。

（というかこれ、見つかるのかな……）

焦りと悩みが入り混じり、困った様子で額に左手を当てた。

午後三時にリーグ樹林に到着してから早数時間が過ぎていた。

空が赤く染まった後、間もなく夜が訪れ星明りのみがほんのりと地上を淡く照らす。

雲一つ無く、木々の隙間からその光が差し込むお陰で最低限の視界は確保できていた。

とはいえ物の識別には、しっかりとした光源で照らすことが必要であり、

「持って来てなかったら終わってた……」

棒状の携帯ライトを左手に、屈んだ姿勢で地面を探りながら安堵の声を漏らした。

落ち葉や石を浮かせ、照らして確認しては、と地道な作業。

「見つからない……」

しかし昼間との作業効率は比べるまでもなく、立ち上がって空を見上げながら呟くのだった。

そこに追い打ちをかけるように、小動物の鳴き声のような音が自分から聞こえる。

「ん。………はあ。仕方ない」

とりあえず探索は中断し、気分を切り替えようと徐に木々の上へ。ざわざわと木々の音が響き、星明りが直に降り注ぐ。

「……きれい」

夜の樹林上の景色に吸い込まれるような気がして、高地で冷えて澄んだ空気が肺に染みる。

空に浮きながら食べる固形食料の味はお世辞にも良くは無い筈だけれど、不思議と美味しい。

ぼーっと遠くを見ながら食べていると、ふと携帯ライトと思しき光が突然見え、妙な点滅を繰り返しているのが分かった。

「なに……？」

不思議に思い何となく周囲を確認してみると丁度似たような光の明滅が見えた。

少しするとその点滅は消え、最初に見えた方の光が点灯したままになり、ゆらゆらと左右に揺れ始める。

（……通信？ でも試験官だったら通信機を持っている筈だし……だとすると受験生同士が？）

そこまで考えて、不意に二人の受験生の姿が脳裏に蘇り、その瞬間、胸にざわつくような感覚が走った。

左右に揺れる光が呼んでいるのは自分では無いと心の底で分かっていた。

それでも自然と身体は動き出し、気がつけば準備を整えて光が揺れる方向に向けて飛んでいた。

しかし、もう少しという所で目指していた光が唐突に消える。

「あ……」

思わず声が出た。

（私、何やってるんだろ……）

ミヤネの頭は急速に冷静さを取り戻し胸には虚しさがこみ上げた。戻ろうにも既にさっきまでの場所はどこか分からず、戻れない。一方で左右に揺れていた光の幻が目には焼き付いて離れず、

（とりあえず……）

行ってみるだけ行くことにした。

真新しい記憶に残る光の位置を元にもう少しだった距離を大体の勘で詰め、木々の下に降りて辺りを見回すと離れた所が木の陰でぼ

んやり光っているよう。

「で、探索士課程の試験と考えた時……」

そつと近づくとつれ何やら話し声が聞こえてきてくる。

（何話してるんだろ……）

耳に注意を傾けると、

「ところで、もし良ければあなたの意見も参考にさせて貰えませんか？」

僅かな間にミヤネの真横に距離を詰めた人物が声を掛けた。

反射的に驚いて振り向いたが声が出ない。

暗がりで見えない人物の容姿も良く見えない。

どう言葉を返していいかわからず固まるが、その人物は背中を向け、

「僕は戻ります。ご自由にどうぞ」

そう言つて元の場所に歩いて戻り出した。

「え……」

拍子抜けた声が出て、

（ご自由について……）

いつの間にか伸ばしていた右手が脱力して降りる。

どうしようか迷い、何となく勢いで二人のいる所へと足を出した。

（ま……なるようになるかあ）

人間早々思うようには上手く行かないことはあるようで、意外にうまくいくこともあるというもの。

ミヤネが思った通り、なるようになっていた。

三人は囲むようにして座り、闇に溶け込むような濃い黒髪に深い黒い瞳が寡黙そうな印象を与えるクロアが片手で顎に触れて低め声で言う。

「チップの搜索は『試験上の課題』と試験官は言い、レーゲ樹林に

あるというチップの総数は不明。人数分あるのか、多くて数人の合格者しか出ないことから単純に数個しかないのか、それとも大量にあり回収した数を競うものなのか……」

うん、と小さく相槌をしてユイスが地図を両手に、そのぱっちりした目で二人を見て言う。

「まだ半日も搜索してないから決め付けるには早いけど、三人ともまだ見つけていないし、大量にある可能性は低いと僕は思う。仮に人数分以上あるとして、でも一人せいぜい例えば二、三個なんて中途半端な数も課題を出すものかと考えると高くは無さそうだね。ただ保険として人数分より少し多いぐらいはあるかもしれない」

「ああ。合格者分のみとしても運要素が強すぎる。試験官が五人いる事も含めると人数分はあると考えるのが現状可能性としては高い」  
「そうだね」

「ミヤネはどう考える？」

真顔のクロアに質問を振られ、黙って聞いていたミヤネは名前を呼ばれた事に若干驚きながら、サイドの髪に無意識に触れて冷静に口を開く。

「う、うん……考えてみればそうかもね。人数分ある可能性に賛成。その前提で考えるとチップの搜索には糸口が……ある、気がする」  
「それが分かれば、だね。既に得ているはつきりとした情報はこの地図に載っているチップの絵だけで……やっぱりこの小さな穴だろう」

ユイスは地図を見て言った。

白色の円形のチップの上部には小さな穴が空いている。

地図のチップの絵について同じ事を思っていたミヤネが言う。

「あれ、紐を通すためかもって木の枝も探したけど見つかってない」  
「穴が空いていること自体がフェイクという可能性も捨て切れない……が、手がかりが他に無い以上素直に考えるのが妥当、か」

「そう考えると、地面を闇雲に探すのは余り意味が無いってことになるんだよね。搜索範囲を絞れるから一歩進んだ気もするけど」



少し困った表情でユイスが言った。

「ああ……」

今日の搜索でかなりの時間地面を探していたミヤネは頬を引き攣らせ、ユイスが苦笑する。

「僕もさつきまで地面探してたし、あくまで今の仮定で考えた場合の話だよ」

「う、うん……」

「仮定の上で妥当だとしても、そもそも地面の中、湖の中、小川の中、どこも絶対に無いという保証も無い、どの場所に無いと判断するのは早計だ」

クロアの言葉で三人は沈黙し、クロアとユイスはそれぞれ考えを巡らせ始め、ミヤネはふと我に返る。

（あれ、結構馴染んでるかも……）

話し込み始める前に遡れば、座っていた二人に暗がりからミヤネはまず姿を見せた。

二人は携帯ライトを片手に無言で顔を上げて視線を移し、ミヤネはその空気と盗み聞きのようなことをしていたことに気まずさを覚え、思わず謝った。

「あ、あのさつきは何というかごめんなさい……」

「ああ、気にしなくて良いよ。こんばんは。僕はユイス・エサリア。よろしく」

ユイスは特に何の含みもない表情で手をひらひらさせて言い、

「俺はクロア・クローツ。よろしく頼む」

クロアも気にする様子も無く簡潔に名を述べた。

まさかごく普通に自己紹介するとは考えてなかったミヤネは固まり、数秒の間をおいてとにかく返答をした。

「私はミヤネ・コリント……です」

すると次に、座ったら？ と勧めるようにユイスが手で示し、それに無言で従いミヤネは静かに座った。

「今この探索士課程試験について思った事を話してた所なんだ。じ

や、さつきの続き」

何となく落ち着いたような所でユイスが切り出し、クロアの話に繋がる。

ライトの光はぼんやりと場を照らし、木々の音が辺りに穏やかに響く。

（向かい合っておいて何も話さないのって……）

会話は停止したまま、ゆっくり流れる沈黙にミヤネは少し落ち着かない気分になる。

そこへクロアの手が動き、そつと顎から手を離し、

「ユイス、ここに生息するモモについて詳しく教えてくれないか？」

「ん。動物につけている可能性が、分かった」

ユイスが納得した様子で一度瞬きし説明を始める。

「モモは齧歯目リス科モモ属に分類され、体長は5cm前後、尾まで含めると14から20cmの小動物。飛膜を広げて木から木へ滑空して移動することができる。主に樹洞を巣にし、夜行性。2ha程度の行動範囲を持ち、一生の殆どを樹上で生活、主に木の葉、芽、種子、樹皮などを食べる草食。その餌になる植生を考えるとこのレ―ゲ樹林だと端の山傾斜部に主に生息している傾向が高い。ついでに夜行性だから光に弱く、警戒心は強い」

言ってユイスはわざと携帯ライトを左右に振って、

「大体こんな所だけど、もし野生のモモにチップが付けられているのだとすればエスト試験官が見せたあの実物の小ささも納得できるね。体色も腹側は白で一致している」

地面に置いた。

「なるほど。説明ありがとう」

「うん」

そのやりとりにミヤネは驚きユイスを見る。

（偶然知ってたんじゃない……。もしかして）

ユイスはその視線に気づき、ああ、と口を開く。

「じつと見たもの、それと視界に入っただもの、一度で全て記憶する。

そういう体質なんだ」

「そうなんだ」

やっぱり、とミヤネは少し感嘆混じりに言った。

そこでユイスとクロアはほぼ同時に立ち上がり、

「……さて」

「行くか」

置いてあつた荷物に手を掛けた。

「え」

その流れにミヤネもつられるように立ち上がった。

荷物を背負い、出発できる体勢になったクロアがミヤネを一度真っ直ぐ見て言う。

「俺達はチップがモモに付けられていると当たりをつけて生息域に移動して搜索を続けるが、ミヤネはどうする？」

急な問いかけにミヤネは言葉に詰まった。

（どうする。私は……）

迷っているうちにクロアは地面から足を離し、ユイスも浮き上がり、ミヤネに向かって声を掛ける。

「例えば、僕らと一緒に来るか、そうでないか。それを決めるのは君だ」

そしてみるみるうちに二人は高度を上げて行く。

「……私も一緒に行きます！」

咄嗟に声を発し、荷物を片手で持って二人の後を追って飛び上がった。

夜空の下、三つの人影がレーゲ樹林の端へと移動していく。

先頭にクロアとユイスが並び、ミヤネは二人の後ろについて飛んでいた。

何か惹かれるものを感じたからなのか。

二人についていけば探索士課程選抜試験をクリアできるかもしれないと感じたからなのか。

正直な所何故二人についていこうと思ったのか、ミヤネはわからなかった。

レムリア真国の外には、果てしない海が広がり、果てなき空が広がる。

「そこに何があるのか」

人は国の穏やかな日常の外にあるであろう「未知」に興味を、希望を、憧れを、探求心を抱く。

全ての国民は国外へ出るかどうか、選択の自由を持つ。

但し、国を出る選択をする場合、再び国に絶対帰還してはならないという条件が課され、事実上の真国からの永久国外追放処置を容しなければならない。

それが真国における決まり。

そして、ただ一つ、国と国の外との間を行き来する事を許される職業を探索士と呼ぶ。

人口約120万のレムリア真国の労働人口の約1%を占める彼らは「未知」を求めて飛空艇に乗り、空と海を超えて真国の外へ飛び出していく。

ミヤネも国の外を、果てしない海の向こうを、果てなき空の向こうを、自身の目で見たいと願う一人だった。

探索士には、数多くの分野について学び、専門課程の進学試験を突破し、専門課程を修了してようやくなることができる。

15歳のミヤネ達はまさにその進学試験の最中だった。

（この二人も私と同じ……探索士になりたいんだ……）

考えごとをしていると盆地を囲む山の傾斜部の中腹に差し掛かり、前を飛ぶ二人が速度を落とし、それ合わせて停止した。

クロアが上着のポケットから太めの赤色の紐を取り出して言う。

「この辺りで良いか」

「そうだね」

頷くユイスとほぼ同時にクロアが紐の端を真下の木に垂らす。重力に従って木の上部に端が到達するとそのまま指向性を持って枝葉に巻きつき始める。

紐を持っていた方の手も離されると巻きついた紐の先端と流れるように結び目ができあがった。

上から俯瞰すると目印として木の上部にはつきりと赤色の紐が見える。

ユイスが星明りで時計を見ながら言う。

「んー。とりあえず0時までモモ探し、とはいえ他の動物もいれば念のために調べつつ、またここに集合しよう」

「分かった」

「ミヤネも良い？」

「あ、うん」

一瞬詰まって答えると、

「それじゃ」

ユイスは軽く、

「0時に」

クロアは簡潔に言って二人は木々の下に携帯ライトを灯さず降下して行った。

（探すのは分かってたけど……。0時までって……）

ミヤネは二人が迅速に行動に移ったのに驚く。

0時までおよそ四時間。

現実問題として夜暗い中、常時光源を使用してはモモを探しは捗らず、探さなければ始まらない。

（うっん、まだ日はあると言っても、時間は限られてる。良く見えないからなんて、諦めてられない）

そして二人の後に続き木々の下に垂直に降り、

（それに、モモにチップが付けられているのはあくまで可能性のレベル）

搜索を開始した。

樹上で生活するモモを探すべく木の枝が良く茂る高さに滞空し、視覚のみに頼らず耳にも集中を向けて木々の間を進む。

（他の動物にだって付けられている可能性もあるし、そうでもないかもしれない）

そこへ離れた所から、

（物音！）

耳にしてぶつからないよう急いだ。

（テン……？）

しかし、目にぼんやり入ったのは四足歩行動物と思しき影。

（でも、それならそれで！）

神経を研ぎ澄ませ、目を一瞬大きく見開く。

地を走っていたテンは急に宙に浮き上がり、身体の自由を奪われる。

そのままテンを手元まで近づけて、

（無い……か）

その黄色い毛皮の身体を回転させて確認した。

「驚かせてごめん」

小声で言い、ゆっくりテンを地面に降ろして解放した。

（たかが一匹目、次）

再び周囲の探索を始める。

単純に計算して40枚分のチップが40匹の動物に取り付けられている、ないしは植物など制限された範囲内にあるとしたら、一枚当たり約2.5km四方であり、木の本数に換算すれば100万単位で存在する。

ただでさえ目の効かない暗い中では、不意に気が遠くなりかけるとしても不思議ではない。

「はっ、はっ」

木の幹に背負った荷物ごと背中を預け息切れを起こす。

一時間、二時間と探索を続けたが長時間に渡り力を使用し続ける

のはこの日は、ほぼ限界に達していた。

（0時までまだ時間が……）

時計を見ていると疲れから眠気が襲い始め、ゆっくりと瞼を閉じた。

（少しだけ……）

朦朧な意識の中、話し声が聞こえてくる。

「夜が明けたら周囲一帯見てくるよ」

「分かった。こっちは測量を済ませて探索をする。後は」

台詞を引き継ぐようにユイスが言う。

「臨機応変につて事で」

それにな言で頷いてクロアは立ち上がり、ユイスが右手を振る。

「それじゃ頼むよ。荷物は任せて」

「ああ」

クロアは小さめの鞆を担いで垂直に飛び上がって行った。

「……さてと」

それを見送ったユイスは手早く荷物に手を掛け、寝支度を始める。ハンモックを取り出すと携帯ライトと共に浮かせる。

「ん……」

そこでミヤネの瞼が反応する。

特に気にせずユイスは手際よく紐の両端を二本の枝に結びつけて設置し終えた。

「……あれ、私寝て……？」

「そうだね。寝ていたよ」

「うわ！」

平然と声を掛けられてミヤネは驚いて完全に意識を取り戻した。

「えっ、あっ、ここは？」

ユイスはまた荷物に手を掛けて言う。

「集合場所。0時近くなつてここに戻つてくる途中クロアが偶然君の寝ている所に通りがかつてここまで運んできたんだ。そのまま放つて置くのもどうかつてね」

「……そ……そう」

「そうです。あ、荷物はすぐそこね」

携帯ライトを宙に浮かせて明りにしたまま、ユイスは水筒を右手に、左手でミヤネの荷物を示した。

「あ、うん」

ミヤネは生返事をして、ユイスは水筒の水を口に含み濯ぎ始めた。話しかけようにも掛け辛くなつてしまい、ミヤネはどうしたものかと、とりあえず荷物に手を掛けた。

が、特に何を出すというのでもなく少し困つた。

ユイスはミヤネに背を向けて跳ねないように地面寸前で一瞬浮かせて吐き出すと、振り向いて思い出したように口を開く。

「と、寝る前に報告をしておく、モモは合計六十二匹見つけたけど外れで、他」

「そんなに!？」

驚いてミヤネは声を上げた。

「うん? クロアと僕合わせてね」

「ふ、二人合わせてかあ……。ん。それでも私六匹だけ……」

「他の動物は?」

続け様な質問に、答えにくそうに答える。

「テンとかの動物を十ちよつと……チップは見つからなかった」

「そつか。僕らもモモに他の動物も探したけど見つからなかった。

いずれにせよ、見つかるまで探せば良い」

言いながら、ユイスは水筒をしまった。

恐る恐る尋ねる。

「あの、私のこと、怒らないの……?」

ん、と目を瞬かせてユイスがミヤネを見る。

「怒らないよ。クロアも怒らない。例えば、君が疲れて寝ていた、



とかそういうことはね」

気にしていたことをバツサリ言われて少し面食らった。

「う……ならどうして……？」

ユイスは地面に腰を下ろし、上の方に浮かせていた携帯ライトをスーッと地面近くに下ろし、

「どうしてか。うん、そう聞かれると……何て答えたらいいかな？」

あろうことが聞き返した。

「いいかな？ って私が聞いているんだけど！？」

思わず語気を強めて突っ込んだ。

「あ、今の間違えた。もう一回」

しまった、という表情をして勝手に言うが、ミヤネには訳が分からない。

「は？」

間を置いてユイスがもう一度、今度は顎に手を当てて、

「……どうしてか。うん、そう聞かれると……何て答えたらいいかな……」

考えこむ様子で言った。

ミヤネはどう反応したら良いか困り、黙った。

するとユイスは真顔になり、

「と、こっちだったよ」

ごめんね、とでもいいたげに眉を下げた。

「う、うん……」

とりあえずミヤネは頷いたが、

「ん。えっと……で？ どうして？」

よくよく考えて聞き直した。

真顔のままユイスは答える。

「怒りたくないから。怒らないのか？ と聞かれても、僕は怒りたくない。ただまあ、君が激怒して欲しい！ と心の底から願ってるならまた別かもしれないけど。納得した？」

「……うん」

ミヤネは妙な腑に落ちなさを感じながら頷いた。

（そこまで思つて無いし、そう言われると……）

何かこれ以上聞く気も起きなかった。

「それじゃ、僕は夜明けに備えて寝るけど、その前に他に聞きたいことある？」

「えっ、その、クロアは？」

ユイスは指を上に向け、

「クロアなら上。用があるならどうぞ。流石に辛いから、じゃ、お先にお休みなさい」

言いながらハンモックにぴったり収まり、携帯ライトを消し、一枚掛けて横になった。

「……お休みなさい」

さながら出発を見送るようにミヤネは呟いた。

（変わってる……）

ピタリと動かなくなったのを見て、そう思った。

次にどうしようかと思い、何となく上に行くことにした。

木の上に出るとそこにはクロアと携帯ライト、ペン、地図に小型測量器が幾つか浮き、黙々と作業している姿があった。

そつと横から声を掛ける。

「あの、運んでもらったみたいで、ごめんなさい」

クロアはミヤネを一瞥してゆっくり口を開く。

「……俺は運ぶと決めて、運んだ。気にしなくて良い」

その言い直しには言葉に困った。

続けてクロアが言う。

「それより、疲れているならまだ寝ていた方が良い」

「う、うん」

クロアはまたすぐに作業に戻りつつ、不意に尋ねる。

「ミヤネは明日、いや、今日はどうする？」

「それは……寝てた私が言っても微妙だけど、できれば一緒に探索を……」

尻すばみなはつきりしない答えに、クロアがはつきり言う。

「なら今日もよろしく頼む。今日は夜が明けて、ユイスが記憶して記録するポイントを探すことになる」

「良いの？　っていうか、どういうこと？」

クロアが淡々と説明し始める。

「ユイスは視界に入ったものは全て覚えられるが、それに速度は関係無く、意識しているかどうかも関係無い。ただ、視界に捉えたものを一つ一つ確認するには相応の時間を必要とする。まずユイスが一定範囲を飛んでモモを始めとする動物が巣にしていそうな樹洞などを視界に入れ、紙に樹洞などのあるポイントを確認しながら書きこんで貰う。後はそれをミヤネと俺で総当りで日中探す。今のところそう予定をしているが、良いか？」

予想していなかった話に少し戸惑いながらも頷いて答える。

「い、良いよ。分かった」

「ああ。頼む。……あとさっきの良いのかという質問だが、改めて言えば答えは良い、だ」

完全に流れたと思うていた質問に答えられてミヤネは少し恥ずかしくなった。

「ん。その……ありがとう。えと、私そろそろ寝るから」

「お休みなさい」

「お、お休みなさい」

同じ挨拶を返すと、ミヤネはゆっくり下に降りて行く。

地面に着地すると、荷物に手を掛け、

（聞きたいことはもつと色々あるけど……）

水筒の水で口を濯ぎながら、何だかもやました気分がした。

（あれ、そもそも何で聞きたいことがあるんだろ）

そう思っ水吐き出し、

（……なんか気になるから、なのかなあ……）

一人ハンモックで既に眠りに落ちている人の姿を見上げながら思った。

ミヤネにとって二人との会話は何だか慣れず、だからこそ少し興味が湧いてくるのだった。

身支度を整え、ハンモックも取り付けて寝る準備を終え、ふとユイスのハンモックと上を順に見上げる。

（……まあ、まず無さそうだし……そもそも私無いし……）

胸に手を当て、ため息をつくと携帯ライトを消して眠りについた。夜空の下、木々の上で黙々と作業するクロアは下から漏れていた光が消えたのに気が付き、地図に走らせていたペンを止めた。

そして、またすぐに手を動かし始める。

夜の樹林の上、木々の音に混じって忙しくペンは地図の上を走り、しばらくしてピタリと止まった。

周囲に神経を尖らせ、素早く鞆に物をしまつて身につける。

次の瞬間、単身やや右斜め前方へと勢い良く飛ぶ。

何かを追うように進路を右側の山頂の方に急速に曲げ、木々の上を弧を描き走るように移動する。

しかしすぐに急停止した。

「これは……余計な行動だった」

そう呟いて、クロアは木々の下に姿を消した。

「んん……」

身体を動かし、開く。

既に夜が明け、辺りは明るくなっていた。

「朝っ！」

勢い良く上体を起こして腕時計を確認する。

時刻は7時少し過ぎを示していた。

「し、7時か……」

長く寝すぎていた訳ではないと思うと少し安堵し、浮き上がってハンモックを離れと寝る前にあったユイスのハンモックが無い。

「いない？」

見渡すと、赤い紐のついた木の根元に荷物が置かれ、その近くに座り何かを書いているユイスを見つけた。

声を掛けるよりも先にユイスが顔を上げる。

「います。お早うございます」

「お、おはよう。……何してるの？」

手を動かしながらユイスが言う。

「地図に動物の巣になる樹洞やらがあるポイントを書き込んでる所。クロアが君に話した通りだよ」

そう言われて今日の予定の話を思い出した。

（そうだった）

ユイスが側に置いてある別の紙を持って言う。

「準備ができたと言ってよ。できてるのあるから」

「うん、分かった。クロアは？」

「探しに出てるよ」

え、と意外に思いながら声を上げる。

「じゃあ、私が一番最後……っていうかクロアは寝たの？」

「寝たよ。そこは流石にね」

ユイスは少し苦笑した。

「そっか……すぐ、準備するね」

何時間寝てたのか、とか聞きたい事はあったがそれはやめて身支度を整えることを優先した。

朝食に固形食料を取り、ユイスに声を掛けると、

「それじゃ三枚、これをよろしく」

浮かせて差し出された三枚の白い紙にはそれぞれ方角、ランダムな点やちよつとした走り書きが幾つも書かれていた。

「えっと……」

「ああ、見方はこつちを読んで貰えば良いよ。多分実際にやった方が早いから」

更にもう一枚出された紙には説明が書かれていた。

「その一枚目の紙の赤い点はこの木で、他の色のついた四隅のポイントに当たる木には既にそれに対応した紐をつけてあるから見れば分かると思う。大きい荷物は置いておいて良いよ、見とくから」  
「分かった」

言って、スツと真剣な表情になると地面から足を離して浮き上がる。

説明の書かれた紙を読みながら赤い紐のついた木の上に出た。

遠くを見渡すと暖色系の色が一定距離を開けて見え、それらは木の上部に取り付けられた紐。

（ここと三つの木に囲まれた区画）

地図の点の一つをまず見て、樹林を見て、

（多分あの辺り）

検討をつけた場所に向かって飛んだ。

下に降りてその辺りの木の幹を確認していく。

（んつと……あつた）

木の幹に樹洞があるのが目に入った。

近づいて樹洞に携帯ライトを翳して、内部を確認しようとするが、余り上手く見えない。

（見えない……でも、いる）

生き物がいるのを察知し、目が一瞬だけ見開くと、樹洞の中から寝ていたモモを浮いて引つ張り出した。

光に驚いて身動きも取れないモモはピタッと身体を丸くして固まっていた。

小さな体の大きなその目とミヤネは目が合う。

「やっぱりかわいい……」

思わず言葉が漏れ、表情も崩れた。

何か欲しい！　とか思いながらも、確認すればチップを付けられてはいない。

「ごめんね」

言って樹洞の中にモモを戻すとまた垂直に飛び上がる。

（次は……）

そして、紙を頼りにモモを始めとする生物の巣になりそうなポイントを順に回って行った。

一方、座って書き続けるユイスの元にはクロアが戻ってきていた。上から降りてくるのに気がついてユイスが声を掛ける。

「おかえり」

「ただいま。チップが見つかった」

平然とクロアが言って、懷からチップを出して見せた。

ユイスは少し驚く程度の反応をする。

「おー、どう見ても本物だね」

「実際モモに付けられていた。巣を探している以上余り関係は無いが」

「まあ、妥当性を考えてって所で何はともあれ運良く当たりだったと。この分だと既に他の受験生も偶然見つけててもおかしくはないね」

「そうだろうな。これを。ユイスが持っているか、ミヤネに渡すか、好きにしてくれ」

クロアからユイスはチップを受け取った。

「言うと思ったよ。じゃ、ミヤネに渡す方向でいくから」

するとクロアは無言で頷き、ユイスから新しい紙を受け取るとまた飛び上がった。それを見送って、チップを懷にしまうとポツリと呟き、

「『試験上の課題』要するに必須条件じゃないんだろっけどね」

紙にまた書き込みを始めた。

その後しばらくして今度は三枚分の紙を確認し終えたミヤネが戻ってくる。

両サイドの髪がふわりと揺れて、着地した。

表情には少し影が見えた。

「おかえりなさい」

「えっと、ただいま。チップは見つからなかった……」

「分かった。じゃこれ、君に渡しておくよ」

ユイスは懷からチップを取り出して見せた。

ミヤネは信じがたい物を見た様子で驚く。

「え？ ええ！？ 見つかったの！？」

淡々とユイスが言う。

「クロアが見つけた。まあ、試験官があるっていうんだからそれ自体が大嘘でもない限りは、絶対に見つかからないこともないだろうし、例えば期限ギリギリの切羽詰まった時にしか見つからないってものでもないでしょ」

言われてみればその通りだと思いながら言葉に少し詰まる。

「そ、それはそうだけど。で、でも何で私に……？」

「その方が良くからね」

ユイスはさっぱりとした表情で言った。

「何で、良いの？」

「説明が聞きたい？」

ミヤネは困惑して答える。

「理由も聞かずに受け取れないし……」

「僕らがやる気を維持できるから。それが理由」

「やる気を維持、できる？」

「チップを探し続けるやる気をね」

「……私がチップを持ってるってやる気が維持できるの？」

何故、と思いつながら尋ねた。

「そう。ただ、一枚目のチップだからっていうのもあるけど。今度はどうして？ かな」

更に質問されることを見越したユイスに、微妙に頷く。

「う……うん」

すると、ユイスはゆっくり立ち上がりミヤネに向いて口を開く。

「分かった。……正直に言つと、試験で合格を競う受験生同士として僕らはミヤネ・コリント、君を完全には信頼していない」



「な」

唐突に言われて絶句するが、ユイスは気にせず続ける。

「そして僕らは同時にこう推測している。『君も僕らを完全には信頼していないだろう』とね。そしてそれは妥当なことだと考えている」

ミヤネは黙ったまま、更にユイスは右の手にチップ乗せて見せて続ける。

「そう考えて、まず一枚目のチップが見つかったのが今の状態だ。一枚見つかったということは当然後二枚必要。でも、期限までに後二枚も見つかるかどうかは分からない。不確かな未来の状況下、中々二枚目が見つからず期限が近づいたらきつと焦るだろうね。『大変大変、見つからない！一枚しか無いのにどうしよう！』って。そうするとどうなるか。ここでまず君の行動を、しかもできるだけ悪いパターンで予測してみるんだ。仮に僕が持っていたとして、例えば君が僕から力ずくで奪おうとする、だとか、あるいは寝ている時にこっそり取って、そして僕らの前から姿を消すかもしれない」

「そんな事は」

ユイスが片手で制する。

「あくまで、仮定と想像の話だよ。そして次は僕らの行動を、やっぱりできるだけ悪いパターンを想像してみるんだ。僕がこうして紙に座標を書くのと、探すのを分担して、つまり協力してチップを見つけたとはいえ、実際に見つけたのはクロアだ。ミヤネが見つけた訳ではない。そうすると、悪い考えをする僕らは少なくとも君にチップを譲ろうとは思わないだろう」

それが当然か、と思いきこちなく頷く。

「う……ん……」

するとさつきよりもユイスの声が軽くなる。

「『四人全員色鉛筆は持っている。けど、紙は三枚しかない』こんな時どうしましょうか？ という聖の質問に君はどう答えた？」

いきなり尋ねられて、思い出しながら答える。

「え？　つと……四人で紙一枚ずつを一緒に使って三枚の絵を書くって答えたかな」

ユイスは驚いたような、嬉しそうな表情をする。

「へえ。僕は三枚の紙を更に四つにして一人三枚ずつに分けるって答えた」

「頭良いね」

「それはどうも。因みにクロアの答えはまた違う」

「何て？」

ミヤネは首を傾げた。

「クロアは聖にこう言ったんだそうだ。『俺は書かなくても大丈夫だから三人が書けば良い』って」

「へえー、優しいんだね」

クロアに話にくさを感じていたミヤネは意外そうに眉を上げた。  
「うん。一つ突っ込むと、でも大丈夫って何がどう大丈夫なのって感じでしょ？」

「そうだね。絵が嫌いななの？」

「クロアの場合好き嫌いの問題じゃなくて、とにかく幸せの沸点が凄く低いんだ」

ユイスが苦笑した。

「幸せの……沸点？」

何それ、と尋ねると、ユイスは少し考えて尋ねる。

「例えば、昼ごはん何食べる？　と誰かに聞かれた時君はどう答える？」

「食べたいものを言う、かな……？」

「そうそう、大体そういう答えが出る。けどクロアの最初に出る答えは『俺は昼食を食べなくても大丈夫』だ。理由は『昼食を食べなくても死ぬ訳ではないから』。それを冗談じゃなくて真顔で言う。

何かにつけて死ぬかどうかが判断基準ってこと。それでいて、自分を甘やかす方には働かない。それが幸せの沸点が低いって意味。控えめに見ても、少し変わってるでしょ？」

聞いているうちに微妙な表情をして突っ込む。

「少し、どころじゃないような……」

「今の二つの例を考え直してみると、三枚の紙についてのクロアの答えは、人に譲る優しさがある、と思えるけど、昼食の話になると優しさの問題とは本質的に違うと分かる」

ミヤネは怪訝そうに首を傾げる。

「うん……でも、優しいのには変わらない気がするけど？」

うん、とユイスが頷く。

「そういうことだね。少なくとも僕はクロアは優しい人間だと思っている。ここで話を戻そう。……悪い考えをする僕らは少なくとも君にチップを譲ろうとは思わないだろう。けど、そもそも僕らはそういう行動はしたくないし、したくないからそのための行動をする。それが君にチップを渡すということ。チップを渡せば姿を消すかもしれない君に渡してしまえば、僕らは心置きなく何かしら起きそうな未来を気にしなくて済む。君にチップを渡したからには、まだチップは一枚も見つかっていないという前提で、一枚ならチップがあるんだという妙な気の緩みも抱かず、全力でチップ探しを続けることができるし、探さざるを得ない。そういうわけで、やる気が維持できる。これがある意味君を考慮しない条件での僕らの勝手な考えだ」

「……うん、何か納得はできたけど……」

心の中で考えながら、ミヤネは何だか悲しい気分になり、少し目が潤む。

「でも……それって私は要らないってこと……？ やっぱ、じゃま……？」

そこへ丁度クロアが戻ってきて、尋ねる。

「ミヤネ・コリントはどうしたいんだ？」

ユイスはそれにほっと肩の力を抜き、ミヤネは気まずそうな声を上げる。

「あっ……」

質問の答え待ちの体勢に入って無言の二人に、一度息を吐く。

「……私、二人に迷惑を掛けてるし、一人で探した方が良いかな、  
って……ごめんなさい」

うーん、とユイスは頭を左手で触れる。

「あー、さっき言ったのは、もう一度いうけど君を考慮しない条件  
での僕らの勝手な考えであって、クロアが聞いているのはそういう事  
関係なしに純粹に君はどうしたいのか？ ってことだよ」

その言葉にミヤネは沈黙を貫き、伏目がちに目元を手で拭った。  
気まずそうにユイスが頭を掻きながら続ける。

「……また誘導するみたいになるから正直好きじゃないんだけど、  
例えば、僕らがどう思ってるか関係なく君は僕らと一緒に行動した  
いのかい？」

「……私は……できれば、一緒に探させて貰えるなら、探したい」

ミヤネの声は僅かに震えていた。

「なら、一緒に探そう」

クロアの提案にミヤネは語気を強める。

「でもっ！ そのチップが後二枚見つからなかったら！」

「三人のうち一人は、課題をクリアできない。そうなるね」

途中でユイスが台詞を重ねて言い、ミヤネは間の抜けた顔をする。

「は？」

「俺達は課題をクリアできなくても問題ない。だが、だからといっ  
て課題に手を抜く気もない」

クロアは真顔で言い切った。

「何……？」

ユイスが両手を開けて困った様子になる。

「つまりさ、自分で言うのも何だけど、結果として僕らはお人好し  
なんだよ」

「そもそも期限までに後二枚探せば良いだけだ。それでチップが後  
二枚見つからなかった場合はミヤネがそのチップを受け取れば良い」  
二人に言われて、ミヤネは手を強く握りしめて首を振る。

「何か、そんなの、全然納得いかないよ」

ユイスが片手でミヤネを示す。

「だったら納得行く方法を考えれば良い。君はその方法を知ってるよ」

「え……？」

「三枚の紙の話、君は何て答えた？」

ミヤネはさつき言ったことをもう一度小さめの声で言う。

「四人で紙一枚ずつを一緒に使って三枚の絵を書く……」

「それだよ」

「けど紙と違ってチップは一緒には」

ユイスの肯定にミヤネは反論しようとしたが、

「使えば良いんだ」

クロアがそう言ってミヤネは黙った。

クロアが続ける。

「試験官に三人で協力して探した結果見つけられたチップは一枚だったと事実をそのまま伝えれば良い」

「それでどうなるかは試験官次第だけだってね。……どうかな？」

ミヤネは一瞬停止して、

「はあ……君達、優しいようで冷たかったり、冷たいようで優しいような……何か腹立つ」

ため息をついて、手を握りしめた。

「良く似たような事を言われる」

「何度目かの経験の僕らだけど、正直、直す気は今のところ無くてね。悪いけど、満足するまで腹を立てると良いよ」

ドンと来い、とユイスは身構えた。

「しないよ！」

思わず突っ込んだ。

「ここも外れ……」

ミヤネは木の根元の洞を覗き込んで呟いた。

話し合った所、三人でとにかくチップを付けられているモモを探そうという意見に結局落ち着いた。

しかし何だかんだでチップを受け取らされたミヤネは本来喜ぶべき所のように、クロアとユイスとの関係上、全然喜べなかった。

やや吹っ切れて、こうなったら、と絶対チップを見つける！と意気込み、そう宣言も二人にして再び探し始めた。

が……しかし、クロアとユイスは中々疲れた様子を見せない上に、特にクロアはミヤネの倍を超す速度でユイスの座標を書いた紙を消化していくため、ミヤネは自分なりには頑張っているつもりだったが悔しさを感じずにはいられなかった。

しかも、その二人はもしチップが見つからなかった場合、一緒に協力して探したと試験官に伝えてもそれが認められなかった後は、ミヤネの課題合格を優先するような気がして、というか絶対そうしそうで、尚更だった。

ふざけているのか、といえば二人の探索に取り組む姿勢は信じられないぐらいストイックで真剣そのもの。

そもそもユイスが書く紙の四隅のポイントになっている紐は全てクロアがこの日の未明に取り付けたもので、完全に探索環境を用意されている形の上で、ミヤネは探していた。

（何かやっぱり腹立つ！）

無性に腹が立って仕方ない。

自分の探す量がクロアに比べて明らかに少ないことに文句の一つも二人は言わないので、また怒らないのか、というような質問をすれば、また、

「そんなに怒って欲しいなら……怒ろうか……？」

と微妙に心配するような様子で言うものだから、そういうやり取りも含めて、自分が凄く幼いような気がして、だけど二人は同い年で、とにかく余計に腹が立って仕方なかった。

最初に拠点にしていたポイントは午後、夜になるのに備え、一度別の場所に移動を済ませた。

ユイスが相変わらず紙に書き込みを続ける一方、一番最初に疲れを見せたミヤネは近くの木にもたれかかって休んでいた。

声を掛ける事自体が作業妨害になるような気がしてならず、とても話しかけにくかったが、話しかけないのも居心地が悪く、

「もし今日一枚もチップが見つからなかったらどうするつもりだった？」

と尋ねた。

手を動かしながらユイスが答える。

「んー、どうするも、探すのを続けたと思うよ。考えると色々あるけど、やっぱり木の枝みたいな簡単に見えるような所にはないだろうから、樹洞とか動物、でなければ地面に埋めてるか、湖の中とかが確率が高いと考えざるをえないし、見つからないと焦っても探す方針は大して変わらないだろう」

「……そっか」

相槌を打った。

（今日午前中に見つからなくて、午後も見つからなかったら私はどうだったかな……）

実物を見せられて、持たされて、話し合ったからこそそれなりに落ち着いているが、もし見つからないまま三日目を迎えたら、と思うと複雑だった。

ユイスが不意に話し始める。

「それにチップ探しが試験上の課題ということを考えると、チップが見つかる、見つかった、というその事実はその過程ほどには重要じゃないと思うよ」

「どういうこと？」

ユイスは説明を続ける。

「『試験上の課題』という表現がチップを見つけるのは課題であっ

て、試験の評価は課題を含みはするけど、また別だと考えられると、そういうこと」

「そっか、そういうことね」

「極端な話例えば、試験期間中に一生懸命探し続けてようやくチップを見つけたA受験生がいて、大して探しもせず、探す気もなかったB受験生がA受験のチップを奪い取ったとして、そのことを試験官が知ってたら……。B受験生は、確かに課題はクリアしててもまず確実に不合格になりそうでしょ。他人の物を取って物事を済ませる人は明らかに数人で協力して行動する探索士に不適格だ」

その仮定の話が、さっき聞いた悪い想像のケースと似ていて、若干微妙な顔をする。

「ろ、露骨ね……。でも、試験官の姿全然見ないし、本当に見てるのかな？」

「試験が終わったなら試験官に確認してみれば分かるんじゃないかな」「それは……。そうだけど」

ユイスは飄々と纏めに入る。

「チップを見つけるのは大事、それに取り組む姿勢も大事、そして何よりきちんと探さなければまず見つからない」

「……そうだね。そろそろ、また探しに行くよ」

ミヤネが立ち上がると、ユイスが紙を浮かして渡す。

「じゃあ、これ。いつてらっしゃい」

「行ってきます」

そう言って受け取ったミヤネは飛び上がった。

その後、程なくして夜になり、そしてまた夜が明け、三日目の午後。

変わらずモモ探しを続けていたミヤネは、思わず声を上げた。

「あったあつ！」

樹洞から引つ張り出したモモの首に確かに紐を通されたチップが付けられていた。



見つけられた喜びに胸が熱くなる。

「ありがとう、ありがとね！ 寝てていいよ！」

チップを取り外して、思わずモモにそう話しかけて巢に戻した。  
そのまま急いで荷物を置いてある拠点に戻るとそこにはクロアと  
ユイスの他に一人の受験生がいた。

そつと降りていくと、

「分かった。教えてくれてありがとう。頑張つて探してみるよ」

「ああ。健闘を祈る」

「頑張れ！」

丁度その受験生は去っていった。

「ただいま。……今のは？」

戻ってきたミヤネに二人が振り向いて返事をする。

「おかえりなさい」

「おかえりなさい。今のは俺が探している途中会った受験生だ。情報  
を教えて、ユイスに渡していた実物も見せていた所だった」

クロアは極普通にそう説明し、ミヤネはそっか、と思いながらポ  
ケットに手を入れる。

「そうなんだ。えつと、私三つ目のチップ見つけたから。これ渡す  
ね」

少し気恥ずかしさを感じながら手に取って渡すと、迷いなくクロ  
アはそれを手に取る。

「ああ。確かに受け取った。ありがとう。これで三人分揃ったな」

「そうだね」

ユイスはあつさり言い、

「うん。えつと……」

ミヤネは正直物足りない気分だった。

（それだけ……？）

するとユイスは荷物を整理し始め、クロアは元から整っていた荷  
物を背負って飛び上がって行った。

ミヤネは我に返ると、ユイスの後ろから声を掛ける。

「……片付けて、どうするの？」

「先に行ったクロアの紐の回収を手伝って、集合場所の湖に移動、かな」

言いながらも荷物の準備が整う。

「わ、分かった。じゃあ私も」

どこか所在無さげにミヤネもとりあえず整っていた荷物を背負うと、ユイスも荷物を背負って、ほぼ同時に木々の上に出た。

「じゃ、あっちの方の紐片付けに行くから」

「なら私はあっちを」

そして、二人はそれぞれの方向に飛んで目印として木に取り付けた紐の片付けに行く。

一つ一つ回り紐を回収し終わるとミヤネは辺り見渡す。  
すると湖の方向へと飛んで行く二つの姿が見え、同じ方向に向かった。

途中で飛びながらクロアとユイスに合流し、

「これ」

「ああ。ありがとう」

紐をクロアに渡した。

そのまま湖に到着し、ゆっくり湖畔に降り立った。

湖の周囲には他に人はいなかった。着いて早々ユイスとクロアは荷物を下ろし、水筒の水を口含んで口を濯ぎ始める。

（え、もしかして……）

二人のその行動にミヤネは次の動きが何となく予想できた。二人は吐き出して水筒を片付け、

「寝よう。お休みなさい」

ユイスはそう独り言のように言って、草の上に横になって速攻目を閉じて動かなくなった。

（早っ！）

唖然とすると、クロアは急速に壮絶に眠そうな目になりながらミヤネを向いて言う。

「俺も寝る。お休みなさい」

「お、お休みなさい」

慌てて返事をするクローアは荷物の近くに横になり、やはり動かなくなつた。

「そっか、疲れてるんだよね……」

少し心に引つかかる感覚がしていたミヤネは、ほつとして呟いた。  
(当たり前か……。そういえば、私も……)

どつと疲れを感じ、口を濯いでからその場に横になった。

チップを見つけ出した三人はそのことを喜ぶというより、ようやく安心して寝れるとでも言う風で、夜になる少し前にあつという間に眠りに落ちた。

レーゲ樹林の上には雲が覆い、星明りも届かず暗くなった中、クローアは突如として目を開けた。

ゆっくり上体を起こし、音を立てずに荷物の側面から携帯ライトを取り出して迷わず点灯する。

ぼんやりとした明りが近くを照らし、じつとしたまま身体は動かさない。

数秒経つと、林の方に明りが灯り、それが近づいてくる。

携帯ライトを持って歩いて間近にやってきたのは長身の人物。

「やれやれ、それで寝れているのですか？」

クローアは立ち上がる。

「先程までは寝ていました」

「つまり私が近づいたから起きたと」

「はい。エスト試験官、試験中に受験生と話してもよろしいのですか？」

尋ねられて、エストが答える。

「話してはならないという規定はありませんので問題ありません」

「そうですか。何か用でしょうか？」

エストは目を細める。

「あなたが起きた時点で特に用はありませんが……。強いて尋ねるなら、他の受験生が近づいてきたらあなたはどうするつもりですか」  
「同じ課題に取り組む受験生として話をするつもりです。話し次第では、この試験ですから、チップ探しに協力します。話にならない場合は少し困りますが」

その答えに納得し、

「なるほど。……では仮に私がその話にならない受験生で、実力行使に動く場合はどうしますか」

エストはサツと構えを取った。

クロアは直立したまま言う。

「一人であれば単独で移動します。しかし二人がいるのでまず二人を起こします。しかし、二人が何故か起きない場合は、こうです」

そして最後に構えを取った。

すると今度は、エストは構えを解いた。

「良く分かりました。結構です。寝ている女性に、というのはどうやらあなた……あなた達には無用の話のようですね。では、お休みなさい」

「お休みなさい」

クロアが挨拶を返すとエストは携帯ライトを消して空に飛び上がり去って行った。

「担当があるとしたら、主任試験官だったのかな」

隣からの小さな声に、クロアが答える。

「そうかもしれない」

「ところで、凄い眠かったからすぐ寝たけど、何か気の利いた言葉でも言ったらどう？ いつも干渉とはいえず。一緒に探す目標は達成したー、とか言ったら多分内心涙目になるよ」

「……少なくともそれは言わないでおこう」

「ははっ。じゃ、悪いけどお休み」

ユイスは空笑いして、寝た。

「ああ。お休みなさい」

言って、ユイスはライトの明りを消して、荷物を背もたれに浅い眠りについた。

刻々と時間が過ぎて深夜を回った頃、ミヤネの側からクロアとユイスの姿は荷物を残して消えていた。

湖畔付近の林の木の枝の上に乗し、息を潜める人物に突然声が掛かる。

「どうも、こんばんは」

よつと、と横からユイスが現れると、

「なっ」

その少年は声の方に驚いて振り向き、

「こんばんは」

スツとその反対側から現れたクロアが声を掛けた。

少年は反射的に枝から交代するように宙に滞空した。

真っ暗で目が殆ど効かない中、クロアとユイスは迷わずライトを点け、その場を明るくする。

少年は動揺する。

「い、一体何だ」

「一体何だ、その問いの答えはね」

そう言ってユイスは飄々と早口に語り始める。

「例えば、チップを見付け出した受験生がいるらしいという情報をどこかで得て、更にどうやらモモにチップが付けられているらしいということも分かった受験生がいるとする。彼は自分でも探してはみたものの残念ながら見つかることなく夜になってしまいました。

そして彼は夜が明けてから午後三時までの試験期間最後の日中に見つかるかどうか不安で、今晚が試験期間中最後の夜だとふと思いましたが。とまあそんな受験生がいるかもしれない、と思ってちよつと来てみた所かな」

続けてクロアが言う。

「俺達はチップを所持していて期限まで時間が空いている」  
じっと聞いていた少年の目には困惑の色が浮かぶ。

「何が言いたい……？」

左右に携帯ライトを振りながら、

「時間に余裕のある人手がここにあつて、もしチップが見つからなくて君が困っているのなら、寧ろ君は何を言いたい？ と質問を質問で返すよ。悪いけどこれ、誘導してるからね」

最後にユイスは真剣な表情になって言った。

一瞬それに怯み、少年は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「……探すのを手伝って欲しい、とでも言えばいいのか……？」

平然とユイスは切り返す。

「手伝いが必要ない、言いたくない。なら言う必要無いね」

「君はどうしたいんだ？」

迷った少年は、重い息を吐く。

最早頭の片隅で考えていた行動を起こす気は失せていた。

「う……はぁ。……チップを探すのに、手を貸して欲しい」

「ああ。協力しよう」

「良いよ。じゃ、早速始めようか」

余りの軽さに少年が啞然としていると、ほらこつちだよ、とライトを持ったまま二人は少年を招くように湖畔に向かって行った。

「宣言通り、ですか」

湖畔からかなり離れた樹林の木の上で、暗視スコープを通して様子を監視していたエストの呟きは木々の音に紛れて消えた。

《報告します。新たに受験生一名が湖畔に向かっていている模様です》  
通信が入り、簡潔に答える。

「了解しました」

暗視スコープから目を外すと、暗闇に紛れたままその場を後にした。

それからしばらくして、空の様子が変わり始めた。  
風の流れの変化によって樹林を覆っていた雲は流され、星明りが  
辺りを照らす。

耳に入ってくる話し声と光に、湖畔で爆睡していたミヤネの瞼が  
動く。

「ん……」

ゆっくり身体を起こして光がついている方を見る。

クロアとユイスの他に、二人の受験生と合わせて四人がやや離れた所で、地図を光で照らして囲みながら話をしていた。

そつと立ち上がり近づいていくと、

「お早うございます」

「おはようございます」

二人はそう言った。

「お、おはよう……？」

その言葉はまだ早いような、とミヤネは微妙な表情で言ったが、  
残る二人も似たような表情だった。

徐にクロアが立ち上がってミヤネに近づいて言う。

「この二人のチップ探しを協力することになった」

後ろでまた話が始まったのを見ながら、まだ頭はぼんやりして  
いた。

「そ、そう……なんだ。私も、手伝おうか？」

「手伝いたいなら手伝うと良い。俺達は手伝うと決めた」

そう言ってクロアは元の場所に戻っていった。

ミヤネは一気に意識がはつきりしてくる。

（……まただ。この感じ……）

そつと胸に手を当てる。

靄がかかったような、何だか少しだけ嫌な感触。  
はつきり手伝って欲しいと言われたのではない。  
手伝うかどうかは自分の意思の問題。

突き放されたような、そんな気がした。

「手伝いたいなら手伝うと良い」

その言葉は裏を返せば、

「手伝いたくなければ手伝わなくて良い」

という意味にも同時に感じられる。

自分は手伝いたいのかと心に聞くと、底の方には戸惑いと躊躇があった。良く知らない人に協力するのは、と。

（私だって二人に殆ど手伝って貰ったようなもの……それなのに）  
心にそういう気持ちがあったことが嫌だった。

その嫌な感じを振り払うために、だから手伝おう、それも何かひっかかる気がして。

最初から、はつきり手伝って欲しいと言ってくれた方が楽だったのに。

それなのに彼らの問いは、どうしたいのか、とそればかり。

それでもミヤネは喉に詰まるような感触をぐつと堪えて、

「私も、手伝うよ」

そう言った。

「……あの、わざわざありがとう」

「お願い、します」

二人は少しぎこちない様子でミヤネを見て言った。

「う、うん……！」

一瞬目を見張り、頷いたミヤネの表情は晴れていた。  
少し、嬉しくて。

気がつけば何とやら、四日目、試験期間最後の日中となったレー  
ゲ樹林はそれまでとは違った。

ラストスパートといえはそうかもしれないが、十数人の受験生が  
複数のグループに別れ、それぞれ地図を持ち、樹林外側の山傾斜部  
の木々に取り付けた目印を元に、手分けして搜索をしていた。



湖畔の上空で、スコープを持った一人の試験官が言う。

「現在の回収数は十一、中々優秀ですね。受験初回組でこの状況を実際に見るのは初めてです」

スコープを覗き込みながらエストが言う。

「過去に事例はあります。これもその事例のうちの一つ。今日の行動だけではなく、全体的な行動に評価の重点を置きます。ただ協力すれば良いというものでもありません」

試験官は顔をひきつらせ、

「……ええ。そうでないと自分は受かってないと思います」

「私事です」

エストは表情一つ変え無かった。

試験官は気まづくなって黙った。

昼も過ぎ、集合場所である湖畔には搜索を諦めた受験生や、数少ないチップを見つけ出していた受験生が集まり始める。

そして、タイムリミットの午後三時。

四十人から二人少ない三十八人の受験生が集合した。

エストが時計の針が午後三時を示したのを確認して通る声で言う。

「只今を以て試験時間を終了とします。それではまず時計を前の箱に返却して下さい」

まず時計、と言われて荷物を負った受験生達はそれぞれ所定の箱に返却した。

「次に、所持している場合は回収したチップを私に提出して下さい」とすると、一瞬場が静まり返った。

前の方にいたクロアがユイスとミヤネに声を掛ける。

「行こう」

一番最初に迷わず足を踏み出し、ユイスもそれに続きエストの元へ歩き始める。

慌ててミヤネも続き、それに他のチップを回収した受験生も動き始めた。

目の前につくと、クロアが言う。

「提出する前にコリント、エサリア、クローツの三名は試験官に伝えたい事があります」

「聞きましょう。どうぞ」

エストは首肯した。

「ありがとうございます」

するとほぼ同時にクロアとユイスはミヤネの方を見た。

（え？ え？）

ミヤネがキョトンとして、二人を交互に見ると、ユイスがあれだよあれ、と口パクして、クロアは黙って頷いた。

一歩前に出て、恐る恐る小さめの声で言う。

「えっと、あの……私達三人は、協力し、三枚のチップを、回収しました」

すかさず二人ははつきりと口を揃える。

「右に同じです」「右に同じです」

ミヤネは目を見張って驚き、エストは僅かに眉を上げる。

「そうですか。分かりました。では提出して下さい」

「ユイス・エサリアです」

「クロア・クローツです」

「ミヤネ・コリントです」

そして三人は順にエストにチップを提出した。

他の受験生もチップを提出し終えた所で、エストが呼びかける。

「試験結果は郵送で通達します。それでは飛空艇の到着次第、ホーム上空に帰還します」

その瞬間、受験生達の小さな歓声上がり、かくしてレーゲ樹林での試験は終了した。

帰りの道程は湖畔上空に到着した人員輸送用の飛空艇に乗ることとなり、座席についた受験生達の多くは緊張も解け、疲れきった表情であっという間に寝入った。

それをよそに、飛空艇後部にある硝子張りの展望室の一角でユイスが尋ねる。

「さて、何かな」

ミヤネは思わず口を開く。

「えっと……ちゃんとお礼を言っただけだから、言っておきたくて……」

なるほど、と二人は納得したような表情をした。

ミヤネが頭を下げる。

「二人共、本当にありがとうございましたっ」

言ってゆっくり顔を上げると、

「どういたしまして。こちらこそ一緒に探してくれて助かった」

クロアははつきりと、ユイスは軽めに言う。

「どういたしまして。一緒に探してくれてありがとうございました」  
「……うん」

満足したように小さく頷いた。

微妙な沈黙が流れる。

クロアとユイスは特にその空気を意に介さない様子で硝子張りを通して見える風景に目をやった。

しかし、ミヤネは耐え切れず、

「あのさ、えっと……また会えるかな？」

とりあえずそう言っただけ、

（ちよっと、何言っただけの私！）

内心突っ込みながら恥ずかしさで顔が赤くなる。

それに全然気が付かない振りをするユイスがうーんと唸って口を開き、

「生きていればまたいつか会うことはあるよ、なんて、そういうことじゃなくて？」

はは、と適当にはぐらかした。ミヤネはぱくぱく口を動かすが声が出ない。

「次は、上で会える」

「へ？」

クロアの言葉に虚をつかれた。

へえ、とユイスは面白そうに尋ねる。

「それは確信？」

クロアは頷く。

「そう考えて良い。不合格になる気がしない」

「結果が不合格でなければ、合格、か。なるほど。とりあえず僕は眠くてさ、戻るよ」

言ってユイスは手を上げて通路に向かって行った。

ミヤネはますます微妙な空気になったような気がした。

「う、あー……私も、席に戻るね」

分かった、とクロアは頷きミヤネもユイスの後に続いた。

（何だろう……話にくい……。眠い）

試験中、休息時以外は殆ど探してばかりだったミヤネは実際それ程二人と話していない。

このまま話さず終わるのは何か物足り無いような気がして、それでいて何を話したら良いのかもよく分からなかった。

飛空艇の移動は一時間も掛からずに終了した。

ホーム上空に到着するとエストが自由解散の号令を掛け、受験生達は飛空艇を降りた。

眼下には一万戸を超える木造の建物が間隔を空けて建ち並び、受験生達はそれぞれの寮に戻り始める。

一緒に降りた三人は互いに挨拶をする。

「クロア、ミヤネ、それじゃまたね」

「ああ、また。ミヤネも」

二人はきちんとミヤネにも手を上げて別々の方向に飛んで行き、  
「またね！」

ミヤネは大きめの声を掛けた。

言葉通りにまた会えれば、そう思いながら。

遙か空高く、半球状の外観をした硝子張りの間。

すらりと背の高い人物は悠然と浮きながら目の前の少年に問いかける。

「クロア・クローツよ、探索士を志望する動機は何か」

煌めく白銀の髪は長く、目は澄み渡る空よりも澄んだ蒼。

柔らかな余裕を持った袖と裾のある服は統一された白。殆ど飾りの気とは無縁の服装でありながら、儼かな存在感がその場を覆っていた。

その人物に向かい合うクロアは答える。

「レムリア様が探索士という職業に課した制約が多いからです」

レムリアは瞬きをして、一つ間を開けて促す。

「説明を続けて貰えるか」

「はい」

クロアは首肯した。

「レムリア真国にとって、探索士という職業は根源的に必須ではありません」

日々、緩やかに移りゆく中、期の節目は自然と人々の移動が多くなり慌ただしい。

大きな荷物の移動を済ませ、一年を過ごした寮で皆とお別れ会をし、ミヤネは互いを励まし合った。

そして出立が最後になったミヤネは鞆を手に寮の前で女性と向かい合っていた。

「リーズ聖、一年間ありがとうございました」

リーズと呼ばれた女性は優しくミヤネを抱きしめる。

「はい、どういたしまして。探索士は大変だけど頑張っただけ。ミヤネならきっと大丈夫」

「はいっ、頑張ります。聖、私必ず手紙出すからね」

ミヤネは抱きつき返して言った。リーズはミヤネの頭を撫でながらそっと離れる。

「ええ、楽しみに待ってます。……また会いに来てね」

「はい！ では、行ってきます！」

元気よく答えると手を振りながら浮き上がり、リーズも手を振って見送る。

「行ってらっしゃい」

「行ってきますー！」

リーズを向いたまましばらく手を振り続けながら後ろに進み、リーズの姿が小さくなってようやくミヤネは聳え建つ超高層巨大建造物を向いた。

行き先は真央柱。

その最上層で、ユイスは普段通りに話していた。

「志望動機、というと。そうですね、当初の自分の意思是余り関係なくクロア・クローツが探索士を目指すことにしたから、そして合格した以上、例えば、来るべき日に向けて再び真国が行く先とするまだ見ぬ地を探す力になりたいと思うから、とか、挙げれば他にもありますが、特にこの二つです」

はは、とはぐらかすようにしてさっぱりした笑みを浮かべた。それを聞いたレムリアは数瞬置いて、口元にそっと手を当て、くつくと笑い始める。

「なるほどなるほど、真にお主達は聖達から聞いていた通り、興味深い。……敢えて多くは語るまい。と、それだけでは寂しいものがあるだろう。このような志望動機を先程聞いた。『ユイス・エサリアが探索士課程試験を受験すると言ったので、私はそれにとにかくついていくために受験してこうして受かりました。理由はそれだけで、特に探索士を志望してはいませんが探索士課程には絶対進学します』とな」

面白そうにレムリアはそう言い、ユイスは頭に手を当てて軽く言

う。

「はは、そうですね。その答えは本当に正直ですね。因みに僕はそれ、正直に嬉しいですから」

「ほう。お主の正直さも引け劣らず何とやら、であるな」

その頃、真央柱の地上エントランスにミヤネはようやく到着していた。

硝子張りの天井、全体的に広々とした広間を奥に進み、真央柱本体に通じるゲートの前に辿りつくつと、すぐに職員が近づいて来る。

「パスポートを提示して下さい」

「はっ、はい」

真央柱の通行許可証、パスポートを緊張気味に出して見せた。

「結構です。ゲートを通り、右手に進んで下さい」

確認が取れると職員は手で促した。

先に進んでも特段先ほどまでと見た目に大きな変化はない。

右手に進んでいくと間もなく地上と空を行き来するための幾つものエレベーターがあった。

職員の案内に従いミヤネは直通のエレベーターに乗り込む。

扉が閉まると動き始め、急激に加速していき、思わず目を輝かせる。

「わああ」

エレベーターからは真央柱の外が見え、高速で地上から離れていった。

「三十秒後、無重力圏に突入します。注意して下さい」

少しして今度は減速し始め機械音声が流れた。

三十秒後、警告通り無重力状態になり、エレベーターにつけていた両足が力も使わずにふわりと浮きあがり、

「もう外気圏なんだ……すごい」

咄嗟に手すりに掴まりながら声を上げた。

そして間もなくエレベーターは停止し扉が開いた。鞆を持って飛

んで出るとそこには制服を着た人々が飛び交っていた。

「探索士課程後期試験合格者のミヤネ・コリントですね」

「あ、はい」

「では、こちらに付いてきて下さい」

不意に近づいてきた職員にそう言われてミヤネは従った。一本のポールのある円形にくり抜かれた穴を通って更に上層に上がり、途中何隻も飛空艇が停泊している様子が見えた。

「飛空艇がいっぱい……」

ミヤネはキョロキョロ見回しながら職員の後についていく。

そして最上層の廊下と思われる場所に辿り着き、大きな両開きの扉の前に案内された。

「中へどうぞ」

「は、はい」

促されて扉を開けて中に入ると、

「うええっ!？」

叫び声を上げた。

がらんとした広間の中心に浮くレムリアはぱくぱく口を開いているミヤネに、

「近くに来なさい」

特に気にせず声を掛け、手招きした。

「はっ、はいっ! 申し訳ありません!」

我に返ったミヤネは急いで飛んでレムリアに近づいた。

「慌てずとも良い。これは試験ではないから安心して良い。……さて。ミヤネ・コリントよ、探索士を志望する動機は何か?」

レムリアは落ち着かせるように尋ねた。

「……はい。私が探索士を志望する動機は……。国の外がどうなっているのか、どうしても見てみたい、そう思っ。探索士が撮った写真や描いた絵を見て、感動しました。私が感動したように、私も同じように探索士になって誰かを感動させられたらって……上手く言えてないですが、それが志望動機です」



「ふむ。……国の外を見るために、この国を出ようとは思わないのだな？」

レムリアは冷静に尋ねた。ミヤネは気まずそうに言う。

「それは……はい。二度と戻れないのは……嫌です。私は真国が、真国の皆が好きなので……」

それを聞いてレムリアは優しい表情になる。

「そうか、分かった。……こちらに付いてきなさい」

「は、はいっ」

硝子張りの突き当りに移動すると、そこには円盤型の乗り物が停まっていた。扉を開けてそれにレムリアが乗り移り、ミヤネにも乗るように勧めた。

「失礼、します」

荷物を手に控えめに乗り移ると、

「では、行こう」

一瞬にして眼前には浮遊島が迫っていた。

「ええええっ!？」

叫び声を上げて後ろを振り返ると、遠くに真央柱の上層付近が小さく見えた。

「探索士試験合格者は私が少し質問をするついでに、こうして送ることにしている。飛空艇の方が良かったか？」

「い、いえ、そんな事ありません」

一瞬にして超高速で移動していた事に混乱しながら勢い良くミヤネは首を振った。

少し速度は落ちたものの尚高速で浮遊島の透明な海の上を進み、あっという間に海岸に着いた。

「あの目の前に見える建物がミヤネの新たな学舎であり、生活の場所。寄り道せずに行けるな？」

レムリアは首を僅かに傾げて確認した。

「は、はい!」

「良い返事だ。それでは行きなさい」

ミヤネは鞆ごと強制的に円盤から浮いて海岸に降ろされた。

レムリアがそつと手を上げるのを見ると、次の瞬間レムリアはそこから忽然と姿を消していた。

「び、びっくりした……」

ミヤネは肩の力を抜いてそう声を漏らした。

気がつけば地に足が付いていて、重力が働いているのを感じながら、ゆっくり自分の向かうべき建物に向き直る。

「よし、行こう!」

いよいよ探索士を目指すミヤネの新たな生活が、始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1263w/>

---

絶海のレムリア

2011年11月27日15時34分発行